

324
75

書洞堂大學講師 忽滑谷快天著

鍊心
脩道
參禪
道話

東京 井刈堂發行

東京 井刈堂發行

鍊心
脩道

參
禪
道
話

明治
47 1 15
東京

は し が き

はしがき
古來禪門の宗師多くは禪の根本義を拈提して人をして齋直に向上の一路に進ましむるの手段に急にして、吾等が日常の生活に禪理を應用し、以て身を修め徳を樹つるの工夫に於て聊か缺くる所あるを免れず。是を以て禪録なるもの多くは幽玄高尚なる文字に充つるも、吾等が生平の云爲に切實ならざるの憾み無しとせず。殊に婦女幼童の如き智力の味劣なる者にありては禪を解するを極めて難しとする所なり。
間ま禪に參じ道を辨へたりと稱する人にありても動もすれば禪を以て出世間の道と爲し、人生の實務と相關せざるが如く思惟し、或は單に隱逸を事とするあり、或は單に豪放

磊落を主とするあり、或は富貴を唾棄し、快樂を土芥に比し、以て得たりとするあり。是に於て乎、親子の情を柔らげ、夫婦の愛を増し、君臣の義を立つるが如きは禪の關する所に非ずと誤解する者あるに至れり。予常に以爲らく、禪は治心の術なれば修身の工夫に純ならざるべからず、然らざれば則ち禪理は如何に幽玄なるも畢竟空想たるに過ぎざらんとす。乃ち此缺點を補はんと欲して茲に禪理を經とし、道義を緯とし、古今の説話を交錯して參禪道話一篇を草す。其謂ふ所、極めて卑近にして、説く所、亦努めて人情の實際に近からんとを期せり。これ學薄く識淺き婦女童蒙をして禪の何たるを解せしめ、依て以て其身を修め、其家を齊へしめんが爲なり。

希ふ所は上、祖恩の萬一に報じ下、四民同胞の風教に裨益するあらんとを。

明治四十一年一月一日

忽滑谷快天識

注意六則

- 一、本書分つて上下二篇となす、上篇を開示篇と名け、下篇を悟入篇と名く。
- 二、開示、悟入は法華經の文を借るのみ、別に意あるに非ず。上下二篇の代名たるに過ぎず。
- 三、本書に引く所の古今の説話は刊行せる文書より抄出せるあり、單に傳説に過ぎざるあり、著書の自作に係るありて一準し難し。
- 四、本書の説話は史實として引用せるに非ず、禪理解明の方便に供するに過ぎず。
- 五、世の抽象的なる學理を好まざる者に對しては具體的なる説話を以て之を教へざるべからず。これ著書が本書を草する所以なり。
- 六、本書は言語談笑の間、自然に道に入り、禪を修めしめんことを期するもの、從て雜談滑稽を加へ以て讀者の興味を喚起するの止むを得ざるものあり。

鍊心參禪道話目次

開示編

目次	
一、	一青年の書簡……………支那留學生の話……………一
二、	修道に對する誤解……………支那留學生の話……………三
三、	超人の道……………五
四、	道とは何ぞや……………周茂叔の話……………六
五、	人の道其一……………指物屋の話……………八
六、	人の道其二……………理髮店の話……………二
七、	人の道其三……………三
八、	人の道其四……………源義朝殺害の話……………四
九、	平常心是道……………眞宗信者の話……………三
十、	活ける宗教……………水戸義公の話……………三

目	次
十一、無心にして道に合す……………	二五
十二、無心の妙用……………	二六
十三、學問宗教の病…………… 儒者偏執の話……………	二九
十四、飽衣暖衣以足……………	三二
十五、貧にして富み求めずして得…………… 神田香平の話……………	三五
十六、本心の主人公…………… 僧侶女郎買の話……………	三七
十七、其好む所生命よりも甚し…………… 二書生の話……………	三九
十八、劉伶は酒に死し石崇は財に死す……………	四〇
十九、忘八…………… 那先比丘の話……………	四二
二十、道徳的習慣…………… ビュポンの話……………	四四
二十一、佛陀の模倣……………	四五
二十二、精神の休養其一…………… 三猿會心の話……………	四七
二十三、精神の休養其二……………	四八
二十四、精神の休養其三……………	五〇

目	次
二十五、精神の平和其一…………… 蔡君謨の話……………	六〇
二十六、精神の平和其二…………… 二程子の話……………	六三
二十七、放下著其一…………… 本多作左衛門の話……………	六四
二十八、放下著其二…………… 一老僧の話……………	六五
二十九、放下著其三…………… 黒氏梵志の話……………	六七
三十、放下著其四…………… 七賢人の話……………	六九
三十一、放下著其五…………… 夜雨禪師の話……………	七一
三十二、放下著其六…………… 松平伊豆守の話……………	七三
三十三、放下著其七……………	七四
三十四、放下著其八……………	七五
三十五、放下著其九…………… 蜀山人の話……………	七六
三十六、聖賢即佛菩薩…………… 司馬溫公解禪の偈……………	七八
三十七、世間即出世間……………	八〇
三十八、直心是道場…………… 和泉屋甚助の話……………	八二

三十九、皆歸妙法……中澤道二の話……………八七

悟入編

目	次
一、自力悟入其一……………輕卒漢の話……………九二	
二、自力悟入其二……………大盜の話……………九三	
三、鍊心の工夫其一……………勝海舟の話……………九七	
四、鍊心の工夫其二……………盤桂禪師の話……………一〇〇	
五、鍊心の工夫其三……………山岡鐵舟の話……………一〇五	
六、鍊心の工夫其四…………………………一〇九	
七、鍊心の工夫其五…………………………一一三	
八、悟入の淺深其一…………………………一一五	
九、悟入の淺深其二……………大儒の話……………一二八	
十、悟入の淺深其三……………川井東村の話……………一三〇	
十一、悟入の淺深其四…………………………一三四	

目	次
十二、寄與貢獻……………関子齋の話……………一三七	
十三、反省の法其一……………孝子喜助の話……………一三三	
十四、反省の法其二……………龍溪禪師の話……………一三四	
十五、反省の法其三…………………………一三九	
十六、四休四味……………孫昉の話……………一四二	
十七、宋儒の悟入……………羅大經の話……………一四三	
十八、絶對の靈光……………黃庭堅の話……………一四六	
十九、石田梅巖の行狀其一…………………………一四九	
二十、石田梅巖の行狀其二…………………………一五一	
二十一、石田梅巖の行狀其三…………………………一五三	
二十二、石田梅巖の行狀其四…………………………一五四	
二十三、石田梅巖の行狀其五…………………………一五六	

修鍊心參禪道話目次終

修鍊心參禪道話

忽滑谷快天述

開示編

一、青年の書簡

近頃我國民の所有階級から修養とか修道とかいふ聲を聞くやうになりました。『悖徳』の権化とまで思はれたる一部の政治家や、金錢を生命以上のものと心得たる一類の商人までが精神の鍛錬に志す者あるは即ち我國民の向上進歩で、至極望まじき次第であります。併し修養とか修道とか頻りに喋々しつゝある多くの人々の中には非常なる誤解に陥て居る者があるやうに思はれます。今一例を擧て御話致しませう。开は本年十月十日に山梨地方なる一青年の書狀が私方へ達しました。書面に陳べたる所に依ると、右の青年は農

家に生れ、本年二十三歳で、血氣の若者わかものでありますが、不幸にして體質の虚弱なるに加へて神経質であり、従つて生平沈鬱にして社交を好まず、熟ら吾身の將來を慮れば、何となく闇黒悲痛の感が湧き出る所から、漸く宗教に志すやうになりまして、私の著した『禪の妙味』なども繙き、書籍を友として修道の工夫に着手致したと申すことであります。然れども農業其他の俗務に忙殺せられて修道が意の如くならぬので、四條の迷路まよひに踏み入つたと申すのであります。其四條とは原文の儘を掲げますと。

一、篤志の名僧智識を尋ね弟子となりて修道する事。

但し此れは全然出家となること。

二、如上の智識に願ひ寺男の如き者と爲りて傍ら修道する事。

此れは私の空想に御座候。

三、現境の徳書籍等に依りて心掛くる事。

四、人家を離れし處に住家を造り獨住して書籍等に依り且つ耕し且つ修道する事。

却説右の四條に就て何れに従ふて宜しいか承りたいと云ふのが青年の希望でありました。

此れは例の神經質にて餘りに家内の日常の出来事に拘泥して障道する故考へ出しし筈に候。

私は當該青年の書状を見まして其虚弱なる體質と沈鬱なる精神とを想像し、可惜少壯有爲の身を以て鳥歌ひ花笑ふ青春の閑かなる日を猿啼さるなきき風咽かぜのなげぶ淋しさに送りつゝあるを想ひ、洵に同情に堪へなかつたのであります。蓋し此青年と同様なる思想を有し、同様なる悲境に陥りつゝある人々は、決して世間に少くない。此等の人々の境遇は實に吾人が同情の涙を値する。されど此處に看過すべからざる誤解の存することを忘れてはなりません。

二、修道に對する誤解

其誤解とは農工業其他日常の人事を以て障道の因縁と心得居ることであります。何となれば農工業其他日常生活の事務は修道の妨げなりとして、農夫

は道を修めんが爲に其鋤鋸を棄て、商人は道を修めんが爲に其算盤帳面を捨て、大工は道を修めんが爲に其鉋鋸を擲ち、乃至左官は其鍛を捨て、桶屋は其繩を棄て、飾屋は其太鼓を抛ち、馬丁は其馬を放ち、車夫は其車を捨て、道を修む可きものとしたら如何でありませう。斯く我々が道を修むる爲に各、其業務を捨るのみならず、日常の人事まで障道の因縁として之を省みず、單に青表紙の二三枚も讀み、握拳丸でぶら／＼と遊びながら、屁理窟でも言ふたら、道が修まるでありませうか。修道を斯様なことに心得たなら大きな誤りではありませうか。

私の友人に石井某といふ人がありまして、其家に支那人の留學生を寄宿させて置きました所、其支那人が或時旅行に出でまして途中から石井氏に書面を送り越しましたるが、其書面の宛名を見ると東京市何區何町何番地と記し、次に石井勝手口殿と麗々と書いてありました。これは支那人が石井家の勝手口の標札を見て名札と思ふて居たのでありませう。世には随分御門達も澤山ある者で御座りますが、此等は殊に太甚しい御門達

と謂はねばなりませぬ。併し近頃の青年が握拳丸で青表紙の二三枚も讀み、冥想とか理想とか、譯もわからぬことを言ふて修道と心得たのは、石井勝手口殿以上の御門達であります。

三、超人の道

さりながら這は青年のみを責むべきではない、道とか教とかを説く人々が、其所謂道又は教なる者を人生を超絶して非常に高遠幽玄なるもの、如く説きまして、吾人が日常生活の要務は卑近にして俗悪なるもの、如く申します所から、右様の誤解も起るのであります。如何に玄々微妙なる道でありまして、我々が日常の要務と無關係にして超然として人生の外に在るやうな道は、吾等人間には要はありませぬ。道にも種々あつて、天の道、地の道、神の道、佛の道、少し下りましては敷島の道、蛇の道、蛇の道、蛇の道、さては戀の道など粹な道もないではない。されど吾等の要する所の道は此等の道ではありませぬ。天の道は天をして行かしめ、地の道は地をして行かしめ、神の道は神をして踐

ましめ、佛の道は佛をして踐ましめ、蛇の道は蛇に任せ、蛇の道は蛇に任せて宜し。人は須く、人の道を行くべきであります。老子が道を説くを見まするに、道の物たる惟れ恍惟れ惚惚たり恍たり、其中物あり、窈たり冥たり、其中精あり。

とあります。が、恍たり惚たり、惚たり窈たり冥たり、窈たり冥たりでは頓と道の様子がわかりませぬ。所謂音も無く香も無しと言ふたやうなもので、恰も河童の尻のやうで掴へ所がない。斯の如く虚無の大道だの、希夷冲漠の道だのと申しますると空想に流れ易く、隨て道を修むる者は神仙の境に入るなど、全く人生の實際と縁が遠くなるのであります。吾人は決して神仙と成る必要はない、單に人として完全の人となるのが何より肝要なのであります。

四、道とは何ぞや

昔し宋朝の大儒たる周茂叔が當時有名の禪僧にて黃龍の慧南禪師と云ふ

人に問はれましたには、佛祖不傳の道とは如何様のものでありますか。慧南答て言はるゝは、佛祖不傳の道は暫く措く、儒書に朝に道を聞て夕に死すとも可なりとあるが、畢竟何を以て道と爲すや。周子此時茫然自失して答ふることができなかつた。是より刻苦精勵して大いに悟る所があつたと言ひ傳へてあります。

さすれば周茂叔ほどの大儒でも道といふことを漠然と考へてゐたものと見えるのであります。私の申す道とは佛祖不傳などと云ふ六づかしい道ではない、只人の道で、人の當に踐む可く行ふ可き道を指すのであります。古へより神道あり、佛道あり、儒道あり、現今では耶蘇道などもありますが、皆私の申す人の道を教へる迄のこと、人の道を離れて神の道も佛の道もある筈はない。されば行誠上人も

神佛名は異れど玉ぼこの

みちの外には道とてはなし

と詠せられてあります。然れば私の申す道とは餘の義では御座りませぬ。

農農たり、工工たり、商商たり、士士たり、君君たり、臣臣たり、父父たり、子子たり、兄兄たり、弟弟たり、夫夫たり、妻妻たり、書生書生たり、教師教師たり、官吏官吏たり、人民人民たり。

只これだけであります。少しも六つかしい事でない、極めて手近い所にある道で、何人も離る可らざる道であります。古人が道は邇きに在りと言ひ、また道は須臾も離る可らずと申したのは此處であります。

五、人の道 其一

父にして父たる能はず、是に於て乎、父子相争ふて人の道を失ひ禽獸と爲る。子にして子たる能はず、是に於て乎、不孝の罪を犯して人非人と爲る。夫にして夫たる能はず、是に於て乎、妻を蓄へて畜生道に墮ち、妻にして妻たる能はず、是に於て乎、嫉妬の角を振り立て山の神と爲るのであります。故に人の道は父父たり、子子たり、妻妻たり、夫夫たる所にありと申すので、此外には道は御座りませぬ。聖人の教を設け道を立つる所以は農夫をして農夫たらしめ、商人

をして商人たらしめ、官吏をして官吏たらしめ、職工をして職工たらしめ、爲であります。ざるを農夫は農を止め、商人は商を廢し、學生は學問を止めて道を求めやうとするは木に縁りて魚を求むるが如くである。木に縁りて魚を求むるは、まだしも得べき目的がある、何となればベルカ、スカンデンスなる魚は樹に攀ぢ登りて甲蟲を食ふといふ話しがありますから、木に縁りて魚を求むるは多少の望みがある。然れども我々が人生の要務を捨て人の道を求むるは地を掘りて天を求むるが如くで、少しも望みがありません。農農たり、商商たり、官吏官吏たり、學生學生たるは、洵に手近い簡易なる道であり、ますが、兎角世人は此簡易なる道を踐みそこなふ人が多い。

昔話に或る指物屋の小僧が詠じました句とて

春風や吹て喜ぶ指物屋

といふがある。此句は如何なる意味かと小僧に問ふた所、小僧の説明に、春風が吹けばほのと暖かになる、暖かになれば櫻の花が咲く、櫻の花が咲けば花見の人が多く出る、花見の人が多く出れば塵埃がたつ、塵埃がたてば

人の眼に入る、人の眼に入れば盲人が多くなる、盲人が多くなれば音曲を以て業とする人が多くなる、音曲を以て業とする人が多くなれば三味線の需要が殖る、三味線の需要が殖れば猫の皮が多く必要である、猫の皮が多く必要であれば猫を多く殺す、猫を多く殺せば鼠が殖る、鼠が殖れば道具を多く噛み毀す、道具を噛み毀せば指物屋の仕事が多くなる、そこで

春風や吹て喜ぶ指物屋

と詠みましたとのことであります。

かくては指物屋が其仕事を殖さん爲に澤山の猫を殺し、多数の人を盲目にする必要がある。己れ一人の利を得んが爲に多くの人の害を顧みないのが凡愚の情である。是に於て乎、指物屋指物屋たる能はずして人の道を失ふに至る。古句に

世は廣し花の外吹け春の風

とある通り、世間は廣いから花ある所を強て吹かずとも春風の通る道はあるのであらう。可惜花を散さねば春風の役目が濟まぬ譯もあるまいと風に寄せ

て人の心の狭さを誡めたものと見えます。

六、人の道 其二

これに就て思ひ起しましたは先般中山一位局が御逝去のをり、私が懇意にする理髪店の小僧が親方に向て、「天子様の御母様が死んだ事が新聞に出て居ますよ」と申しましたら、親方が「さうか、其れでは近々御停止があるだらう」といへば小僧は「御停止と云ふのは、親方何のことです」「御停止と云ふのは鳴物、御停止といふて太鼓、三味線、琴、胡弓などの様な鳴物を御差止になるので、寄席、芝居、料理店などは多分休業するだらう。」「へい、それでは寄席や芝居ばかり休みになつて理髪店は休みには成ませぬか。」「理髪店が休みになる筈はない、それとも天子様でも御他界になれば湯屋や理髪店でも御遠慮申上て休むかも知れぬ。」「さうですか、私は二三日休みたくてなりません、天子様は近いうちに死にますまいかね」と申しました。私は小僧の此一言を聞いて悚然として懼れ、且つ中心大に慚ぢ入りました。何となれば小僧の言ふ所は他人の生命を犠牲にし

ても尙ほ自己の快樂を企圖せんとする人間の獸性を有の儘に自白したるもので、尙も人道に志す者の大いに戒心恐懼すべき所であります。此の如く他人の利益を犠牲にして自己一身の快樂を求めんとするの心は社會の所有階級に存してありまして、商人は同業者の失敗を喜ぶの風あり、軍人は前任將校の失職又は死亡を鶴首して待つ風のあり、政治家は他の政黨を中傷擠陷するの風あり、上は一國の政權を左右する大臣宰相より下は乞食非人に至るまで多少此卑陋なる精神を持たぬ者は無い。されば宗教家にありても佛教徒は耶蘇教徒の失敗を欣び、耶蘇教徒は佛教徒の挫折せんことを希ふ。かくして彼等慈悲を口にし博愛を標榜しつゝある宗教家でさへ其精神は理髮店の小僧と五十歩百歩の相違であります、何と御互に愧づ可きことではありませぬか。

七、人の道 其三

今日の學生を御覽なされ、學生として當然學ぶべき學問は抛擲して放蕩學を研究し、放蕩學校卒業の結果としては自殺哲學を實行する者がある。また女

學生を御覽なされ、學問は全く第二位に置いて御化粧法を第一に研究し、御化粧法研究の結果としては戀愛哲學の實行に着手する者が多い。甚だしきに至りては支那留學生に其身を切賣して豚と同様の運命に墮落する者さへある。是れ學生にして學生たらず、女學生にして女學生たらざるの致す所と謂はねばなりませぬ。また彼の官吏を御覽なされ、某大臣が地方巡回と云ふ時には縣知事や警部長は大臣様へ人身御供として差上べき美人の撰擇に日も亦足らず。彼等は官吏として大臣に應接するのではなく、幫間として妓夫として大臣に侍るのである。右の如き醜聞が新聞紙上に掲げられたのは一度や二度のことでは御座りませぬ、さすれば此等の地方官は醜業婦を取持ちする一種の妓夫を兼業としてゐるので、ギョの中にも上等の牛であるからロースでもありませう。官吏のロースとは随分おかしい話ではありませぬか、是れ官吏にして官吏たらざるの致す所であります。

右様の次第で、農夫は農夫たらずして餘計な商賣氣を出して資産を失ひ、商人は商人たらずして餘計な政事に手を出して失敗を來し、教員は教員たら

ずして、餘計な株式に手を出して失策をなし。軍人は軍人たらずして餘計な
コンミツションを取りて醜名を流し。僧侶は僧侶たらずして餘計な高利貸
を營みて醜辱を曝す。果して然れば學生學生たり、女學生女學生たり、官吏官
吏たり、教員教員たり、僧侶僧侶たり、乃至父父たり、子子たり、夫夫たり、妻妻たる
は實に適切にして極めて肝要なる教であります。若し此道さへ踐みました
なら官吏のロースや、女學生の豚や、蓄妾道に落ちたる紳士や、山の神に化した
る淑女は跡を絶つやうになりませう。
甚深微妙なる佛祖の大道も父父たり子子たり兄弟たり弟弟たる簡單明瞭の
道の外に在るのではない、されば華嚴經にも
佛法は世間の法に異らず、世間の法は佛法に異らず
と申してあります。

八、人の道 其四

行誠上人が自ら書きたる洗濯圖の賛に

法の身はたらひですませ墨衣

ものほし竿の慾にかゝるな

とあります。が「たらひですませ」とは洵に我等の肝に銘ず可き金言であります。
我等は限ある身を持ちながら限なき慾を充たさんとするが故に、人の道を失
ふに至るのみならず、不平不満足の絶える時としては無く、男は一生澁面をつく
り、女は一生泣言をいふて暮さねばなりません。抑も慾心を満さんとするは
猶ほ渴したる時に鹽水を飲むが如くで、飲むに従て愈、渴を増すのみでありま
す。されば行誠上人の歌の如く何事も「たらひですませし」物ほし竿の慾にかゝ
らぬが第一の用心で御座ります。

今は昔し、平治元年十二月左馬頭源義朝公武運拙くして京都の戦に打敗れ、
美濃國青墓の宿に落着、それより東國へ下り給はんとて極月廿八日に尾州
長田の莊司忠致が亭に到り給ふ。相隨ふ面々には鎌田兵衛政清、平賀四郎
義宣、澁谷金王丸、鷲栖玄光の四人にてありけるが、平賀四郎は其母重病と聞
て此處より御暇を賜はりて本國に罷り歸りける。長田の莊司は源家相傳

の御家人、殊に鎌田兵衛は莊司が婿なりければ義朝公主從四人心を安んじ
 悠々御滞留あるべき有様なりき。莊司は故らに忠義を粧ひ、義朝公を書院
 に請し奉りて篤く歡迎の禮を盡し、厨には山海の珍味を集めての饗應善を
 盡し美を盡せども、内心潜かに逆意を挾んで嫡子先生景致を一間に招き、さ
 て言ふやう、「我君義朝公是より吾妻へ下り給ふとも平家の權勢盛なれば何
 れ敵に捕へられ命を墜し給はんこと必定なり、然る時は我等父子も亦義朝
 公をかくまひ參らせたる罪に由りて平家の爲に滅されんこと鏡にかけて
 見るが如し、所詮我等自ら主君の御首を討て平家へ奉りなば重き恩賞に預
 りて官祿も進み子孫永く榮華を極むるを得ん」と言へば景致實に尤なり」と
 同じて潜かに義朝公を害し奉るべき密談をぞ遂げたりける。

翌平治二年正月二日長田の莊司父子は先づ叛逆の妨たる鎌田兵衛政清を
 討取べしとて夜に入て彼を招き忠職の勞を慰めなどして父子三人酒宴に
 及び十二分に酒を侷めて後政清が座を起ちて出る處を先生景致妻戸の脇
 にて其兩膝を斬り倒るゝ所を馬乘に跨りて其咽を貫いて殺害したり。此

時莊司が娘なる政清が妻は始めて父と兄とが逆心を悟り、慟哭して言ひけ
 るは「父上、兄上、道は如何なる天魔に見入られ給ひしぞ、現在義理ある我輩政
 清殿を手にかけて慘たらしう殺しし上に三代相恩の御主君まで害し奉り
 て不義の榮華を貪らんとし給ふは餘りといへば人でなしの爲され方、何卒
 心を改めて善心に立歸り御主君様に忠義を盡し給はれよ、思ひ廻せば我身
 ほど果報つたなき者はなし、天にも地にも只一人なる親と兄とに夫を討た
 れ、親に従て孝を盡せば夫殺しの大罪を追れ難く、夫に従て貞を盡せば親に
 刃を向けねばならぬ、兎ても角てもながらへて死耻をかゝんよりは潔よく
 自害せん、嗚呼、我夫政清殿、さぞ御無念で御座りましよう、あなた計りは死な
 せはせじ、妾は父上、兄上と同じ心でない證據、これ此通り」と、夫の屍に抱きつ
 き其刀を取るより早く我と我喉を突き貫きて自害したるは憐れと謂ふも
 愚かなり。斯くて莊司親子は翌正月三日に到り、愈々義朝公を害し奉らんと
 て早朝に主君を浴殿へ請しける。義朝公は神ならぬ身の斯ゝる事とは少
 しも知らず、書院を立出で浴殿へならせ給へば、澁谷金丸御佩刀を執て之

に従ふ。然るに御浴衣おんゆふい参らする者も無く、諸事不束しよじふそくなる體なれば金王丸大いに怒りて御佩刀おんばいとうを持ちたる儘にて外に出で、自ら御浴衣を取んとて書院の方へぞ往きける。此時浴殿の床下ゆかしたよりムク／＼這へ出たる一人の男子、身の丈拔群はくぐんにすぐれ、顔赤く、髯黒く、全身肥満して豚の如く、腹大いにして蝦蟇えまの如くなり。これなん濃尾二國にて無雙の力士橋はしの七郎と呼ぶ者なり。エーヤと計り聲をかけムツと義朝公の後より組附けば、義朝公は無禮者むれいしやと一喝し給ひ右の腕を押へ左手にて彼が脚をとりドーとばかりに地響ぢびやう打て抛なげつけ、御膝の下へ踏み敷き給ふ。此時遅し彼時早し、左右より現はれ出たる二人の曲者まがらひ一人は彌七兵衛、一人は濱田三郎、雙方より大刀を脱ぬく手も見せず、義朝公の兩脇を望んで、拳こぶしも通れと突き込めば、道が豪氣の大將もアツと叫んで其儘仰向に打倒れたり。兩人は直ちに義朝公の首をわけ、相圖して使の者に之を渡し、使の者は之を長田の莊司に渡したれば、莊司親子は御首おんくびを持って馬に跨り一目さんに奔り去る。澁谷金王丸は斯る事とは露知らず、御浴衣を取りて出来るに浴殿の前に怪しげなる三人の男子血刀を提

げて立ちつゝあり。金王丸何奴なにやつなるぞと咎とがひれば三人目くばせして金王丸に斬てかゝるを忽ちにして三人を其場に斬り伏せ、浴殿に入りて見れば、道はそも如何に御主君は無慘の最期。「チエー長田親子に謀られしか残念なり」と齒がみを爲し。「玄光は居らぬか、玄光、莊司親子の叛逆にて御主君は討れたるぞ」と呼はりて兩人必死となりて斬て廻りけるに、長田が邸中は鼎なべの沸くが如くなり。されど長田父子は既に遁れて居らざれば、扱あつかは御首を持って上洛するならん、追駈おして取戻さんとて厩うまに入て馬を引出し、打乗りてひた走りに走りける。時に玄光は大音を揚げ「吾當年六十三歳、戦場に出る事十三回の多きに及ぶと雖も、未だ一度も敵に後を見せしことなし、今長田の雜兵共ざひへいに後を見するは残念なり」とて馬は前に向け己れば、後に向て逆まに馬に跨りて奔りける。長田の臣等は二人の剛勇に恐れを爲して一人も近づき留めんとする者なく、遠矢とほやを射かけたる計なり。

長田父子は斯くして義朝公の首を取り上洛して平相國清盛公に獻じたるに、清盛公喜ぶこと限りなく、將に重き恩賞を與へんとし給ひけるが、其子小

松内府重盛公大に長田が不義を惡み給ひて勸賞を止めらる。されど長田は源家にこそ不忠の臣なれ、平家に對しては不義といふにもあらざれば壹岐守の號のみを授け給ふ。斯れば莊司が望は全く外れて何の恩賞も無く、單に命計壹岐守となりたるは笑止至極のことどもなりけり。去る程に長田父子は兎角して年月を送りつゝありたるが頼朝公石橋山に兵を擧げてより源家の勢日に月に盛んなれば今日は討手の來るならんか、明日は我身の終りならんかと身も世もあらぬ思ひを爲し。遂に頼朝公へ我身の罪科を訴へ出重刑に處せられんことを願ひける。其の時頼朝公の仰せには「天下未だ源家一統の代となりたるに非ず、汝若し身命を惜まず軍功をたてなば其罪を宥して美濃尾張兩國を宛行ふべし」と有難き嚴命なり。依て莊司は茲に再生の思を爲し、數ヶ度の戦争に功を現はし、平家は西海壇の浦の藻屑と消えて愈、源家一統の代とはなりぬ。かくて頼朝公は日本六十餘州の總追捕使とならせられ、上洛の砌に長田の莊に御駕を枉げ給ひて先君義朝公并に其臣鎌田兵衛が爲に石碑の御建立あり。御菩提の爲とて七堂伽

藍を建設し、高野山より僧侶を請して盛大なる法要を行ひ給ふ。それより長田父子を生捕せて「愈汝等に豫て約定せる通り、美濃尾張身の終を宛行」とありて石碑の前にて板礫に行ひ宿誓を報い孝養に備へ給ふ。時に長田が辭世と傳へたるは

ながらへて命ばかりは壹岐の守

みのをはりをば今ぞ賜はる

かくて長田父子は物ほし竿の慾にかゝりましたので遂に礫柱にかゝるやうになりました。何と恐るべきは人の慾心では御座りませぬか。

九、平常心是道

道は我々が生平手の舞ひ足の踏む所に在るものを兎角道とか教とか云ふと一種特別の儀式でなければならぬやうに思ふが人の情であります。是を以て道や教が動もすれば寺院や教會に在る如く心得たり、講堂や書物に在るやうに誤解するは困つたもので御座ります。

或眞宗信者の老婆がありまして朝から晩まで御念佛を申して阿彌陀様を拜むで居り、また佛様に供へる物は何でも御の字をつけて呼ぶことに致しまして、御佛器御蠟燭御線香御茶碗などと申しましたが、御の字丈ではまだ足らぬ處から様といふ字をつけて呼ぶ。そこで御佛器様御線香様御燈明様御佛餉様御盆様御茶碗様御布巾様御雜巾様と何でも佛前に用ふる物は御の字と様の字をつけ、また佛前に供ふる物は人間の用ふる物と別にしないといふと罰があたると申して佛餉も一々別の御釜様で炊き、別の御薪様を燃し、別の御鍋様で御汁様を煮るといふ有様で大層一家の迷惑となりました。或時右の老婆が阿彌陀様の御飯を炊くとして御小桶様に御米様を入れ御水様を注ぎて其中に御桶木様を突き込で頻に掻き廻して居ると或人が通りかゝりまして怪しく思ひ、何故手にて米をとがずに桶木でとぐかと尋ねましたら、人間の手は汚らばしい、阿彌陀様の御佛餉様を汚れた手でいでは罰があたると申します。依て其人が然らば老婆は阿彌陀様を拜む時に汚れたる手を合せずに二本の御桶木様を合せて拜んだら宜しからうと申し

ますと老婆は非常に腹を立て其人を罰當りぢやと悪口したと申します。思ふに此老婆の所爲の如きは道でも宗教でもありませぬ佛弄といふもので、佛弄と宗教とは大いに相違してゐる。古來宗教信者の爲す所が却て宗教と矛盾する場合がある、這は平常心是道なるを知らずして佛に阿り神に媚びて現在當來の利益を得んとする私慾に外ならぬのであります。されば珠數を持つ手で物を盗み、念佛申す口で人を罵り、神佛に拜く頭腦で人を陥れんと慮る、淺ましきの限りで御座ります。

十、活ける宗教

水戸黄門義公は稀代の名君でありましたが、或時領内の愚民が鶴を殺したる爲に捕縛せられました。當時鶴を殺したる者は國法に依りて罰せらるゝが常で、鶴殺の男は忽ち入獄の身となりました。然るに義公は鶴殺を其儘に獄屋に入れ置き何の御沙汰も無く、其年も過ぎ翌年正月に至りまして領内の諸大寺の長老七八人の僧を引見せられまして種々御物語の序、殺生

の宜しからざる事を仰せられた。諸山の長老は義公の仰せの如く殺生は佛法に於て第一に戒めあることを説き慈悲の貴ふべき道理を喋々と申上りました。其時義公鶴殺を獄中より呼び出し「汝國法を破りて鶴を殺したる段不届の至りなり、依て斬罪を申附る」と嚴かに命じ給ふに、其場に居並びたる諸山の長老一人も義公を諫めんとする者なく、沈黙屏息して頭を下げるのみであつた。其時義公は大いに憤り給ひ「汝等諸山の長老は殺生の宜しからざることを説き慈悲を以て道と申しながら鶴殺の爲に一命を乞ふ者なきは何故ぞ。予が今日汝等の面前に於て鶴殺を處罰せんとするは汝等が必ず彼の爲に命を乞はんことを思ふによる。予暗愚なりと雖も一禽を以て人命に代ふるものならんや」と仰せられて鶴殺は其儘に助命し、諸山の長老は寺より追放を命せられたと言へ傳へてあります。

義公の這般の行爲は實際に道を行ふものにして、諸山の長老は全く道を知らぬのであります。されば眞の佛法は義公の言行の上に在りて、諸山の長老の袈裟や衣の上には無い。さるを佛教とさへ言へば寺院や僧侶や袈裟や御經

と思ひ我等の日用が眞の佛教なるを知らざるは誤れるの太甚しきであります。盤桂禪師の語に

水を擔ひ柴を運ぶも佛心で運ぶに依て活佛なり。田を耕し菜に蕪するも佛心で蕪すれば即ち活佛なり。女は機を織り衣物を縫ふも佛心の儘で縫へば活佛なり。男は商を爲しそれ々の業を務るも佛心の儘で務るは士農工商共に能く佛心で一切事が調ふなり

と示されました故に農農たり、工工たり、士士たり、君君たり、臣臣たり、父父たり、子子たり、夫夫たり、妻妻たり。是れ實に古今に亘り天地と共に不變不易なる人間の大道であり、活ける宗教であります。

十一、無心にして道に合す

併し道を失ふ者は多く道を得る者は極めて少いは何の爲ぞ。开は餘の儀に非ず、私利私欲に驅られて五欲七情の奴隸と爲るからであります。私利私欲に驅らるゝ時は本心の主人公に其力を失ふて在れども無きが如く、精神の本體

は全く空虚に等しき状態と爲り、之に加ふるに五欲七情の穴があいて本心清浄の水を漏す故、恰も我等は一個の竹籠の如くなる。此籠の中に道の水を入れやうとしても水の溜るわけはない。故に朝から晩まで聖人賢人や佛菩薩の有難い教や結構な道を聞きましても五欲七情の穴から皆漏れ出て籠抜けと爲つてしまふ。是を以て我等は教の水を我身に蓄へやうと思はずして我等の全身を教の中に入れやうと心掛けねばなりません。籠の中には如何に水を入れても溜りませぬから、水の中へ籠を入れるれば籠にても水を盛ることができません。即ち吾々の私利私慾を抛却して無我無心と爲りて惟道の儘に教の儘に此身を任す時は如何に五欲七情の穴多き吾等の身にても清浄なる法の水を心の中に湛へることができるのであります。

十二、無の妙用

老子に

三十幅一綬を共にす、其無に當りて車の用あり。埴を埴て以て器を爲る、其

無に當りて器の用あり。戸牖を鑿て以て室を爲る、其無に當りて室の用あり。と申す語がありますが車には三十の幅が一の綬に附て其中央は空虚となつてゐる。此中虚なる處ある故に車は自由に回轉する作用がある。同様に埴を埴て器を造るに、其中央は空虚にして置く、此中空なる處があるので器は物を盛る作用がある。また戸や牖を鑿て室を造るに室の中央に空虚なる處がある、此中虚なる處があるので室に人の住む作用があると申すのであります。

人の心も亦老子の譬の如くで、虚心坦懐と申して精神が平かになり、邪欲邪念の波風が起たぬ處に心の大きな作用があります。鏡は空しさが故に顔の妍醜を辨じ、衡は平かなるが故に物の輕重を量るやうなもので、人心も平かに虚しくして邪欲の塵埃がなければ善惡正邪を明瞭に見ることが出来ます。さるを心の鏡に利欲の塵がつき、精神の衡が感情に傾くから世の中の物が有の儘に見えぬのであります。禪宗に謂ふ所の無念無想も畢竟精神の鏡を中空にして自由自在なる運動を起さしめ、精神の器を中虚にして能く法性清浄の水

を盛るに適せしめ、精神の室を中空にして能く佛菩薩を安置し奉るに適せしむるに外ならぬ。また譬へば人心は煙管の如くであります、中空にして無心無念なれば煙草を吸ふの作用がある。されど心の煙管も絶えず用ふれば何時の間にか妄想の脂が附く。故に我等は時々煙管の掃除をせねばなりません。而して精神の脂掃除としては静坐が最も有効である。古人も

清坐して百憂を忘る

と申してあります如く、正身端坐以て一切の妄念を離れ心を世俗塵境の外に遊ばしむる時は謂ふべからざる快感の身に溢るゝを覺ゆる。然るに迷ふ者は我等が精神に充填したる妄想の脂を掃はずして徒らに煙管の雁首のみを磨きて得たりする者が多い。故に古人も

煙管さへ心の脂を掃除せず

がん首ばかり磨く世の人

と戒めてあります。

十三、學問宗教の病

聖人の教を立つる所以は我等が精神の脂を掃除せんが爲なるは言ふまでもない、然るを儒者は儒學に拘泥し、佛者は佛學に偏執し、道家は道教に固執して却て妄想執著の病を増す者がある。是れ恰も煙管の脂を掃除せんと欲して紙捻を入れたるが中にて切れ、抜きさしの出来ぬやうに爲つた如くであります。

昔し或諸侯に仕へたる儒者が痛く儒學に固執致しまして何事も支那風を喜び、己が姓名も妻子の姓名も皆支那風に改め、國名も郡名も皆支那風に記し、衣服佩刀まで支那風を模し、尺度も周尺を用ひ、周の制度の考ふべからざる者は漢の制度を考へて之を用ひ、日本を卑しみて専ら唐土を尊敬して居りました。されば經書に沾る酒沾る脯は食はずとあるとて自ら酒を醸し自ら松魚節を造りて食ふなど狂氣じみたる所行が多くありました。依て他の藩士は之を改めさせんとて屢々諫言を加へましたが一向に改めませ

ぬ。そこで家老が彼の儒書を呼び出して申すやう、尊公は萬事唐土の風を行ふとの事。さあならば食祿も彼土の風にて渡さば定めて本懐なるべし。尊公の食祿は年三十人扶持にして五十四石なれば毎月四石五斗を相渡すべきの處、漢制に法りて之れを量れば漢の一石は正に我一升に當る。是を以て今日以後尊公の食祿は毎月四升五合宛相渡すべしと申し渡したるに、儒臣は大いに驚き、拙者儀は家内十三人もこれあり、毎月四升五合にて粥だにも啜るに足らず。何卒御宥赦に預り度し、爾來は訖度唐風を改め申すべしと誓ひて漸く我國風を用ひたと申す話しがあります。

此儒者は儒學が精神の煙管の中につかへて抜き差しがならぬのである。昔の儒者のみでは御座りませぬ、今日の者でも佛教に心酔したる者は佛教以外の教は邪教の如く思ひ、神道に熱中したる人は神道以外の教は魔説の如く考へ、耶蘇教に固まりたる者は耶蘇教以外には宗教なきが如く思ふて居る。吾等が宗教を奉じ道に志す所以のものは斯の如き精神の偏執を除き温雅なる君子の徳操を全うせんが爲であります。然るに宗教を奉して却て偏執を加

へ學問を修めて却て固陋の度を加ふるやうでは學問も宗教も何の効も御座りませぬ。されば道學を修めては道學者臭、からず、哲學を究めては哲學者臭、からず、漢學を修めては漢學が喉に岡へぬやう、洋學を修めてはハイカラが喉に岡へて首が廻らなくならぬやうに工夫するが大切で御座ります。

十四、飽食暖衣以足

私は近頃簡易なる一種の安心法を考へました、并は

飽食暖衣以足

の六字であります。凡そ吾等が一身に享受する所は他くまで食ひ暖かに衣るだけで其餘は如何ともすることはできぬ。日本で申せば三井家、岩崎家の如く、外國で申せばロックフェラーとかカルネギーとかいふ富豪の如く、鉅萬の富を積んでも其一身に受る處は他くまで食ひ暖かに衣るより外には致し方はない。石油大王ロックフェラーぢやと一食にスープを十三杯、牛肉を十五斤傾ける譯にはゆかぬ、やはり彼が胃の腑に一ぱいあります。吾々が

如何に貧乏ぢやとて同じく胃袋に一ばいは食べられる。カルネギイが如何に富めりとて、まさかに帽子を三つ重ねて冠り靴を五足一度に穿く譯にはゆかぬ、やはり帽子が一個靴が一足でありませう。吾々も貧乏ぢやとて其通りで靴を片足穿き帽子を三分の一冠る次第ではありませぬ。されば全地球を領する帝王ありとするも暖衣飽食の外に出ることはできぬ。また世界には鐵道王、鑛山王、石油王、銀行王など唱へらるゝ多くの富豪がありませぬ。鐵道が煮べにして食はるゝ物でもなし。石油が牛乳の代りに飲まるゝ物でもなし、銀行や鑛山が帽子や靴の代りに冠りたり穿いたりできる物ではありませぬ。畢竟するに如何なる富豪にても一身に享受する所は胃腑を充たし寒暑を防ぐだけのことで吾々貧乏人と相違はないのであります。

然れども富豪と貧民との間に一つの差別があります。开は富豪は自己の享受する能はざる多くの資産を所有し、貧民は自己の享受する資産だけを所有することでありませぬ。富豪は莫大なる資産を持つてゐる故、自己の資産を皆他人に享受させて己れは所有主の名のみを保留してゐる例せば石油王は澤山

なる石油を所有してゐるけれども自ら用ふる所は一夜に三四合で十分である、他は皆他人に使用させて己れは所有主の名を保留するだけである。また鐵道王は非常に澤山の鐵道を有するも自ら乗車する時は一等車にでも乗るに過ぎぬ、他は皆他人に毎日乗らせて己れは其所有主の名を保留してゐるのみである。されば富豪は自己の享受する能はざる多くの資産を己れの名にて所有し他人をして之を受用せしめつゝあり、貧民は自己の享受する能はざる多くの資産は皆他人の名にて所有せしめ他人をして之を受用せしめつゝある。故に富豪と貧民との相違は名にありて實にあるのではないことが知れませう。

併し富豪は寝てゐても衣食に差闕ることなく、吾等貧民は寝てゐては衣食することができぬ故、此間に大なる懸隔があると思ふ人がありませう。されど如何に富豪ぢやとて寝て居ては食はれませぬ、一週間も起きずに寢食をしたなら何人も病人に爲つてしまふ。是非其人間は或程度まで働く可き運命を有してゐる、故に富豪は衣食の爲に勞働する必要が無いとしても、少くとも腹

をなしの爲に働かねばならぬ。然れば富豪も貧民も共に食はんが爲に毎日働く點は同一であります。

斯の如く考察する時は吾等は他人の富を羨みて不平を起したり、厭くことを知らざる欲を逞うして人道を踐みそこなふ氣遣はなくなる。且つ何時までも金銭問題にのみ頭腦を痛めることを止めて金銭以上の高尚なる事業に志すことができると思ふ。また爵位などに就ても決して人を羨むには足らぬ。何となれば爵位などは大人君子の心に介するには足らぬものである。假令如何に爵位が高くとも其人の人格や品性には少しも影響は無い、否、大人物が爵位などを振舞す時は却て其人の價値が下がる、東洋のネルソンとも唱へられたる東郷大將が伯爵に叙せられたからとて少しも大將の價値を増しはせぬ。海軍大將東郷平八郎と云へば何となく威嚴があるが、伯爵東郷平八郎では威嚴が失せてしまふ。また近頃伊藤侯や山縣侯は侯爵より進んで公爵となつた由に承る併し公爵になつたとて伊藤はやはり伊藤山縣はやはり山縣であります。公の字は侯の字より字劃が少くて手早く書けるだけで、公爵に

なつたからとて山縣の白髪が黒くなるでもなく、伊藤の禿頭に髪が生へるでもないのであります。少しも羨み妬みて不平を言ふ處は無い、これ私の發明致した一種の安心法であります。

十五、貧にして富み求めずして得

これに就て思ひ起しましたは神田香平と云ふ人の話であります。

神田香平と申す人は大層書畫骨董を愛玩せられたとので、始めは其嗜好に應じて種々なる古書畫や珍奇なる骨董品を買ひ求めて愛玩したさうであります。限ある資財を以て限りなき書畫骨董を購ふとは不可能であると悟りまして、其後は自己の所有品と他人の所有品との差別を見ずして單純に書畫骨董其物を愛玩する方針を立て、書畫の買入を中止しました。それより他人の家に往きて「當家には狩野法眼筆の三幅對がある由を承りましたが拜見を願ひたい」と申入る。すると主人は大いに喜び自慢たらく秘藏の畫を見せます。神田氏は之を觀て亦大いに樂みを極めて後世にも

希なる名畫なりと稱讚し、随分大切に珍藏し給へといへば主人の恐悦少なからずして、結構なる茶菓子など出して篤く待遇する、また他の家を訪問して當家には名匠甚五郎の作なる大黒天の像があると承りて参りました、何卒拜見を願たいと申入ると、主人は善くこそと一問へ請して例の大黒天を見せませう。神田氏は充分に之を觀て眼の保養をして後、此は天下一品とも稱すべく日本美術の精粹で御座ります、幾重にも珍重せられたしといふに、主人の歡喜一方ならず、最早十二時にも近ければとて山海の珍味を以て神田氏に饗應するといふ有様であつた。かゝれば神田氏は書畫骨董を我物にせやうとする慾心を絶ちしより、天下の書畫骨董が皆我物となり、一錢をも費さずして名品佳什を觀賞することができたと申します。

盤桂禪師の歌に

おしやほしやと思はぬ故に

今は世界が我ものぢや

とあるは此意でありませう。これ貧くして富み、求めずして得るの道であり

ます。

十六、本心の主人公

抑も吾等の心が一喜一憂動搖して止まず、極端より極端なる感情に馳せて喜怒哀樂が發して其節に中らぬのは本心の主人公が外界の諸境に奪ひ去らるゝからであります。例せば花を見ては花に心を奪はれ、月を觀ては月に心を奪はれ、鳥の歌ふを聞ては鳥の聲に心を奪はるゝ。此等は未だ多くの害なしとするも美人を見ては美人にうつゝをぬかし、酒を飲みては酒に魂を奪はれ、金銀を得ては金銀に心を奪はれ、乃至競馬にわれ、野球にわれ、角力にわれ、演劇にわれ、見聞する所の一切の境に心を奪はれて本心の主人公は全く留守となる。されば心能く境を分別する能はずして、境能く心を驅逐して其自由を失はしむ。是に於て乎、人は外境に反應する一種の自動器に外ならぬ。これでは人間の價値が無いと謂はねばなりません。俗諺に一杯は人酒を飲み、二杯は酒酒を飲み、三杯は酒人を飲むと申してありますが、吾等は酒に飲まるといふ

みではない、見る物聞く物に吞まれて本心の主人公が隠れてしまふ。

昔し或僧が女郎買に参りました所、相敵の女郎が非常に寝坊で御座りまして、眠り込だなりで一向に眼を覺しませぬ。僧も切角の思ひで一夜の愉快を買はんとして来たのに、眠てばかりゐられては本意でないと思ひ頼りに女郎を呼び起しますが如何にしても眼を覺さぬ。そこで僧は何か悪戯をしたなら女郎も眼を覺すであらうと考へて、彼方此方見廻しますと枕元に鏡臺がある、鏡臺の抽匣を開けて見ると中に剃刀が一つありました。これ幸と剃刀で女郎の髪を一剃ちよとそりましたが、女郎は白河夜船で鼻から提燈を出して眠てゐる。そこで二剃目をそりましたが、やはり大蛇のやうな舂をして眠てゐる。そこでまた三剃目をそりましたが女郎は同じく雷のやうに舂をかいで死んだやうに爲つてゐる。かくして遂に女郎の頭を全く坊主に剃てしまふたが、まだ眠てゐる。僧は此時大に心配し此儘で女郎の眼が覺めたら大變ぢや早く逃げやうと忽ち用意を調ひて女郎屋を飛び出し一目散に逃げ去てしまいました。女郎は坊主にされたのも知らず

して翌朝になりまして漸く眼を醒して見るに御客様が居らぬ。そこで狼狽周章しく御客様は何處へ往た、御客様は何處へ往た坊三何處へ行た、坊三何處へ行た、と申して寢惚氣眼で探し廻るうちに己れの坊主頭に手が觸れました。するとやれ、坊三此處にゐたか、それなら私は何處へ行たらうと申したといふ話が御座ります。

何と馬鹿氣た話では御座らぬか。兎角我等は自己に反省することを知らずして徒らに外境に心を奪はれ本心の主人公を失却して狼狽廻ること此女郎の如くであります。

十七、其好む所生命よりも甚し

耳目口腹の慾に心を奪はるゝ間は人間でありながら禽獸に等いのであります。御覽なされ魚は餌を食ふが爲に人に釣られ、雀は粟を食ふが爲に係蹄に懸り、鼠は食を食ふ爲に猫に捕へらる。人も亦左の如く色を食ひて身を傷け、酒を食ひて泥溝に落ち、賄賂を食ひて法網に懸る。また婦人にありては自ら

墮落して地獄となり、ラシヤメンと爲り、豚と爲り、牛と爲るも皆耳目口腹の慾を逞うせんとするより起るのであります。

昔し支那に二人の書生がありまして一人の言ふには僕は書生の悲しさに三度三度不味物ばかり、一向に珍味佳肴にありつかぬ。これ實に畢生の遺憾と謂はざるを得ぬ。他日僕にして學成り業遂げて志を得たる曉には大いに食ふつもりである。食ひ而して後眠り、眠覺て而して後復食ひ、食ひ終て而して後眠り、眠り終て而して復食ふ」と。時に他の一人の書生の申しますには僕は則ち然らず。食ひ終りて而して後復食ひ、食ひ畢りて而して後復食ひ、食ひ了りて而して後復食ふ。何ぞ眠るに暇あらんや」と申したさうであります。

何と能く食ふたものでは御座りませぬか。此話は人間の卑しい根性を能く言ひ現はして餘蘊がない。

また昔し或書生が腹がへつて致方がない。適う饅頭屋の店先に來て見ると温かい甘まさらな饅頭がポツポツと蒸氣がたつてゐる。書生は之を觀て

最早一足も前へ進むことができません。そこで一計を案じまして饅頭屋の前へ打倒れ口より泡を吹き出しますと、饅頭屋の亭主は大いに驚き書生を抱き起して介抱し、「如何なされました、氣を儘かに御持なされ」といへば、書生はさも恐れたる體にて「ア、怖い、怖い、僕は小供の時から饅頭を見ると何となく怖くて身の毛がよだつ、マア君の店には何と大層な饅頭があるでないか」と申しました。亭主は書生の饅頭を怖るゝ様子の如何にもおかしいのを見て再び彼を驚かして呉れやうと思案して「左様で御座るか、然らば暫時私の方の奥の間にて御休みなさませ。幾分か御心も落つきませう」と言ひつゝ、自ら案内して奥の一間の澤山に饅頭を積み置ける所に入れ、必定書生は再び氣絶するならんと、襖の外より窺ふに、書生は平然と坐を占めて、さも嬉しげに兩手にて饅頭をとり頻りに頬張て居る様子。亭主は餘りの不審さに書生が百四五十個も饅頭を食ふたらうと思ふ頃、襖を開けて「書生さん、汝は其饅頭は怖くは御座りませぬか」と云へば書生は「ア、最早饅頭は少しも怖くない。茶が一二杯怖くなつた」と申しました。

口腹の慾を充たさんとして汲々たる人間の状態は此様なもので御座りませう。思ふに食いたいと眠むたいのは下司の人間に免る可らざる所でありませから川柳にも

ぐつすり寝たいが下女の願なり

など申してあります。然れども睡眠を嗜む者は獨り下女のみでは御座りませぬ。昔しの韓退之王安石などさへ非常に睡眠を好んだと傳へてあります。或人が其朋友を訪問致しまして暫時客間に控へて居るうちに睡を催ほし、頻りに船を漕てゐると主人が出て来て客の睡るを見まして、まさかに呼び起すも氣の毒と思ひ其儘對坐して居るうち主人も睡氣を催ほして、斯をかいて眠つてしまひました。良久て客が眼を覺して見ると主人が熟睡の體である。そこで呼び起すも無禮と心得て其儘再び眠に就きました。主人も暫時睡りて眼を開いて見れば客は未だ覺めざる様子故再び眠てしまひました。兎角するうちに客が三度目に眼を開いて見れば日はや西山に傾いて鴉も時を求めて林に歸る。主人を見れば未だ覺めざる様子である

依て潜に出て歸り去れば主人も後に眼を覺し客の居らざるを見て己が室に歸つたといふ話があります。

何と善く寝たものでは御座りませぬか。陸放翁が詩に

相對蒲團睡味長

主人與客兩相忘

須臾客去主人覺

一半西窓無夕陽

とあります。洵に暢氣千萬のことでありませぬ。斯くして吾等は嗜欲の奴隷と爲り飲食睡眠の爲に一生を埋没してしまふ。而して動もすれば嗜欲が遂げられぬとて不平を言ふ、實に困つたものであります。

或人が八右衛門と申す男に向て八右衛門人間は何の爲に此世に生れたのぢや。世間の物を見なされ茶碗は茶を飲む爲めに生れ、鐵瓶は湯を沸す爲めに生れ、稻は米を實る爲に生れ、櫻は花を咲く爲に生れ、鶏は時を告る爲に生れ、犬は夜を守り、猫は鼠を捕る爲に生れてゐる。人間は何の爲に此世に生れたのぢやと問ひましたら、八右衛門は暫く考へて「人間は食ふたり、寝たりして不平を言ひに生れたのぢや」と申したさうで御座ります。

人生の目的の何たるにも心附ずして一生涯を送る人は八右衛門の言ふ通り、食ふたり寝たりして其上不平を言ふのみが藝である。何と御互に耻かしいことではありませぬか。

十八、劉伶は酒に死し石崇は財に死す

嗜慾に耽る時は恐るべき悪習慣を作りまして如何に自ら其悪癖を直さうとしても直すことができぬやうになり、遂には其悪習に命を取らるゝは吾等の常に見聞する所であります。煙草の如きは非常に意志の強い人でさへ其習癖を矯めることができぬ、是れ其一例であります。蜀山人が酩酊して大道に横はり其儘熟睡して小間物店を出してゐました處、狗が来て其小間物店を悉く喰ひ且つ蜀山人の口をも奇麗に舐めました。それより門弟の者が蜀山人に諫めて禁酒させましたが、二日目には禁酒を破りました。

我禁酒破れ衣となりけり

さ北ついでくれやれさしてくれ

劉伶は酒に死し石崇は財に死す

と狂歌を詠じたと申しますが、之に似た話が支那にもあります。

艾子は相應の學識もある男で御座りましたが、酒を深く嗜みて常に酒氣を帯びてゐました。門人が之を憂へて諫言しても容易に用ひませぬ、依て謀計を回らして禁酒させやうと思ふて居る處、幸に艾子が大酩酊を致して例の小間物店を廣げました。門人は此機に乗じて諫言せんとて豚の肉を一塊切つて参りまして之を小間物店の中に置きて、「先生、先生には大變なことを遊ばした。御覽遊ばせ只今小間物店と共に臟腑を御吐きになりました、人には五臟より御座りませぬに一臟吐き出しては最早四臟となりました大抵に御禁酒なさらぬと命が危う御座ります」と申しますと艾子は醉眼朦朧として豚の肉を眺め、なる程予は四臟になつたか。併し唐には三藏法師さへ活きて居た、四臟なら一臟多いから差支なからうとてまた酒を飲だといふ話が御座ります。

されば人の習癖ほど恐る可きものは莫い。劉伶が酒に死し、石崇が財に死したるが如き、其好む所が生命より太甚しきに至るのであります。

十九、忘八

支那にては荒淫度なき事を名つけて忘八といふ、忘八とは孝悌忠信禮義廉耻の八を忘却するからであります。されば禮記には

敖は長す可らず。欲は從にす可らず。志は満す可らず。樂は極む可らず。とある。禪宗にて寡欲主義を唱ふるも畢竟此意に外ならぬ。

昔し彌蘭陀王が那先比丘に問はるゝには、出家は自ら其身を愛するやと。

那先曰く、出家は自ら其身を愛せず。王の云く、出家は自ら其身を愛せず、され

ば何故に起臥に安温を得、善美を食ふて自ら護るや。那先曰く、王は昔て戰

闘に入りしや。王の云く有り。那先曰く、其時負傷せしや。王の云く、頗る

瘡を被れり。那先曰く、其瘡を如何にせしぞ。王の云く、膏藥を塗り、綳帶を

施せり。那先曰く、瘡を愛するが爲に綳帶せるか。王の云く、我瘡を愛せず。

那先曰く、瘡を愛せずんば何故に厚く綳帶して之を保護せるか。王の云く、

唯瘡をして速かに癒えしめん爲のみ。那先曰く、出家も亦是の如し、其身を

貪著せず、而も衣食するは用て美と爲し、用て好と爲すに非ず。唯僅かに身體を支へて佛教を奉行せんが爲のみ。

右の問答の如く吾等の暖衣飽食する所以は欲を縱まにし樂みを極むる爲ではない。唯此身を愛護して人たる道を守り、仰いでは天に耻ぢず、伏しては地に愧ぢざる人と爲らんが爲であります。さるを欲を縱まにして荒淫度なく、孝悌忠信禮義廉耻の八を忘るゝが如きは憐むべき動物の境界であります。

二十、道德的習慣

人には悪しき習慣はつき易く、善き習慣はつき難いもので朝寢の習慣や、喧嘩口論の習慣や、其他御饒舌の習慣、馬鹿笑の習慣、居眠の習慣、爪を噛む習慣、鼻糞を掘る習慣、頭を搔く習慣、放屁する習慣などは忽ちにつく。而して一旦ついた習慣は生涯之をぬくことができないのが多い。故に吾等は成るべく悪しき習慣をつけぬやう、善き習慣をつけるやう朝夕心がけねばなりません。道德の實踐と云ふも善き習慣をつけるに外ならぬ。

博物學者ビュポンは朝寝の習慣があらましたが、此惡習を改めやうと思ふて、僕に頼みまして早朝に呼び起して貰ふことにし、其報酬として十錢宛與へる約定を致しました。僕も大いに喜び翌朝ビュポンを呼び起さんとて大聲に先生、先生、夜が明けましたと幾度も叫びましたが眼を醒さぬ。止むを得ず其儘にして置くと午前十時頃に起き出て「ボーイ、貴様は何故私を起さぬか」と申します。「呼びましたが幾度呼んでも御眼が醒ませぬから拾置ました」と僕が答へた「然らば明朝は手で揺り起して呉れ、必ず十錢遣はす」と。明朝僕が「先生、夜が明けました」と言へど容易に起きませぬ。依て僕はビュポンの臥床に近づいて手をかけて揺り起せば「ウー、眠むたい、煩さい」と僕頭の頭を打ちます。僕も僅かに十錢で頭を打たれてはつまらぬから其儘にして置くと再び午前十時頃に起き出て「ボーイ、貴様は何故私を起さぬ。おれ程丁寧に頼んで置たに」といふ。「私が手で揺り起さうと致しましたら、先生は煩さいと云ふて私の頭を打ちましたから止めました」との僕の答。「それは私はわるかつた、明朝よりは打たぬから起して呉ろ、十錢は相違

なく遣はす。僕も十錢の銀貨が欲しさに明朝は手を以て無理に引き起しましたからビュポンの大層喜んで十錢を與へ、それより毎朝十錢宛に工呼び起して貰ひましたが、始めには起きるに困難であつたが次第に容易になり、遂には僕の聲を待たずして眼が醒めるやうになりました。加之其後は如何にしても早起させずに居られぬやうになり一朝でも朝寝すれば其日一日不愉快を感じるやうになつたと申します。

道徳も此の如く始めの程は兎角行ひにくいけれども怠らず實踐する間に次第に容易になり、遂には道徳が楽しく爲つて廢す可らざるに至る。さればラスキンも申した如く

吾等は正義を爲すのみにあらずして正義を愛し、慈善を行ふのみにあらずして慈善を樂みとし、道徳を行ふのみにあらずして道徳を憧憬し、渴望するに至らねばならぬ。

正義を愛し、慈善を樂み、道徳を憧憬渴望するに至るは吾等が生涯の目的であります。

二十一、佛陀の摸倣

古語に

孔子の家の兒は罵ることを知らず。曾子の家の兒は闘ふことを識らずと申してあるも教育習慣の然らしむる所である。而して教育習慣の可能な所以は人間の摸倣性に由るのであります。小兒が人真似をするは何人も知る處であるが大人の真似には氣のつかぬ者が多い。近頃誰が創めた者やら海老茶袴を着けましたのを日本中の女子等が真似まして如何なる山村僻邑でも海老茶にあらざれば女子にあらずと云ふ有様であります。また鹿髮即ちオデコカクシとても其通り非常なる勢にて真似られつゝある。斯るとは單に婦人のみに限りませぬ、堂々たる有髯男子も同じとて、獨乙にて新式の軍制を案出すれば忽ち日本も之を摸倣し、英國にて新案の大砲を作れば佛國でも直ちに之を摸倣し、米國でトラストが流行すれば日本にても直ちに之を摸倣するといふ有様で、大は軍事政治、法律、文學、宗教より小は娛樂遊戯に至

るまで皆人間の摸倣性即ち人真似によらざるはない。されば學問にあつても歐州でエネルギーギズムなる學説が流行すると言へば我國にてもエネルギーギズムの何たるを知らずして賛成を表し、米國にてプラグマチズムなる學説が流行すればプラグマチズムの何たるかも究めずして無暗に賛成する。さればヤング教授のローンテニズムが善いと言へば成る程面白さうな學説ぢやといひ、ステウデント博士のベースボリズムが善いといへば直ちに成る程其れは骨の折れさうな學説ぢや大賛成ぢやと雷同し、コック氏の案出せるピーフステキズムは如何、同氏の新案なるライスカレーイズムは如何といへば、如何にも結構なる學説賛成といふ。然れば前者ならば一皿廿錢、後者ならば一皿十五錢にまけ申さうと學説が皿に載せられる世の中で御座ります。何と面白い話では御座りませぬか。此の如く人には摸倣性がある。門前の小僧は習はぬ經を讀むと申しますが、豈管門前の小僧のみならんや、天下酒々として皆習はぬ經を讀みつゝあるのであります。されば道德的習慣も此摸倣に由るので賢を見ては齊しからんことを欲するは即ち人真似であります。

嗚呼釋尊一度世に出てより天下釋尊を摸倣する者それ幾千萬人ぞや。孔子一たび世に出てより天下孔子を摸倣する者それ幾百萬人ぞや。達磨大師一たび世に出てより天下達磨大師を摸倣する者それ幾千萬人ぞや。思ふに學ぶとは直似ぶと云ふことで、聖人賢人古聖先哲の徳行と人格とを真似るのであります。

英人ポーデンが佛陀の摸倣を著して毎日〱佛陀か金口の教誨を一條づゝ實行するやうにしたのは大いに稱すべきであります。若し吾等が毎日〱佛陀の教誨を一條宛でも實行すれば一年三百六十五日には佛陀の教誨を悉く實踐して佛陀と全く異らざる人となる。即身成佛とは此義であります。併し吾等の摸倣すべき理想的人格は成る可く完全なるを要する。而して吾等の理想として最も圓滿なる者は縦に三世に亘り横に十方に逼り活ける佛陀の法身即ち自由なる宇宙の生命平等なる天地の靈源清淨にして光明ある絶對の妙相であります。吾等は此活佛を摸範とし、此清淨なる光明を理想として毎日〱自己の人格を高潔にし圓滿にせねばならぬのであります。

二十二、精神の休養 其一

上述の如き理想を以て吾等が日常の生活を導かんには吾人の精神が物欲に蔽はれて惜しい欲しい憎い可愛いの情に紊亂せられてはならぬ。成る可く心水を澄清して無用の思慮を費やさぬ工夫を要します。古人も

思慮の人を害すること酒色よりも甚し。富貴の家は多く酒色を以て生を傷り賢智の士は多く思慮を以て壽を損す。

と申して居ります。多く思慮を費やさぬのは一方には精神の休養となり、一方には心水の澄清となりて一舉兩得であります。

昔し山王權現の猿が集りて庚申待を致しました。時に親猿の云ふやう、汝等各々藝盡しをして樂むべし、されど、いつもの如く猿の木登も珍らしからず。宜しく珍しき遊びを爲すべしと。其時一疋の兒猿は兩手に眼を塞ぎて見猿となり、また一疋の猿は耳を塞ぎて聞猿となり、他の一疋の小猿は口を杜ぎて言猿となりました。親猿は三疋の兒猿を見て莞爾として問ひけ

るは「汝が見猿と爲れる心如何」。見猿答て曰く「眼は諸欲の媒なり。他の金銀財寶を見ては貪欲の念を起し、他の婦の美なるを見ては淫欲の念を起し、遂には不義不道の穴に落ちて身を誤る。眼に遮る物毎に就て惡念萌す故、只何事も見猿となるなり。五色は人の眼を盲ますとは老子の語なり」と申しました。

却説吾等は眼に映する一切の物に執著して妄念の止む時は無い。妄念の止む時が無いから、悻悻不義に陥るので、寔に殘念の次第である。

古諺に

一日除目を見れば三年道心を損す

といふてありませうが、除目とは官吏の叙任のことで、何某が何省へ出仕して、何某が何位に叙せられ、何某が何官に任せられたと記したものである。此除目を見ると三年道心が失せると申すのであります。成る程他人の榮達を見ますると妬ましく思ましく思ふのが凡夫の常で、何某が今度高等官に任せられたと聞くと、「そうが彼の馬鹿野郎が上官の御聲の塵を拂つて到頭立身し

をつたか。これぢやから浮世が忌やに爲るなど申して他人の立身が己れの害にでもなるやうに思ふ。斯様な人には他人の喜ばしいと、楽しいことは皆癢に障はる。小人とは此様な人を指すのであります。

次に親猿のいふやう「聞猿の心如何」と。聞猿答て「聲耳に入て心に應ず。我を褒るの詞を聞けば喜び、我を誇るの言を聞けば心に怒り、人を恨み他を咎め、一朝の怒毒に由て身を誤る。又は他人の好事を聞ては羨み、無根無形の聲の爲に惑はさるゝこと多し。只何事も聞猿となつて善惡是非のことを耳へ入れざるなり。五音は人の耳を聾すとは是れ亦老子の詞なり」と申しました。

他人の毀譽に對して喜憂を爲すは自ら信すること堅からざるによるので、己れにさへ疚き所なくば天下の人皆我を誇るとも自若として變せざることができます。マアカス、アウレリウスの申した如く、

毀譽とは何であるか、开はの詞に外ならぬ。人の詞とは何であるか、开は人の聲に外らぬ。人の聲とは何であるか、开は聲帯の震動に外ならぬ。然れ

ば聲帯の震動に對して吾人は喜憂を爲す邊はない。然れば達人に在りては人の褒貶毀譽は心頭に介する價値の無いものであります。

二十三、精神の休養 其二

次に親猿の云ふやう「言猿の心如何」と。言猿答へて「口は是れ禍の門なり。舌は是れ身を斬るの刀なり。人の善惡是非を評量すれば惡き者に忌み憎まれ、善言も盡さざれば却て人の誹を受く。多言なれば敗れ多し。孔子金人の背に銘し給ひし三鍼の旨にも言を謹むを第一にし、又飲食を節し、言を慎むといへば善惡是非の事に於て但何事も言猿なり」と申しました。

芭蕉翁が

人の短をいふ莫れ、人の長を説く勿れ

物言へば唇寒し秋の風

と戒め、たのも此意であらう。

時に親猿の曰く「汝等の言ふ所誠に世間に處して人と交るの要路なりと雖も未だ至極とは謂ひ難し。眼は物を見、耳は聲を聞き、口は言ふが其職なり。然れども眼にて見るに非ず、耳にて聞くに非ず、口にて言ふに非ず、見る可きもの、聞く可きもの、言ふ可きもの身の内に宿り居るなり。汝等知れりや、否や、外にある眼耳口を塞きて外をのみ防ぎて内を守るの要道に迂し。常に内を防ぎて我一心頭に見猿聞猿言猿の三猿を養ひ置かば、眼にて見る所、耳にて聞く所、口にて言ふ所も、此三官の諸欲を内心の三猿が防くを以て貪り求むるの心路を絶す。砂糖を見て甘からんと思ふは我心、眼の前に亂さるゝなり。其甘からんと思ふ所を防ぐべし。是れ禪家に所謂心は増壁の如くにして道に入るべしと言ふ所にて心路を斷する旨なり。昔し或人平生學問したる書物を庭に積て焚捨んとす。一人の禪僧が云く、汝何とて書を焚くぞ。彼人答て云く、佛書は不淨を拭ふの紙屑なり。儒書は聖人の詞の糠なり。今迄は徒らに文字の上に於て道を求めたり。われ文字の上に道の無き事を自得せり。故に焚捨んと思ふなりと。禪僧の云く、汝書を焚か

すとも汝が腹の中の膏物を忘るべしといへり。此等の意味を味はひ知らば眼耳口を塞くに及ばずと長々と説き曉さましたるに三疋の子猿は詞を揃へて云く「親父殿には何猿なにざるに爲らんと思はるゝや」と。其時親猿従容として曰く「我は何事も不思議ふしぎに爲るべし。口は鼻の如くにし、眼は耳の如くにし、耳は尻の如くせば適あたとして可ならざるはなし」と申しました。

二十四、精神の休養 其三

上述の話にて領解せらるゝ如く、精神を平かにし邪欲を防ぎ本心の主人公を見得せんには

善悪を思はず是非に關する莫れ

てふ古人の訓戒を守るにある。世人は往々此點を誤解して善悪も是非も思はず、木石の無情なるが如くなれば宜しいと思ふ。道は石を珠となし、ガラスを見てダイヤモンドと思ふより愚なる見解であります。木石の如く無識無情になつたとて毫も禪意を得た譯では無い。只精神が外界の物に轉せられ

て情波識浪を起し、放僻邪侈に流れて本心の光明を没却せぬやうにするが禪に所謂

心墻壁の如くにして道に入るべし

てふ語の意味である。また

井の甞を見るが如く、驢の井を見るが如し

とあるも同様であります。或人が鴨長明なかつらに守札まもりがはを乞ふた時に

守りとは己れも知らず小山田に

弓もて立てる案山子なりけり

と一首の歌を詠よんで興へたと申しますが、己れも知らざる案山子が田の守りとなる如く、吾等も私心を捨て小なる身の我見を忘れたなら實に天下の守りとなる行ひができません。

鐵舟居士の句に

倒れても弓矢を捨ぬ案山子かな

とある。案山子の如く小なる一身の我見私私を捨てたなら斃るゝまで武士

道を守ることができるのであります。

二十五、精神の平和 其一

吾等が精神は兎角亂れ易くして其平和を維持することは困難で御座ります。昔し蔡君謨と申す人は大層長く麗はしき髯をもつて居りましたるが、或時宮中に御内宴があつて、蔡君謨も陪食を仰せつけられました時、天子様が蔡君謨の髯を御覽せられて、汝は夜分夜具の中に髯を入れて寝るか、夜具の外に出して寝るか、と御尋があつた。蔡君謨は一向に心附ませぬとて赤面して歸宅致し、其晩注意して見ましたが、さて夜具の上に置て見れば何となくざわ／＼して心持が悪い。さりとて夜具の中に引き入るれば邪魔になつて寝られぬ。或は夜具の上に置き、或は夜具の下に入れ、一夜終に眠ることができなかつたといふ話であります。

蔡君謨は平生髯のことは少しも氣に留めずして、寝た爲に安眠ができたのである。さるを天子の一間に刺戟せられて己れが髯の置所に心を煩はし爲に

徹夜眠られなかつた。かく吾等は思慮を多くして事物に拘泥する時は必ず事物に束縛せらるゝに至る。故に拘泥の病を去るは精神の平和に大切な要件であります。

昔し司馬温公と王荆公とが或人に招かれて饗宴の席に列した時、主人は非常に酒好きの人で無暗に酒を強ひました。温公も荆公も酒は元より嫌ひであるが、温公は快く受けて一杯を傾けましたが、荆公は始めより杯を手にはせず、苦い顔をして居るのみであつたと申します。

酒を飲むは必ずしも善い事ではない、さりとて一滴飲みても罪惡と思ふが如きは迷信に外ならぬ、荆公が己れは酒を好まねばとて苦盡の百疋も食ふたやうな顔して人を睥めつけ居たるは其心が狭少にして物に屈托する弱點あるを示してゐる。之に反して温公が切角の主人の志を無にせないで快く一杯を受けたるは如何にも温厚閑雅なる大人君子の氣性が見えます。吾等は荆公の偏屈を止めて温公の閑雅を學ばねばならぬのであります。

二十六、精神の平和 其二

右と同様の話が二程子にもあります。

明道伊川の二人が成人の饗宴に列したるに主人は興を添へる爲に遊女をして座間に幹旋せしめました。然るに伊川は嚴正謹格の人であるから、然として其怒り面色に現はれ袖うち拂て立歸りました。明道は少しも怒る氣色もなく悠然として饗應を受けました。翌日に至りましても伊川は昨日の憤りが未だ解けませぬので明道の謂はるゝには、昨日は席上に遊女ありて我心に遊女なし、今日は席上に遊女なくして伊川の心に遊女ありと申されたといふ話であります。

程明道は温容玉の如くで其精神の鍛錬に於ては伊川に勝ること遠いやうに思はれます。禪學の修行は程明道の如く閑雅なる心を養ふが第一で、四角張た程伊川の如き心の角をとるのであります。千利休の話に下の如く記してある。

或人茶は詣ひありと云ふことを利休に問ひし時答へけるは我友にノ貫といふものあり吾を茶に招きし時時刻を違へたる文をこしたり。刻限を違へずして行きけるに内なる潜戸の前に穴を穿り上に簀子を敷きて新たに土を置きたり。われは心なく其上にのりて入んとする折から地の土くえて穴に落ちたり。穴の底に土のぬりたるが中へ蹈込みたれば取敢ず湯のみして再び入りけるを人々の興としたり。此事かねて期明と云ふ者山科へおはさばかくと早く我に物語れど、主人の心づかひを吾かねて知りたり。とて穴に落ざらんは志を空しくすることの本意なさに、穴と知りつゝ落入りぬ。扱こそ其日の興とはなりたり。茶は只管にへつらふとはあらねど、賓主共に應せざれば茶の道に非すと語りたる由。

穴なりと知りつゝ主人の志を空うせじとて其中に落入りて興を添へたる利休が優にやさしき心根は感服の外は御座りませぬ。眞の風流の味は斯様な所にあるので、貫が俗悪なる戯れと對照する時は雪と墨の相違があります。

二十七、放下著 其一

吾等は事物に屈托するを止めて常に洒脱とした精神をもつのが肝要で御座ります。即ち善く垢抜がして流河で足を洗ふたやうに政治家は政治家臭からず、實業家は實業家臭からず、官吏は官吏臭からず、學者は學者臭からず、萬事に洒脱せなくてははいけません。人は臭みの有ると無いとで修養のできて居るか否かが知れます。官吏は兎角官吏風を吹かせたがり、政治家は兎角政治家風を吹かせたがり、學者は學者風を吹かせたがり、乃至主人は主人風を吹かせ、番頭は番頭風を吹かせ、妻君は妻君風を吹かせ、妾は妾風を吹かせ、玄關番は玄關番風を吹かせ、門番は門番風を吹かせ、車夫や御者や御三までがそれぞれ風を吹かせるから其風下に居る人はたまりませぬ。之に反して心の能く鍊れた人は決して主人風を吹かせたり上官風を吹せることはない、殊に古への武士は質朴で餘計な虚飾を用はず、洒脱とした人が多くありました。

徳川家康が參州を領したる時、本多作左衛門高力、左近、天野三郎兵衛の三人

を奉行に仰せ付られたる所、これ迄今川氏の領地たりし村々は先代の事などを申し争ひて治まり兼たるが、本多作左衛門罷り越して制札を一目したるに法律の箇條多く六つかしければ、改めて三條の制札を立てました。

一、人を殺す者は命がないぞ

一、火をつくる者は火あぶりにするぞ

一、狼藉をせば作左しかるぞ

右の三條を假名にて書き記したるに其後は人民が善く治まりましたと申すことであります。

作左が簡易にして質朴なる武士ぶらす役人ぶらす、天真爛漫なる所が却て人を治め世を教ふるに足りたのであります。今日の官吏等が繁文縟禮、空威張して杓子定規ばかりで人民を困らせると雲泥の相違があります。

二十八、放下著 其二

禪學は質朴簡易を貴びますから、其修行も本多作左衛門が制札の如くで簡易

したもので、念佛も申さず、禮拜もせず、御經も讀まず、香も焚かず、只靜坐一番本心の主人公を慍々たらしむればそれで善いのであります。

有名なる禪宗の碧巖集に評唱をつけました圓悟禪師の法子に普照禪師といふがあつて、此普照禪師の所に一人の老僧が居りました。此老僧は毎日大悲咒と申す御經を三百遍讀み、其他の經も暇さへあれば何百遍と讀みまして、夜に入ると佛像を拜すること三百拜宛でありました。其時雪堂和尚が老僧に向て「何ぞ一切放下せざるや」と申して何故一切讀經も禮拜も放下し止めてしまはぬかと言ひました。老僧の云く「纔かに放下すれば便ち閑過するを覺ゆ」とて、少しでも止めて居れば無駄に時間を過すやうに思ふといひました。其時雪堂が「爾若し放下せば却て閑過せず」とて、汝が若し一切止めたなら却て時間を閑に過すことは無いと言はれました。

右様の次第で本心の光明をも認めず、何等の安心もなくして猥りに蛙の鳴くやうに喧しく經を讀み佛を念じても役にはたぬ。かくては佛を拜し經を讀むのが却て一生を閑却することゝなるのであります。

私が或時大藏經の一部を繕つくいて居りますると一老僧が私を詰つて申しますには「御前は何故に袈裟けあさを搭かけ禮拜をして大藏經を讀まぬか、俗書でも繕くやうに俗服の儘で讀むとは餘り無道心の致し方ではないか」と。私は其時に笑て申しました「成る程御尤の次第でありますが、禪僧は天地を以て一卷の經として居るので、柳の緑きよ花の紅くわんが黄卷赤軸で御座りますから、俗書も佛書として讀み、俗服も僧服として著け、フロック、コートも袈裟として受用する自由がある。されば眞理の在る處が其儘聖書なり聖經なりで、四角な文字を並べた書物ばかりを御經とは思ひませぬ。故に大地なる經は足にて踏み、空氣なる經は鼻より吸ひ入れ、水なる經は口より飲込ます。何も一々禮拜ばかりするのが強たがち道心といふ譯でもありません」といふたことがあります。

二十九 放下著 其三

黑氏梵志といふ天竺の外道が宗教上の問題に疑ひを起しまして、生死の大

事を明めることができませぬので、御釋迦様の所に往て其疑ひを解いて貰はうと考へ。御釋迦様に奉るべき梧桐の花を折りて兩手に持て参りました、御釋迦様は梵志の來るを御覽なされて「放下著」と申されました。梵志は花を放下せよとの仰せと心得て左手の華を捨ると、また御釋迦様が「放下著」と言はれた。依て右手の華をも捨てますと、またも「放下著」と云はれました。梵志は妙に思ひまして「兩頭共に捨つ這の何をか放下せん」とて兩手の華を捨てましたのに何を放下するのでありますかと問ふ。時に御釋迦様は「中間底を放下せよ」といはれて、兩頭は放下しても中間に何か一物ある、その一物を放下せよと示されました。此一言にて黒氏梵志は平生の疑團が一時に解けて安心を得たと傳へてあります。

此一段の問答に就て熟ら考へて御覽なされ。吾等の胸中が常に穩かならず、何となく安心のできぬのは畢竟何か一物我心に貯へて居るからで、若しも胸中無一物なら疑ひも恐れもない筈であります。されば我心に疑ひが起れば其疑ふ底の者を放下し、また恐れがあれば其恐れる底の者を放下するのが禪

學の修行である。若し我心中に惑ひがあるとせば其惑ふ底は何物ぞと究め、我心中に怒る者があれば其怒る底の者は何物ぞと問ひ、喜ぶ者、哀む者、傲る者、僞る者、畢竟何物ぞと究盡し、一々自己に反省すれば我心中の暗雲は忽ち晴れて一切放下し去つて青天白日となります。

三十、放下著 其四

古へ竹林の七賢人と稱して大層有名な隠士がありました。其七賢人の一なる阮籍は母の死んだ報知を得た時に悲を圍むで居りましたが母の訃を聞ても悲を止めずに悠々と圍み畢りて酒を二斗飲んだと申します。また劉伶は鹿の車に乗り常に一壺の酒を携へて之を飲み僕をして鋤を擔ふて從はしめ、到る處にて死せば吾を埋めよと命じたと申してあります。

以上の如き七賢人等の行ひを見ますと彼等は一通りの悟は開いたもの、未だ其悟が煮えきらぬ、生悟りであります。何となれば彼の阮籍が其母の死んだ報知を得て平然たりしが如きは表面より見れば生死の大事に惑はざる

善き覺悟があるやうに見えますけれど、這は淺薄極まる悟りである。即ち老少不定ぢやから老母が先きに死なうが孫が目の前で斃れやうが何でも無いといふ悟りである。それしきの理窟悟りなら誰でも朝飯前にできる。併し眞の悟りは其様な理窟ではない。生死無常の世なることは充分に悟り盡して居れども、大恩ある母の壽命は一日も長く保たせて孝養が盡したい、また其訃を聞ては身も世もあらぬ思ひにて水漿も口に入らず、自ら母の棺を昇いで泣く泣く野邊に送るのが眞に悟道せる人の行ひである。さるを母の訃を聞て平然として酒を飲むが如きは賢人ではなくて變人であります。また劉伶が酒の爲に飲まれて命を喪ひたるが如きは物欲の弊を去る能はざる未熟の行ひで取るに足らぬ、且つ彼が僕をして鋤を執て己れに従はしめたるが如きは笑ふに堪へたる虚榮である。這は外面上放達を装はんが爲にして彼が虚榮心は知らず識らずの間に曝露して居る。希臘の犬儒が襁褓を著けて得意氣にソクラテスを見た時にソクラテスが、犬儒、汝の襁褓の穴より虚榮心が見ゆるといふたやうなものであります。されば生悟りは兎角變人と

なり勝て却て悟らざる人に劣ることがある。これ放達とか逸士とか隠居子とかいふ一物を胸中に蓄へて放下せぬからであります。

三十一、放下著 其五

鏡紫の山中に名を越宗、字を蘭陵と申した禪僧がおりまして、特に夜雨を好み、雨の降る夜は香を焚き静坐して一夜を過すを常としたれば、人々夜雨和尚と呼び自らも夜雨禪師と稱して居りました。此僧山居せざる以前は四方を遊歴し、朝野市井を分たずして酒肆淫坊をも嫌はず、心の欲するまゝに宿を求めて過しました。世人が其故を問ふことあれば、吾道は言語を以て陳ぶべからずと答へたこのことであります。

永鳳と云ふ人が之を論して

釋氏の徒に隱逸の者あり。开は無上菩提を成せんとてなり。無上菩提既に成する時は身といふも無く世といふも無く、十方世界が唯一無上菩提なる時は、何れの處にか隠るゝことをせんや。これによりて見る時は大乘法

中に何ぞ隠逸といふことあらん。然れども古への大善知識もたま〜山居するもの無きに非ず。蓋し方便無量應化無方の意の存する處、思ひ見るべし

と申して居ります。禪門の修行は變人となりて山中に隠れ、人生に遠かりて自ら高しとする放達の士となる爲ではありませぬ。人生の實際生活上有用の人物と爲るのが主眼であります。世には人間の務を嫌ふて只管時世に遠からんと努むる者もおりますが、开は修行の未熟なるに由るので、一方より考ふれば卑怯の行ひであります。禪と近世主義とは全く別物なることを知らねばなりません。

三十二、放下著 其六

精神の鍛錬が足らざる時は吾等は兎角神経質に傾き易い。尤も這は其人の性質にも歸因するに相違ありませぬが、過度なる腦髓の使用は神経過敏なる病を誘起すること、何人も疑ひない所であります。

昔し智恵伊豆守と呼ばれました松平伊豆守信綱は餘程神経質の人であつたと見えまして、或時御膳の鱈の中に芥があつたとて大層立腹しまして近臣が種々御説を致しましても御不興が直りませぬ。其時幸に井上新左衛門といふ滑稽輕口を申す男が参りまして此事を承り、早速伊豆守に對面して、扱殿様には鱈の中に芥があつたとて大層御憤りと承りましたが、それは殿様の御心得違ひで鱈には芥は附屬物で御座ると無遠慮に申しました。「何故に鱈には芥が附屬物なるか」と問はると。「さればなり、芝居の三番叟に「トトトタラリ、トトタラリ」とありましてチリヤタラリ」と云ふことが御座るから、鱈には芥が附屬物で御座ると申上るに伊豆守も笑はれて機嫌が直つたと記してあります。

されば伊豆守も頗る神経質の男であつたと見えます。尤も食物に不潔なる物の入つたのは誰も不快に感ずる所で御座りまするが、近臣の者ぢやとて故らに入れたのではありますまい。是の如き些事を長く心頭に留めて忘る能はざるは全く精神の不鍛錬より來るので戒めねばなりません。

梁の武帝の子なる昭明太子は食膳に死せる蠅の入りたるを見て近臣に易えぬやう潜かに之を隠したと傳へてあります。これ實に大人君子の行ひと謂ふべきで御座ります。故に吾等は些事を速かに心頭より放下するの工夫を學ばねばなりません。

三十三、放下著 其七

松平伊豆守が神経質なるは下の話でも善く知れませう。

伊豆守は常に物事に念を入れ過ぎる癖があつて近臣も困却する所から、井上新左衛門が罷出て「殿様餘り念を入れるは却て宜しく御座らぬ」と申し上げた。「何故、念を入れてはわるいか」と問はれます。「去ればなり、昔し唐の玄宗皇帝は揚貴妃と名くる美人を殊の外に御寵愛遊ばされましたが、揚貴妃が此世を去りて後、如何にもして勅使を幽界に遣はし皇帝の慇懃なる思召を傳へさせんと企て給ひ、仙術を修めたる方士を召し出して玉章を貴妃に傳達するやう命せられました。方士は勅命を奉して蓬萊の仙境に到り

揚貴妃に面會して皇帝の玉章を傳達し、歸るに望みて考へますには、此儘にて立歸らば皇帝の玉章を何處へが捨てたりと疑はるゝやも計り難い。依て念を入れまして揚貴妃より玉章を受取りたる證據を申し受けて歸りたしと申せば、揚貴妃も尤なりとて髮にさしたる玉の簪を渡しましたが、方士は猶ほ念を入れて考ふるに玉の簪は世間にありふれたるもの故に買ふて來たとの疑ひもあらん。他に類の無き證據を賜はりたしといふに、然れば妾と皇帝と一夜物語せしことこそあれ。これは誰も知る者なければ、とて秘密の物語も方士に傳へて證據と致させました。方士は斯く念に念を入れて證據を得、立歸りて皇帝に復命したるに皇帝は方士が揚貴妃と皇帝との秘密を知り居るは彼が揚貴妃に通じたる證據なりと思召して忽ち死刑を仰せつけられました。故に餘り念を入れるは宜しく御座らぬと申したさうであります。

馬鹿しく念を入れるは儘かに神経質の然らしむる所で、事物に觸れて見苦しいものであります。神経質の人は手紙を書いても他人に托して投函

せずして自ら出て郵函に投入する、且つ自ら投函しても函の中途に支へて居りはせぬか、脚夫が配達する途中に紛失はせぬかなと思ひ煩ふ。また人の笑ふを見ても己の顔に何か附いては居らぬか、己れの衣裳に何か汚れでもあるか、己れを侮るのか己れの噂をして居たではないかと心配する。萬事萬端千思百慮して夜もろくに眠られぬのが常であります。此の如き人は早く禪學に志して「放下著」に參じ精神を休養するが宜しう御座ります。

三十四、放下著 其八

却説松平伊豆守も井上新左衛門が滑稽談の如く念を入れ過ぎて大きに失敗した話があります。开は天草騒動の時、先きに板倉内膳が征討軍の總大將として賊の銃丸に中りて一命を落しました、其後任として伊豆守は參つたのであります。依て諸將と約定して伊豆守の本陣にて鐘を鳴すを合圖として諸軍一度に城を攻めることに致しました。然るに伊豆守は例の神經質の人であるから鐘の事が氣にかゝる。若し賊でも夜中に本陣へ忍

び込み鐘を打たんとも限らぬと思ひまして、念の爲に鐘木を取て己れの側に持ち來り、これで安心と思ひさや、まだまだ安心はできぬ。鐘は必ず鐘木で打つには限らぬ、何物にても打てば鳴る。這是念の爲に鐘を卸して地上に置けば宜しいと思案して、鐘を卸しましたが、まだ安心がならぬ。鐘を卸したからとて懸けて鳴せば直ちに鳴る、これではならぬと、鐘を蕪にて幾重にも包み其上から繩にてぐる／＼捲き、これにて安心と充分に念を入れて安心して居ると、夜中俄かに賊が攻め來りまして大騒動と相成る。鐘を打たんとすれども繩を解くの蕪を取るの、鐘を懸るの、鐘木が見當らぬのといふうちに時機を失して鐘を鳴すことができなんだと申します。

取越苦勞の多い人は往々伊豆守の如き失策を致します。心配をして骨を折て、それで失敗致すのですから割に合はぬ話してあります。

故に萩原宗固の詠じた如く

樂まん昨日は過つ明日知らず

けふの一日を心靜かに

と、其日くを心靜かに樂むが何より肝要で御座ります。蘇東坡が范景仁を評して

范景仁晩年清慎にして嗜慾を減節し、一物も心に芥蒂せず。眞に是れ佛を學ぶ作家なり。

と申しました。范景仁は佛法を好まなかつた人でありますが其心に一物をも芥蒂せざる所は禪の所謂放下著に符合して居るのであります。

三十五、放下著 其九

さりとして心中の思慮百端千緒なる時に方りて之を放下せんとすれば愈々思慮を増すこと恰も火を消さんと欲して之に火を加へるやうなものであります。故に思慮百出して頭腦のクサク／＼する時は心機一轉して氣を換へる工夫が第一である。虚か實かは知りませぬが

備前の一心公の若君が正月初めて登城のをり、禮服を著け終りたる刹那、長押を走りながら嫁が君が小便をしかけました。嫁が君と申すと美人のや

うぢやが鼠のことで御座ります。そこで若君も御立腹になつたが鼠ぢやから致方が御座らぬ。正月早々小便を禮服にかけらるゝ様では不吉千萬、本年も六なことはあるまいと心配し不興なること此上もない。時に蜀山人が參り合せて、取り敢ず

鼠どのてんじやう人のまねをして

したたれかゝるしいの少將

と狂歌を詠み不吉を拂ひましたら若君も心機一轉して大層御機嫌よく御登城となり、其年の内に五位より四位の少將に御進みなされたといふ話しが御座ります。

禍ひも福ひも己より出ざるは無いものを、外から來るやうに思ふて吉日だの凶日だの、方位が善いの悪いのと心配し。些細のことにも御幣をかつぐ人があります。氣の毒千萬のこと、御座ります。吾等は一日も早く斯く愚昧なる迷信を捨て、家相も、方位も、人相も、御圖も、占ひも一切放下し、心機一轉して一心源頭に立歸りて禍福畢竟何れの所より來ると尋ねねばなりません。然

らざれば吾等は一生涯を取越苦勞や愚にもつかぬ吉ぢやの凶ぢやの運が善
いの運が悪いのと夢の中に夢を見て死なねばならぬ。何とつまらぬこと
は御座りませぬか。

三十六、聖賢即佛菩薩

されば吉も凶も禍ひも福ひも地獄も極樂も一心を離れて別にあるものでは
御座りませぬ。司馬温公が解禪の偈を御覽なされ

忿怒如烈火、利欲如銛鋒、終朝長戚々、是名阿鼻獄、

役にも立たぬことに腹を立て烈火の燃ゆるやうな赤い面をして猛り狂ひ、又
は慾張り根性を逞くして親子兄弟の見さかへも無く、互に鎗を削りて責め合
ひ朝から晩まで憂へ悲ひは無間地獄ぢや。

顔回安陋巷、孟軻養浩然、富貴如浮雲、是名極樂國、

如何に貧賤にして九尺二間の割棟長屋へ住むとても心に疚しい所がなくば
元氣盛んにして不義の富貴の如きは浮べる雲の如くである。これ即ち極樂

ぢや。

孝弟通神明、忠信行發軔、積善降百祥、是名作因果、

親を大切にして孝を盡し兄を敬ふて悌を致せば自然と神様の思召にも契ひ、
主と君とを大事にして朋友親戚にも誠を盡せば心なき夷人も之に服すべく、
善を爲せば多くの幸は招かずして来る、これ即ち因果の道理ぢや。

言爲百世師、行爲天下法、久々不可掩、是名不壞身、

言ふことは天下の人の師範とも爲り、行ふことは天下の人の手本となるなら
ば其徳は久しく滅びることがない。これ即ち金剛不壞萬代不易の身ぢや。

仁人之安宅、義人之正路、行之誠且久、是名光明藏、

恵み深い心は人の住むべき安穩の家にして義理の正しいのは人の蹈むべき
正直なる路ぢや。此二つを誠心にて久しく行ふが即ち大光明藏ぢや。

道義修一身、功德被萬物、爲賢爲大聖、是名佛菩薩、

教を守り正しくして一身を修め、其功德が萬民に及ぶ故に賢人とも聖人とも
いふ、是を佛とも菩薩ともいふぢや。

されば無間地獄も極樂淨土も因果も不壞身も光明藏も佛菩薩も一心の淨き沈みに外ならぬ。

孟子が

萬物皆吾に備はれり自ら反^{かへ}うして疾しからざれば樂みこれより大なるはなし

といふたのも此邊の意味でありませう。

三十七、世間即出世間

或人が温公の解禪の偈を評して

温公解禪の偈を作る、眞に佛を學んで理を明めざる者の龜鑑なり。但し其言行法るべきを以て不壞身と爲し、仁義虧けざるを光明藏と爲す。特に一時病を救ふの語にして不易の論に非ず。夫れ言行を謹み仁義を修む、世間に在ては誠に貴重すべし。然れども豈便ち是れ金剛不壞の身、大光明藏と何ぞ言の易きや。又君子は坦かにして蕩々たりを以て天堂となし、小人は

長へに戚々たるを以て地獄と爲す。理は則ち良^よに然り、亦理を執して事を失ふの病あり云々。

思ふに評者は世間と出世間とを別となして世間に在ては貴ふべきも出世間の佛法に在ては然らずと爲し、又安心を極樂とし、不安心を地獄とするは理のみにして其外に事實上七寶莊嚴の淨土があり、劍樹刀山の地獄があるといふのであらう。評者は修行未熟にして地獄の苦が恐ろしく淨土の果報が欣^{よろこ}しいと思ふ卑しい根性が失せぬと見えます。

夫れ世間の人生を捨て出世間の隱遁を求むるは修行未熟の致す所でありませう。古へより聖賢の士が教を設け世を導く所以のものは世間人生の爲めである。世間人生を離れては教も道も立つものではありませぬ。さるを世間の外に出世間なる一種高尚な道が存するが如く思ふは笑止の至りで佛法にては之を小乘聲聞と申して大いに擯斥して御座ります。また七寶莊嚴の天國や劍樹刀山の地獄の如きは無智の愚民を導かんが爲の譬喩である。例せば八面玲瓏向背なき三國一の富士の山は盲人には見えぬ故に楯鉢をふせ

て之を探らせ富士山は此様な山ぢやと示すやうなものであります。さるを盲人の哀しさには楯鉢を撫て見て其冷たく堅いのを以て富士の山ぢやと思ふて居る。七寶莊嚴の淨土ぢやの百味の飲食がある處ぢやのといふは大安心の富士の山を楯鉢で示したのであります。さるを凡愚の哀しさには死んだ先きに七寶の淨土に住み百味の飲食に飽くつもりである。何と卑しい根性では御座りませぬか。吾等は一生五十年の間飲みたい、食いたい、見たい、聞きたい、あーしたい、こーしたいと妄想分別して物慾を逞うし其上死んださきまで美しい家に住みたいの甘いものが食ひたいのと欲をかく。何と御互に愧かしいことではありませぬか。一生涯欲を逞うしたなら、それにて思ひ明らかめても宜しさうなもの、死んださきまであーしたい、こーしたいと妄想するは餘りといへば太甚しい。斯様な卑しい根性を矯め直して人間の正道に立歸り此世ながらの極樂淨土に往生せしむるが禪宗の修行であります。

三十八、直心是道場

されば東坡居士も

汝一念を起せば業火熾然たり。人の汝を熾くに非ず。乃ち汝自ら熾く。法界の性を觀するに起滅雷の如く速かなり。惟心の造ると知らば是れ地獄を破らん

と謂ひ、また道歌にも

おちてゆくならくの底を覗き見ん

如何ほど欲の深き穴ぞと

とあります。要は苦樂畢竟一心の浮沈に外ならぬことを申したので御座ります。

昔し江戸三十間堀に材木商を営みたる和泉屋甚助といふがありました。此人は虚名を貪るの病があつて、或は書物を刊行し、或は連歌を催はし、或は名ある儒者醫師等に交はり、或は歌人俳諧師其他の藝人などにも廣く交際し、又は幫間浮浪の徒にまで物品を與へて己れの名を知られんことを求めました。然れども彼は文學に疎くして到底名を揚げ難きを悟りまして己

が雅號の大申の二字をとつて大申染なる模様を作り出して、豫て彼が通へる吉原の遊女豊里といふに着せ其姿を錦繪に畫かせました。又當時有名役者中村傳九郎にも與へて大申染の衣裳を着けしめ以て世間に大申の名を揚げやうと企てました。かくて或時自ら呉服店に到り、大申染やあると尋ねますると其家の手代は大申染の名を存知ませんで、如何なる模様かと尋ねますると、大申の字を模様にしたる由を申せば、开は世に傳九郎染といふもので御座ると申しました。されば其助が苦心も水泡に歸して大いに落膽したと申します。

和泉屋甚助の如きは虚名を貪る餓鬼といふべきで、活きながら三惡道に落ちて居ります、何と憐れむべきはありませぬか。古來一能一藝に秀て名を成し功を遂げた人は決して虚榮心にもみ駆られたものでは御座りませぬ。否、劣惡ある慾望を捨て虚心平氣、無我無心になつた結果であります。

書家大橋東堤が門人に示して言へるは、草書は其始め古轍によると雖も、漸く成熟に至れば其神を融し筆を暢て至極に及び、天地の自然に委ぬ、其自然

を得んと思はば先づ心を正すべし。身心明かならずしては無我の意地に到ること能はずと云々

以て無我の心地が技能に重要なることが知れませう。

大雅堂も非常に無我の人であつて其平生の行ひは人の意表に出ることが多くありました。或時難波の方へ出立するに當りて筆を携ふるを忘れて出向きましたが、妻の玉瀾が之を見つけて筆を持って後より走り建仁寺の前にて追及しまして筆を渡せば、大雅は押戴きて、何處の御方か存じませぬと、善く拾ふて下されましたとて、叮嚀に禮を言ふて別れ去れば妻も亦何事も言はずして歸つたと申します。

此の如き無我無心なる雅人の胸中には天國の樂みがありませう。之に反して私心私欲を以て腦中に充滿せる人々は活きながら無間獄に落ちつゝあるのであります。

三十九、皆歸妙法

心學の泰斗中澤道二翁の行跡には感すべきことが多く、世人の能く知る處でありますが、此翁が悟道したる話しは特に興味の深きを感じます。

道二翁の兩親は日蓮宗の信者でありましたから父母が朝夕唱ふる妙法の玄義を知らんと志して、日夜に工夫を凝しました。然れども家業の暇なくして讀書の便り無ければ機にふれては講釋法談を聽聞して居りました。

或時日蓮宗の寺に詣づることのありましたが、堂の前に妙法の二字を書いた旗のあるを見て傍なる僧に問ふ、「妙法の二字は其義如何」と。僧は答て、「天四海皆歸妙法なり」と申しました。翁は此の答を得て益々疑を起し妙法の玄義を多くの僧に問ひ試みましたが、「妙法の義は在俗の人が深く尋ねて益なきことなり、只信して唱へられよ」とばかりにて要領を得る能はずして空しく月日を送りました。然るに或年の冬の朝まだきに、門の邊を掃き清めてゐました處禪僧の集ひ行くを見て何所に往くぞと問へば、今日西山の等持院にて東嶺禪師の說法ありとの答。依て翁は直ちに法席に參じて聽聞せられました。が禪師は說法の半に大喝一聲し給ひ、衆僧の寒氣に堪へ兼

たる氣色あるを見て、「左様なるものどもは早く還俗して商にてもせよ。修禪は覺束なし。心あらんものは各々我と我住家を尋ねられよ。魚は水に住みて水を知らず。人は妙法の中に住みながら妙法を知らず。疾く見出られよ」と叱られしを聞いて道二翁は年來の疑團が一時に氷解して、扱は題目も名號も我心の外ならず、即身金色の彌陀なりと發明致しましたのは其齡四十一歳の時ぢやと申します。これより鳥はかあ、雀はちうくと鳴く聲を聞いても鳥には鳥の妙法あり、人には人の妙法ありて一天四海皆歸妙法なりと會得したと申すことであります。

此の如く悟りて見ますれば天地間の萬物が微妙不可思議なる法を現はして居りますので、鳥には鳥の妙法あり。獸には獸の妙法あり。人には人の妙法あり。天には天の妙法、地には地の妙法、山川草木には山川草木の妙法があります。故に

松は吹く說法度生の聲

柳は染む觀音微妙の相

などと申して眼に見る處耳に聞く處皆盡く妙法ならざるはありませぬ。此妙法を神とも言ひ、造化とも言ひ、佛とも言ひ、真如とも言ひ、法性とも言ひ、法身とも言ひまするので名は異れども一つであります。然り而して此活ける佛陀の説法を聴き、造化の神髓に入り、神の靈光を感得し、真如の月を眺め、法性の樂を受くるのが禪學の修行であります。

悟入編

一、自力悟入 其一

劍法に柔なおれ、馬術にあ道まじにあれ、鎗術にあれ、其玄妙に至りては之を學ぶ人の自得し悟入するに非れば縦令親たりとも之を其子に傳ふる能はず、師たりとも之を其弟子に授くる能はざるものであります。管に武藝のみでは御座りませぬ、詩人が詩を賦し、歌人が歌を詠し、畫工が繪を畫き、彫刻師が彫物をし、大工が家を作り、左官が壁を塗り、桶屋が桶をかけ、お三が雑巾を刺すに至るまで自得し悟入す所がなければ何事もできるものではない。故に吾等は何事に就ても他人のみに依頼せずして自ら爲させねばなりません。譬へて申さば水に溺れたる人が一心に合掌して不動尊や金比羅大權現を念じて其救濟を願はんよりは寧ろ其掌を以て水を泳ぎ自ら救はんには如かぬやうなものであります。

天は自ら助くる人を助け給ふ

とは萬代不易の格言で御座ります。さるを吾等の懦弱にして依頼心多き、鬼角他人の力にて救済せられ、他人の御庇に由て信仰に入らんと希ふ所から、

吾は信仰に饑ゑたり、何ぞ速かに吾に信仰を與へざる

など愚かなる叫びを發しまするが、信仰や救済は牡丹餅や團子のやうに人に投げ與へらるゝ者ではない。這は全く竹刀を執らずして劍法を教へよと言ひ、室内に横臥しつゝ、水泳を教へよと叫ぶに同じで、眼を閉ぢて太陽を見せて呉れといふ注文よりも無理で御座ります。

世の中が暗黒に見えるのは己れに明眼が無いからで、明眼を開いて光明ある生活を爲す者は適く所として光明ならざるはありませぬ。譬へば日月の往く處は如何なる處でも明かならざるは無い如く、光明ある生活を爲して自心の光輝を發揚する人にありては到る處明かにして淨からざるは無い。

直心これ淨土なり

とは此を謂ふたのであります。さるを自己の智見を開發せずして専ら他力

のみを以て救済を得んとするは恰も眼を開かずして明かなるを求むるが如くで御座ります。

或所に輕卒者がありまして夜中俄かに病人ができたので、早く洋燈を點けろと言はれて周章ながら、燐寸を捜しました。が容易に見當らぬ。疾く〜とせきたてられて、燐寸が見當らぬから誰か早く燈火を持て来て見せて呉れ〜と大聲に呼んだと申す話があります。

己が自ら燈を點けて暗夜を照すべき位置に居りながら、他人の燈火を借りて燐寸を捜さうとは随分周章た話しては御座りませぬか。

二、 自力悟入 其二

五祖山の法演禪師といふは碧巖集に評唱をつけたました圓悟禪師の本師であります。此人が禪宗の修行を譬へて示されたる話しに

昔し世にも稀なる大盜賊がありましたが、老衰致して充分に仕事もできぬ所から、其小悴を召んで申しますには、己れは最早齡をとつて仕事をすするも

太儀ぢやから、貴様がこれから勉強して泥坊を稽古して親孝行をするのぢやぞ。時に小倅は喜びまして「御父さん、それなら己れが精出して泥坊をするから」とまめくしく申しました。「然らば善は急げといふから、今晚は貴様に泥坊の仕方しほうを教へてやらう」とて、其日の暮るゝを待つて父子して近隣の豪家へ参りました。之より老功の大賊でありますから難なく豪家の土塀を斬つて四角な穴をわけ老賊がさきにたつて其穴より潜入りました。それより中庭を横に通り返りぬけて奥の間と思はるゝ座敷の雨戸を一枚外し、此處より忍び入つて見れば長持のやうな大きな物がある。ちよつと當つて見るにズッシリと重い様子。老賊が其前に立てボンと拍手すれば不思議やピンと音がして長持の錠があきました。そこで老賊は蓋を開けて「サア作中へ這入て盗めるだけ盗め」といへば小賊は心得たりと身を躍らして中に入り、金銀財寶、手當り次第に懐ろに押込みます。此時老賊は何思ひけん、小賊の頭の上よりボンと蓋を覆ひ。以前の如く錠を卸して「泥坊、泥坊、泥坊だ」と大聲を揚げて家内の人を呼び起して己れは其儘例の穴より出て

我家に歸つて寢てしまひました。そこで家内の者は泥坊が自ら泥坊と叫ぶ聲に眼を醒し、それ泥坊ぢや逃すなど各々武器を執て走せ集りましたが盗賊は最早逃げ去て影だに無い。併し何も盗まれたる物も無いので安心致して其儘眠りに就きました。然るに小賊は長持の中に囚められ、如何はせんと案じつゝ、茲に一計を案出して、爪を以てカリ／＼カリ／＼と長持の底を掻きましたるに、妻君らしき聲として「御三や長持へ鼠がかゝつた様子ぢや。御前ちよつと起きて御覽といへば下女の御三は眠たい眼を擦りながら手燭に燈を點けて長持の傍に來り。「畜生めが長持の底に居る様子ぢや生捕にしてやりませう」と獨語。ガチ／＼と錠を開けて蓋をとれば頭の黒い大鼠がニユーと出る。御三はキャツと驚いて尻餅をつくうちに小賊は手燭を吹き消して逃げ出しました。家内の人々は再び下女の叫ぶ聲にまたも泥坊かと走せ集りて小賊を目掛けて追ひ來る。小賊は中庭に走り入りて大石一つ井戸へ投げ込み、どぶんといふ水の音に皆々盗賊が井戸へ落ちたと井戸の四方に集りたる虚隙に乗じて、例の穴から逃げ出ました。

それより我家へ歸りて見れば親父は悠々と寝て待て居りまして作貴様は如何して還て來た」と尋ねますから斯様くとありし次第を物語りましたるに老賊も大いに感じ入り。「それでこそ乃公の子たるに耻ぢぬ」と申したさうで御座ります。

却説老賊が其子に盜賊の術を教ふるに方りて老婆心切にも人の物を盗むには斯様人の家に忍び込むには斯様逃る時には斯様と一々丁寧に説き聞かせましてもそれは一通の説明だけで實地に當つては役に立ちませぬ。譬へば劍法の講義を聞くやうなものであります。依て老賊は其子をして死地に陥らしめ自ら工夫して九死に一生を得臨機應變の作略を自得せしめ悟入せしめたのである。宗門の修行も此の如くで一言半句説いて聞かせ四の五のいふて見た處が實地に臨みて役に立ちませぬ。されば學者が實際に我と我本心の主人公を徹見して如何なる境遇に處しても臨機應變の活用を爲し少しも物に動著せざる金剛不壞の心操を自得せねばならぬのであります。

三、鍊心の工夫 其一

精神を鍛鍊して不動智を研き臨機應變の自在を得たる者は古來其人に乏しからずと雖も幕末の偉人勝海舟の如きは最も有名なる者の一人であります。海舟が京師にありし時當時勤王黨と呼べる人々の中に痛く海舟を悪む者がありまして何とかして彼を殺さんと計りましたが或日四條通を過る折しも傍の物影より覆面したる武夫一人銃を以て海舟を狙ひ今しも火蓋を切らん様子なれば海舟も一時ギョツとしたれども少しも騒がず。突然件の武士の方に打向ひ狙ひがまるで外れて居る。それでは己れの體はうてんぞと手を振て申しましたる舉動の如何にも泰然自若たるを見て彼武士も其氣にや呑まれけん銃丸を放たずして一散に逃げ去りましたと申すことで御座ります。

海舟が豪懷驚歎の外はありませぬ。併し海舟は如何にして是の如き襟度を養ひ得たるかと申すに左の如く彼は自ら語りて居ります。

予が本當に修行したのは劍術ばかりぢや。一體予の家は劍術の家筋であるからとて予の父も骨折つて修行させんと當時擊劍の指南をして居た島田虎之助といふ人に就けた。此人は世間普通の擊劍家とは違ふ所があつた。島田の云ふには、今時皆人のやつて居る劍術はほんの型ばかりぢや。折角の事に足下は本當の劍術をおやりなされと。それより島田の塾に詰めて、自ら薪水の勞を取つて修業した。寒中になると島田の指揮に従ひ、毎日稽古がすむと、夕方より稽古衣一枚で王子權現に行て夜稽古をした。何時も先づ拜殿の石段に腰をかけ、瞑目沈思、心膽を鍊磨し。更に起て木劍をすぶりし。更に復元の石段に腰をかけ、再び心膽の鍊磨にかゝり。それより復起つて木劍をすぶりし、此の如きもの數回、遂に天明に至る。それより直に歸て朝稽古を爲し、復夕方より王子權現に出掛け、一日も怠らなかつた。始めは深更に唯一人森々として樹木茂れる社内に立ち居るととて、何となく氣怏れし、寒風梢を拂ふ聲物凄く、覺えず毛髮を豎てたるが、修業の積むに

從ひ、何とも感じなくなり。遂には四面寂寥の中に在て、ヒツ／＼と梢を掠める寒風の聲を聞くことが、一種の趣を添へる様になつた。時には二三人の同門生が來るともあつたが、寒さと眠さに避易し。何時も夜半より近傍の人家を叩き起して寢るが常であつた。然れども予は馬鹿正直に一度も左様の事はせなかつた。此修業の効は忽ち幕府瓦解の前後に顯はれ、千辛萬苦に堪へ得て少しも痺まなかつたのは全く此修業の御蔭である。ほんに此時分には寒中に足袋も穿かず、拾一枚で平氣であつた。寒さ暑さなど云ふとはどんな事やら幾んど知らなかつた。今此齡になつて身體も達者で、足も確かに根氣も丈夫なのは全く此時の修業の餘慶ぢや。島田と云ふ先生が劍術の奥義を極むるには先づ禪學を修めよと勧められた。それで牛島の廣徳寺と云ふ寺に往つて禪學を始めた。大勢の坊三と禪堂で坐禪をして居ると、和尚が棒を以て片端から肩を叩くのであつた。こうして幾んど四ヶ年、眞面目に修業した。此坐禪の功と劍術が予の土産

となつて後年徳川瓦解の時、萬死の境に出入して遂に一生を全うした。あの時分刺客やなんかにも逢ふたが、危難に際會して道れぬ場合と見たら、先づ身命を捨てかゝつた。而して不思議にも一度も死なかつた。茲に精神上の一大作用が存在するのぢや。人一度勝たんとするに急なる、忽ち頭熱し、胸跳り、措置顛倒し、進退度を失するの患を免るゝ能はず。若し或は退いて防禦の地位に立たんと欲す、忽ち退縮の氣を生じて、敵手に乘せらるるを常とする。

予は此人間精神上の作用を悟了し。何時も先づ勝敗の念を度外に置き、虚心坦懐にして事變に處した。それで小にしては刺客亂暴人の厄を免れ、大にしては瓦解前後の難局に處して結々として餘裕があつた。是れ畢竟劍術と禪學の二道より得たる賜であるのぢや。以て海舟が素養の深さを知ることができませう。

四、鍊心の工夫 其二

古人が心を鍊るに苦辛致したとは只今の海舟の話でも知れますが、禪宗の高僧等が身心の鍛鍊に長い年月を費やしたるは私共の意想外なるものが多く御座ります。有名な盤桂禪師の如きは自ら下の如く語つて居られます。

身供も漸く成人しまして母が大學の素讀を習はせまして、大學を讀みます時。大學之道、在明^ニ明德^ヲと白^スす所に至りまして、此明德と云ふことが疑はしく御座つて合點が行かず、濟みませいで、久しうが間、此明德と云ふものを疑ひましたわいの。儒者衆に問ひますれば、どの儒者も知りませぬ。或儒者の白^スすは、其様な六つかしい事は善く禪僧の知て居るものぢやほどに、禪僧に往て御問ひやれ。明德の事は我等が家の書に出であつて朝暮口では文字の道理をもよく言へども、明德と言ふのは何の様な物が明德やら、實に我等は知らぬと云ひまして、母があさませなんだ故に、どうがなと存じましたれど、其時分は爰許に禪宗は御座らず、聞うやうもなし。どうぞして此明德の埒を明けまして、年よつた我母にも知らせて死なせたいとかなと存じて身供が知るよりも先づ年よつた今死ぬるもしらぬ母に知らせたう御

座つて、茲な講釋、彼處の説法があると白せば、そのまゝ走り出で聞て、母の爲に尊いと聞きまして、戻りましては又母に言ふて聞かせますれども、彼の明德の埒が明きませぬ。それから思ひよりまして去る禪宗の和尚に参じて、明德を聞きまして御座れば、和尚のおしやりまするには、明德が知りたくば坐禪せよ。坐禪すれば明德が知れるとのとで御座つたに、よりまして、又直に坐禪にとりかゝりまして、そこな山へ入りましては、七日も十日も物を食へず。こゝな山へ入ては、尖つた岩の上に着物を引きまくつて、直に尻を岩につけて坐を組むが最後、命を失ふとも願ひませず。自然とこけて落ちるまで坐を起つともせず。食物は誰も持て來て呉れやうは御座らず。幾日もそれ故物をたべなんだとが多う御座つたれども、只偏へに明德の埒が明けたさに、饑いとも關いませず、苦にもなりませなんだ。でも未だ明德の埒が明きませなんだわい。

それよりして故郷へ歸り、庵を結びて安居、晝夜念佛三昧で居て見たとも御座り。色々とおがきて見ましても、彼の明德の埒が明きませなんだわい。

その如く餘り身命を惜まず、五體を摧きまして、後には尻が破れまして、坐するに殊の外難儀しましたわい。すれども今思ひますれば、其時は未だ上根に御座つた。それで痛みます故、しやうことなさに、杉原を一帖ほど宛尻の下に取りかへ敷きまして、坐しましたが、其如くして坐しましたれども、中々尻よりひたもの血が出まして、痛みまして坐しにくう御座つた所で、綿を敷いて坐することも御座つたわい。

何かどの数年の疲れが後に一度に出まして、大病者になりましたれども、明德のとが濟みませいで、只久しうの間、明德にかゝつて骨折て難儀しましたわい。それから病氣が段々と重りまして、身が弱つて、後には痰を吐きますれば、親指の頭ほどな血痰が固りまして、ころりくと丸くなつて出ましたわい。或時痰を壁へ吐きかけて見ましたれば、ころりとして落ちて落る程のこと、御座つたわい。其時皆白すは、それではなるまい程に、庵居して養生せいと云ふにつきまして、皆の者に任せて、庵居して僕一人つかつて、煩ふて居りましたが、やうく病がつまりまして、ひつしりと七日程も食が止

つて、重湯より外の物は咽へ通りませいで、それ故に最早死る覺悟で居ました。其時思ひますは、はれやれ是非もない、別に残り多い事は無けれども、平生の願望成就せずして死る事かなとばかり思ふて居ました。折ふし、一切の事が不生で調ふものを、さて今まで知らいで、無駄骨折つたことかなと思ひつきまして、やう／＼と従前の非を知つたことで御座つたわいの。それからして氣もはつきりとしませう。悦ばしう御座つて、食さげんが出て來ました程に、僕を呼びまして粥を食ふ程にこしらへよと白したれば、今まで死にかゝつて居た身供が不思議なことを云ふよと僕も思ひましたさうに御座つたが、然れども、いかう悦びまして、さても嬉しやと白して、其儘いそぎふためき粥をこしらへ煮て、僕も少しなりとも早く食はさうと致して、ろくにまだ煮もせぬ程に、ぼてつく粥を食はせました、それでも關はずに三盃先つ食べたれども、あたりも致さず、それより結句段々と日増に快氣しまして、今日まで長らへ居ますことで御座るわい。

古人は斯様に刻苦憤勵して長き年月を費やし愈々成る程と自心に悟入して

萬事がこれにて調ひ、一切の時、一切の處、少しも疑ひ無く自由を得るまで研究したものであります。さて盤桂禪師は吾々御互に具へましたる心内の明徳を發見し、不生の佛心を明めてより一切萬事不生の一つで調ふと唱へられたので御座ります。

五、鍊心の工夫 其三

不生とは一切の妄想分別を放下して精神の本然に立歸り、本具の誠徳が顯はれたる當體であります。王陽明の語に

學問の工夫は一切の弊利嗜好に於て、俱に能く脱落して殆んど盡くるも尙ほ一種生死念頭毫髮の掛帶あり。便ち全體に於て、未だ融釋せざる所あり。人の生死念頭に於けるや、本生身命根の上より帯び來る。故に去り易からず。若し此處に於て見得破し、透得過せば此心の全體方に是れ流行して礙けなし。方に是れ性を盡し命に至るの學なり。

と申しまして吾等が一切の名譽ぢやの、利益ぢやの、欲しいの、惜しいの、好きぢ

昔日に異り。兄弟牆に闘げとも外其侮を防ぐの時を知らばなり。雖、然
 鄙府四方八達、士民數萬來往す。不教の民、我主の意を解せず。或は此大
 勢に乗じ不軌を計るの徒わらば、鎮撫盡力餘力を残さずと雖も、終に其甲
 斐なし。今日無事と雖も、明日の變、誠に計り難く、小官殊に鎮撫の力殆ん
 ど盡き、手を下すの道なく、空しく飛丸の下に横死を決する而已。雖、然後
 宮の尊位、一朝此不測の變に到らば、頑民無賴の徒、何等の大變、牆内に發す
 可きや日夜焦慮す。恭順の道從、是破ると雖も、如何にせん其統、其道なき
 事を。唯軍門參謀諸君、能々其情實を詳にし、其條理を正さんことを。且
 つ百年の後公論の定らんことを泉下に期するに、ある而已。嗚呼、痛まし
 い哉。上下道隔る、皇道の存亡を以て心とする者少し。小官悲嘆して訴
 へざるを得ざる所也。其御處置の如きは、敢て陳述する所に非ず。正な
 らば、皇國の大幸、一點不正の御舉、あらば皇國の瓦解、亂臣賊子の名、千載の
 下消する所なからん歎。小官推參して其情實を哀訴せんとすれども、士
 民沸騰、半日も去る不能。唯愁苦して鎮撫す。果して勞するも其功なき

やの嫌ひぢやのと云ふ五欲七情の妄想分別を放下して精神が殆んど虚廓玲
 瓏、さつぱりと淨らかになりましても、まだ生死の事は兎角心に掛るものであ
 ります。併し生死の事が念頭に往來して居る間は充分に心の結ばれが解ぬ
 ので、此處を更に工夫して見破し透得すれば、心の全體が顯れ來りて一切の時
 と處とに自由を得る。これが眞の學問であると申すのであります。

畢竟するに本心の誠徳に立歸りて此至誠を以て萬事を處すれば事として闕
 はざるはないのであります。徳川幕府瓦解の時に方りて山岡鐵舟が勝海舟
 の使として官軍に赴き西郷隆盛と談判しましたる話を承るに、實に至誠一片
 の徳に依て百萬の生靈を塗炭より救ふことができたので御座ります。

山岡鐵太郎は君家の爲に一命を抛つて覺悟にて薩人益滿休之助と云ふ人
 と共に官軍に赴くことと相なりまして勝安房より西郷へ宛てたる一封の
 書狀を受取て参りました其の書狀の文に

無偏無黨王道蕩々矣、官軍逼鄙府と雖も、君臣謹んで恭順の意を守る者は
 我徳川氏の士民と雖も、王民なるを以ての故なり。且つ皇國當今の形勢

を知る。然れども志達せざるは天也。到_レ于_二此際_一何を疑を存せんや。恐懼謹言

山岡鐵太郎は右の書状を懐ろにして、躍然起て江戸を發し。品川大森を経て、六郷の渡船場近く往きますると、最早官軍の先鋒は旗幟堂々として進み來るを見ました。此時山岡は隨行の益満を勵まして

切りむすぶ太刀の下こそ地獄なれ

踏込行けばわとは極樂

と云ふ劍法の歌を吟しつゝ、少しも怯せずして官軍の真中を通過し。本陣と思ふ所に進むや、大音聲に

朝敵山岡鐵太郎、此度總督府に對し、歎願の筋あり罷り通る者也、此段態々申置く

と呼はつたさうで御座ります。

天下に至剛至大なる者は人の誠心であります。此時山岡の胸中には名譽もなく、利益もなく、惜いの、欲いの、あーしたいの、こーしたいのと云ふ妄想は一つ

もない。生死の問題さへ念頭には無いので御座ります。故に于戈を犯して恐るゝ所なく、兵革の中において自若たることができました。此至大至剛なる本心の至誠は天地を動かし、鬼神をも感せしむる力があります。これ孟子の所謂浩然の氣で、佛者の所謂金剛不動の心であります。龐居士が
一念心清淨、處處蓮華開。一華一淨土、一土一如來
と申したのも此意であります。

六、鍊心の工夫 其四

さて山岡は獅子が千里の野を奔るが如き勢で官軍の陣營を通過し、誰一人彼を取押へる者なく、隊長篠原國幹さへ茫然として彼を見送るのみであつたと申します。それより途を急いで駿府に到着し、直に參謀西郷隆盛に面會を求めまして、拙者は徳川慶喜の臣、山岡鐵太郎なり。先生の御高名は豫て拜承致す處で御座るが、承る處、此度は朝敵征伐として東下さるゝ趣で御座るが、全體御趣意は曲直正邪に拘はらず進撃せらるゝ譯で御座るか。將

た反亂さへ鎮定すれば、それで御満足で御座るか、何れか御決心の程承り度しと申し陳べました。其時西郷は反亂を鎮定するのが目的ぢやと答へますと。山岡は御趣旨御尤千萬で御座る。物の道理は左こそあるべし、然らば我主人徳川慶喜に於ては恭順謹慎して上野東叡山の菩提寺に閉居して罪を待て居ります。生死の程は唯だ朝廷の御沙汰次第で御座る。然るを何の仔細ありて斯く大軍を差向けらるゝので御座るかと詰問に及びました。

すると西郷は幕軍の王師に抗戦する證據を舉げて徳川慶喜恭順の實證は何れにありやと反問しました。山岡は嚴然として答ふるやう官軍に抗戦せんとするは脱走の鼠賊にして徳川家には關係する所で御座らぬ。然るが故に微臣其意を推知し、主人慶喜が恭順謹慎誠忠無二なる心事の程を朝廷に貫徹致さずば、遂に主人慶喜も亦彼の脱走せる鼠輩と同じく混視せられんことを恐れ、かく虎口を忍んで當御陣營まで推參致したる次第で御座る。願くば拙意の程、大總督の宮へ御執成し下されたしといふに、西郷は暫

時黙して返辭が御座りませぬ。

其時山岡は拙者は主人慶喜の意を代表して、禮を執つて斯くは言上するの御座る。然るを貴殿に於て此禮を御執成し下さらずば、最早如何とも詮方なし。唯拙者は一死あるのみで御座る。抑も此の如き場合に立到らば麾下十萬の士、其生命を惜まざる者は微臣鐵太郎のみではありますまい。さすれば幕府はおるか、未來日本の天下が如何なりゆくて御座らう。其れでも貴殿は進撃を御止めになりませぬか。若し果して左様で御座らば王師の戦とは申されませぬ。謹んで惟るに天子は民の父母なり、非理を明かにして、不逞を討つこそ眞の王師なれ。謹んで朝命に背反致さずと申す忠臣に對し、寛典の御處分なくんば。暗雲四方に起つて、天下愈々大亂とならん。伏て乞ふ願くば、足下、少しく御推量下されよと誠心誠意の情面に願はれましたから西郷も至誠金鐵の如き人物とて大いに感じ入りまして、御説明の程、仔細に承知仕る、依て某直ちに足下の御誠意を大總督の宮に言上して御命令を仰ぐべきに付き、御苦勞ながら暫時御休息あれと會釋して宮

の御前會議に行きました。

徳川幕府が其終を全うして亂臣賊子の汚名を蒙らず。朝廷は多くの生民を害すること無くして王政を恢復し、外は外國の覬覦を防ぎ内は干戈の慘害を受けずして新日本獨立の基礎を開きましたのは山岡が此時の一片の至誠に由るので御座ります。何と人の本心より迸り出る至誠の徳は有難い者では御座りませぬか。吾等が精神の鍛錬は無事太平で、何の憂苦も無い時に出来るものではない。

世路風霜吾人鍊心之境也。世情冷暖吾人忍性之地也。世事顛倒吾人修行之資也

と海舟が言ふた如く、人事百般の中に入出入して生死の街を往來する時にできるのであります。

七、鍊心の工夫 其五

かくして西郷は御前會議の結果として七箇條の命令を山岡に示しました。

而して如上の御命令を徳川家にて遵奉せば寛典の御沙汰にも相成べきか足下に於て御請合が出来ますと申しましたが、七箇條の中第一に徳川慶喜を備前藩へ御預け仰附らるとの箇條があります。

そこで山岡は謹て令旨を拜受する處、第一條を除くの外異議なく遵奉仕るべきも、第一條は斷じて遵奉致し難し。此儀は小臣に於て斷然御請合申難き故、願くは再度評定下され度しと懇請に及びました。

されど西郷は朝旨なればとて應せざる故、山岡は更に「試に御一考なされよ。徳川慶喜を備前に幽するなど申し聞けなば、部下譜代の士は甘んじて承知は致すまい。詰る處兵端を開いて王師に對抗すること必定で御座らう。

然る時は敵身方共同胞國民が幾萬の生靈を失ふで御座らう。抑も日本國に生を受けたる吾々が各自其主の爲に盡す所は、古今同一轍で御座る。假りに茲に拙者と貴殿と位置を變じて一論を致さんに、若し貴殿の御主人島津公が不運にして此の如き場合に立到り、朝敵の名を蒙り、官軍の討伐を受けるものと假定せば、貴殿は拙者の地位に立ち、主家の爲に盡力せらるゝに

當り、寡君慶喜が如き、處置を蒙りしならば、貴殿は黙して島津公を他人の手に任せ、異境の地に御移し成さるゝか。不肖鐵太郎の如きは死すとも主人を他人の手には渡しませぬ。貴殿は如何御考へなさるゝか」と席をうち至誠の涙を流して申しましたるに、西郷も同感の情に耐へず、良一考の上、嗚呼、足下の言はるゝ處、至極道理で御座る。及ばずながら某如何様にも徳川公の御爲を計り申さん。御心配おらせらるゝな」と山岡を慰め、異議なく盟約を畢りました。

西郷は山岡の至誠が丹心に貫徹し同情の感に堪へずして山岡が背を撫で赤心を披いて、嗚呼、足下は希有の勇士で御座る。誠の武夫で御座る。實に虎口に入て虎兒を探るとは足下の事で御座る。某は足下の大決心、生きて還らざるを察して居ります。國家の存亡は足下の肩背に掛て居る。足下幸に自重せられよ。吉之助、愚かなりと雖も猥りに戦を好む者にわらず。徳川公の事に至りては此吉之助が一身にかけて決して悪くは取扱ひませぬ。何卒此意を勝氏に傳へ給はれ」と懇々と赤誠を吐露し、肝膽を開いて語

られたと申すことで御座ります。斯の如く至誠の精魂相和し相合して維新の大業は成就せられたのであります。至誠は人の心に本來具はりたる神の力、佛の徳であります。

八、悟入の淺深 其一

禪學にて無心、無念、無欲など申しますも、ツマリ邪心なく、妄念なく、和欲なきをいふので、吾等が本然の心體に立歸りまして至誠の地に安住するを申したのであります。

昔し九川が王陽明に「近年、靜坐して念慮を屏息するを求めんと要するに、惟能はざるのみに非ず、愈々擾々たるを覺ゆ、如何」と問ふた時、先生の曰く、念如何ぞ息むべき。只是れ正なるを要す」といはれました。されば吾等が朝に夕に忘れてはならぬ事は此正念相續の工夫であります。さるを世には往々にして生悟なまざとを開きまして正念も邪念もある者でないなど、途方もない心得違ひの人があります。困つたものぢや。

凡そ悟にも愚かなる悟と賢い悟とがあります。吾等は畢竟死なねばならぬ、如何に心配しても、如何に養生しても、如何に骨を折ても死ぬるに極つて居る。されば死後の用意などするには及ばぬ。これが凡愚の悟であります。吾等は畢竟死なねばならぬ、如何に心配しても、如何に養生しても、如何に骨を折ても死ぬるに極つて居る。されば是非死後の用意はして置かねばならぬ。これが賢い人の悟であります。

人間の壽命は平均三十年位である。人生五十と見た所が短いものぢや。人生七十は古來稀なりとさへいふてある。されば食ひたい物は何でも早く食ひ、觀たい物は何でも早く見爲たい事は何でも早くするがよい。これが凡愚の悟であります。人間の壽命は平均三十年位である。人生五十と見た所が短いものぢや。人生七十古來稀なりとさへ言ふてある。されば一日も早く修行をし、一日も早く身を立て、一日も早く兩親師友の恩に報い、一日も早く立派な人間に爲らねばならぬ。これが賢い人の悟であります。吾等の命は明日が日も知れぬ命である。されば今日の中に酒も飲み、女も買

ふて置かすばなるまい。これが下司の悟であります。吾等の命は明日が日も知れぬ命である。されば今日の中に借りた物は返し、與へる物は與へ、爲るだけの義務はして置かすばなるまい。これが賢い人の悟であります。

死んだ後に靈魂などが残らう筈はない。大鼓が破れて後に其音ばかりが残らう筈はなく、唐辛が無くなつて後に其辛味ばかりが残らう筈がないやうなものぢや。況て地獄極樂などが如何して在らうぞ。されば借金はできるだけ多くし、人殺しも、姦夫も、書齋も、強盜も何でもできるだけやるがよい。未來の恐しい事は更に無いといふが愚かなる人の悟であります。

死んだ後に靈魂などが残らう筈はない。大鼓が破れて後に其音ばかりが残らう筈はなく、唐辛が無くなつて後に其辛味ばかりが残らう筈はないやうなものぢや。況て地獄極樂などが如何して在らうぞ。されば此世に長らひ居る間に邪念私欲の地獄を脱して正念安心の淨土に往生し、自ら此身を救はずばなるまいと言ふが賢い人の悟であります。

大聖ソクラテースが罪なくして愈々毒藥を飲ませられ神色自若として逝

去する時、其弟子クリトーンに向て「クリトーンよ、予はエスキュラピウス神社に牡鶏を奉納することを約せり。願くは予が爲に此約束を全うせよ。忘るゝこと勿れ」と申しました。これが最後の一言であります。ソクラテースは僅かに一羽の鶏ながら約束に背いてはならぬと思ひまして、かく遺言したので御座ります。何と有難い心掛では御座りませぬか。此心掛があつて始めて神色自若として大往生ができるのであります。

九、悟入の淺深 其二

人生を憂き世と悟り、貴重なる生命も土芥に比し、快樂を卑み、富貴を嫌ふは一種變人の悟であります。

昔しアンチステネースが破れたる着物をきて、如何にも自慢氣なる有様でソクラテースに面會しました時。ソクラテースは直ちに「アンチステネースよ、汝の服の綻びより汝の虚飾が露はれ居る」と申したまはりました。抑も眞實の悟は人間の天真に契ふ所が無くてはならぬ。單に快樂を賤しむ

富貴を棄て、金銀を土石に比したのみでは役に立ちませぬ。况や破れたる衣を着け、粗食を食ひ、犬馬の如く地上に臥するを以て高しとし、傲然として人に誇るが如きは笑ふに耐へたる事ではありません。

アンチステネースの弟子なるデオゲネースの如きは其師よりも一層の奇人でありまして、白晝に燈火を携へてアセン市中を徘徊したり、桶の中に住みて傲然として歴山大王と談論したり致しました。或時プラトーンの宴會に招れざるに自ら其席に列りまして、美麗なる敷物を土足にて蹂躪し、「かく吾はプラトーンの高慢を踏みつく」と申しました。時にプラトーンは「嗚呼、デオゲネースよ、汝は一層の高慢を以て」と申したまはりました。

如何にもプラトーンが申しました如く、デオゲネースの心中には無雙の高慢があります。禪門の人にも修行未熟なるものが往々デオゲネースのやうな行ひをする事がある。這是淺薄極まる悟で、取るに足らぬ。第一に慢心の増長して居るのが何より悪い。御互に謹むべきは此慢心であります。王陽明も

人生の大病は只是れ一傲字なり。子と爲りて傲なれば必ず不孝。臣と爲りて傲なれば必ず不忠。父と爲りて傲なれば必ず不慈。友と爲りて傲なれば必ず不信。故に象と丹朱と俱に不肖なるは亦只一傲字、此生を結果し了る。諸君常に此を體すべし。人心本是れ天然の理、精々明々、緘介の染著なし。只是れ一無我のみ。胸中切に有るべからず。有ば即ち傲なり。古先聖人許多の好處也、た只是れ無我のみ。無我なれば自ら能く謙なり。謙は衆善の基、傲は衆惡の魁なりと申してあります。

十、悟入の淺深 其三

世の中を三分五厘と悟り、人生を絲瓜の皮とのみ明めるのが禪宗の修行のやうに思ふのは大なる誤である。禪の本意は人生の眞意義を明めて人間天眞の情性を發揮するにある。ざるを禪を以て隱逸の修行と心得て、親子の情は恩愛の絆であるなど申して親を養はず子を愛せざる無情不倫のことを以て

清淨なる人間の行ひなるが如く思ふて居る人もある。道は言ふに足らざる生悟であります。

昔し或人が其父の無慈悲なるを川井東村に訴へましたるに、東村は其言を聞くや否や涕を流して哀しみました。そこで其人が如何なる次第かと尋ねますると、「汝の言ふを聞けば鼻の聲を聴くやうに思はれて甚た不祥千萬ぢや。早く此所を去り居らぬか。抑も其方は何の足を以て此所までは來たぞ。何の舌を以て父の無慈悲を訴ふるぞ。その足もその舌も皆親の遺體ぢやぞや。枝を以て根を傷け、骨肉互に相食むとは何事ぞ。これ天地の容れざる所、王法の棄する所ぢや。不祥これより大なるは無いとてまた潜然と泣きました。是に於て其人も大いに悔悟致しまして頭を扣いて罪を謝し、自ら省みて我と我身を責め、遂に孝行の人と爲りました。

禪宗の教へは天地同根萬物一體の理に基いて居ります。されば四海の人皆連れる枝で御座りまして相互に血肉を分けた間からである。况んや親子の如きは同體一身でありますのに何とて親を鹿末にして相濟みませう、親子

相愛し夫婦相親しむは人間天真の情性にして禪門の教理上是非共かくあらねばならぬ所であります。之に就て洵に有難い昔し話が御座ります。これは五井蘭洲と申す人の記しました烈女の傳であります。

烈婦栗女は甲斐國田中村農夫の女なり。幼にして孤、村長某の家に依る。村長其人と爲りを愛し、資装を與へて同村安兵衛なる者に嫁す。未だ幾ばくならずして安兵衛惡疾に染み臥して牀蓐にあり。栗、之に事へて身、非白を執り、毫も厭ふ心なし。晝は則ち夫に代つて田を耕し、夜は則ち還て之を扶助し、其暇に紡績し以て薪柴に供す。男六右衛門七十歳を過ぎ出て野外に遊ぶ毎に必ず湯茶を持し往て之を省す。遠く出て晚く歸れば必ず里門に迎ふ。一村の人相聚て嘆賞せざる者なきこと茲に年あり。嗚呼、婦人の夫に於けるや仰き望んで身を終る所なり。夫、疾んで事をこととせず、男、老いて家衰ふ、豈身を託するに堪へんや。矧んや惡疾は人情の憎む所、且子なくして年尙ほ少し。之を捨て改め嫁せざる者、天下能く幾人かわらんや。栗女は孝にして且つ義なる哉。茲に享保十三年戊申七月八日大風暴雨あ

り。川流沸騰し堤を壞り陸に襄る。田中村其下流に在り。夜中人相呼んで曰く、水將に至らんとす、之を避けて可なりと。是の時に當りて、夫、疾病四肢爛潰す。乃ち起つべからざるを知りて栗に謂て曰く、我、水に死なん。汝、疾かに避けよ。汝、我を醜とせず、湯藥の煩ひ、扶助の勤め、心に銘じて忘れず。今親、老い、汝、年尙ほ少し。幸に生を全うして家を滅する莫れ、是れ望む所なり。我、此惡疾に窘む。餘喘、惜む所なし。命且夕に在り。水に死せば則ち幸なり。汝、則ち避けよ。栗、泣て曰く、相親むこと數年、難に臨で之を委るは不祥なり。語未だ畢らざるに門外詢を且つ泣き且つ號んで曰く、水聲近し、後るゝ者は死なん。栗、乃ち男を扶け外に出て人に託して、曰く、乞ふ此翁の命を救へ。男曰く、汝、夫と與に來れ、然らざれば我、獨り生きずと。栗曰く、敬んで諾す、大人歩むこと遅し、請ふ先つ去れ、妾、良人と之に及ばんと。乃ち男の副衣及び田地典券を油紙に裹み、以て其人に託して之を遣はし、而して後室に入り。夫の側に侍し、天に誓て以て夫と死を同うす。水至り遂に溺れて死す。嗚呼、哀しい哉。

粟女が貞烈の志感するに餘りあることで御座ります。近郷の人民も粟女の志を憐みまして各々錢物を出して其菩提を弔ひ、且つ此事が公儀へも知れまして黄金若干を賜はりて烈婦の碑を建立せられ、美名を千歳に残すに至りました。世の中に何が有難いと申しても忠貞の志ほど有難いものは御座りませぬ。

十一、悟入の淺深 其四

兎角吾等の淺慕なる我身一つを以て「吾」と心得、他人は「吾」と別の者と思ふて居る。而して我身は社會の一分子として存在することに思ひ及ばぬ。是に於て乎、私心私欲を逞うするに至るのであります。抑も人間の社會は一の生物の如きもので其中に住する吾々は當該生物の身を形成する細胞のやうなものであります。人間の身體を見ますると全部細胞から成り立つて居りまして、恰も煉瓦で組み立てた人形の如くである。而して眼の細胞は常に見ることを掌り、耳の細胞は常に聞くことを司り、鼻の細胞は常に嗅くことを司り、乃

至、手の細胞は握り、足の細胞は歩むことを掌りて分業法を行ふて居る。

然れども各細胞は決して孤立して働いて居るのではない。五官も内臓も手足も協同一致して吾等の全身を組立て居るのであります。社會も亦是の如くで士農工商各分業して協同一致して働く所から一の社會が完全に成立するのであります。

例せば政府の要路に立つ人々は社會の頭腦を形成する細胞の如く、地方官は其神經の如くでありませう。然れば則ち政府の腐敗は社會の頭腦の腐敗で、全身の滅亡を誘起する原因と爲る。また學者君子の一世を指導するに足るべき人物あらば、是は社會の耳目とも謂ふべく、陸海軍の軍人の如きは社會の爲に外敵を禦くものなれば所謂社會の股肱であります。

また警官が社會を巡邏して惡漢を退治するは恰も白血球が全身を遊回して微菌を食ふが如く、農夫が食物を生産するは胃腸が身體に滋養分を供給するが如くである。又社會に率先して社會改良を企つる者は恰も肺臟が全身の血液を清新ならしむるが如くであります。

之に反して悪人は社會の腫物の如く、病毒に染みたる細胞の如く、蕪者娼妓など稱する階級の人々は人間の汚物の捨處なれば肛門の細胞の如く、また社會の一部には無爲逸居してブラリ〜と其口を送り子を作るとばかり心得て居る人々がある、彼等は或局部の細胞の如くであります。また社會には有ても善し、無くとも善し、毒にも藥にもならぬ人々がある、彼等は社會の臍であります。世の中に書畫骨董などを玩び、又は茶など沸かして毒にも藥にもならぬ事を専一にする茶人と稱する者がある、これ即ち社會の臍で、御臍が茶を沸すとは此事を指したので御座ります。

果して然れば吾等の社會に在るや決して孤立獨存して居る者でない。従ひ而して「吾」とは我身一つでは成立のできぬ者である。吾等は此理に悟入して我身一つの「吾」なる觀念を訂正せねばならぬ。然らざれば則ち吾等は社會の臍となり、肛門となり、癌腫となることを免れぬ。

譬へば人身に於て胃も腸も肺も肝も眼も鼻も手も足も全體の爲に寄與し貢獻するが如く、吾等社會の細胞たる者は社會全體に寄與し貢獻する所がなく

てはならぬ。

十二、寄與貢獻

社會に寄與し貢獻すると申しましても家を捨て親を顧みず、無暗に國家の爲め社會の爲めと號して政治運動などに狂奔するを云ふのではありませぬ。一家も修まらず、兩親に孝養するともできぬ分際で國家の事を議するとは鳥乎の沙汰で御座ります。また世に慈善事業を營ひと唱へて孤兒院ぢやの養育院ぢやの種々の計劃をして多くの寄附金を取り集め、其爲に自分は贅澤な生活をして居る人がある。這は社會の爲と謂ふよりは寧ろ自分の爲で、孤兒を養ふに非ずして孤兒に養はるる人であります。昔しの狂歌に

このみをば猿に食はせてこのみをば

猿に食はせて貰ふ猿ひき

とあります、木の實を猿に食はせて宛然猿を養ふやうであるが、其實は猿に食はせて貰ふのが猿ひきである。それと同しく身に一錢の貯も無い人が孤

兒院ぢやの養育院ぢやのと慈善を招牌にして、強ひて人より金品を募集して飯を食ふ種を作るのは猿ひきのそれと異りませぬ。さる頃或る孤兒院の寄附金募集者が一等列車に乗り、上等の旅館に投宿して、盛んに集金をして居るとして新聞紙の攻撃を受けたことがある。此等は大きい戒、ねばなりません。儒書に修身齊家治國平天下とある如く、天下の爲めとか社會の爲めとか大言を吐く前に吾等は吾身を修め吾家を齊へねばならぬ。一身の方向も立たず一家の經濟もとれず、父母妻子さへ養ひ兼ねる人々が慈善事業を起すの、國家の爲に奔走するのと何たる間違ひで御座りませう。社會の人々が皆其根本に立歸つて、一家を能く齊へ父母妻子と和合して不自由なく、一身を能く修めまして妻子を愛し、父母に孝養を盡したならば慈善事業も無用、法律も無用であります。さるを一身が修らずして悪心を起し、人の物を掠めたり、人の妻を奪ふたり、子を捨てたり、親を殺したりする。是に於て乎、法律も必要と爲り、慈善事業も必要と爲るので御座ります。されば一身を修むるのは社會に寄與し貢獻する第一の立脚地で御座ります。

昔し孔子の上足の御弟子に閔子騫と申す人がありましたが、繼母が痛く閔子騫を悪みまして、我子二人には常の綿入を着せ、騫には葦の花を綿のやうに見せて之を着せて置きました。騫は之を少しも恨むる心なくして父にも隠して居りました。或時父が見つけて大いに怒り、妻を追ひ出さんと致しました。其時騫が父を諫めて申しますに、母上が家に居れば私一人が寒いめ致すのみであります。母上が家に居らねば三人共に寒いめをせねばならぬ程に何卒勘辨し給はれといへば、父も騫が孝心に動かされて妻を留め、妻もそれより心を改めて我子よりも騫を愛するやうになつたと申します。

閔子騫は此様な孝行の人故に孔子の御弟子中にも徳行に於て、其右に出る者なく、賢人の名を得たことで御座ります。

また昔し信濃國の人が京都にて或る婦人と懇ろに相成まして、妻にせんとて召し具して國に歸りました。然るに此婦人は心浮きたる女にて京都なる他の男より數多の文を書き送りましたるを取隠して夫に知らさぬやう

致して置きました。が、隠さんとすれば却て顯はるゝ道理で、人の口には戸がたてられず、遂に其事が評判となつて、夫の耳にも入りました。夫は大いに怒つて彼の文を數多尋ね出しましたが、無學文盲の哀しさには少しも讀むことがなりませぬ。そこで我子が戸隠の山寺に居りますのを呼びよせ、繼母の前にて讀ませました。此時繼母は色を失ひ、肝も心も身に添はず、心配致して居ります。然るに此子は心ある者にて、只尋常の文のやうに、やはらげて、多くの文を讀み聞かすれば、繼母は元より父も漸く安堵して何事も無くて相済みました。繼母は餘りの嬉しさに、詠みて遣はしたる歌に

しなのなる木曾路にかくる丸木橋

ふみ見し時はあやうかりしを

とありましたれば、其子の返歌に

しなのなる其はらにしもやどらねど

皆はゝきぎと思ふ計りぞ

何と哀れに優しい心がけでは御座りませぬか。これ經に所謂一切の男子は

皆吾父、一切の女人は皆吾母と申す心で、天地同根萬物一體の理に合したる道徳で御座ります。此の如き心操は政治家の駄法螺や、外交家の權謀術數よりも、社會に寄與し貢獻する所が多いので御座ります。

十三、反省の法 其一

上述の如く、社會の爲めと云ひ、國家の爲めといふも、其根本を申せば、一身を修むるに外ならぬ。一身を修むるには何事につけても自己に反省するを第一と致します。或老婆の申しますには、昔しは鶏が皆早うから鳴いたものぢやが、今頃の鶏は無精になり居つて、只缺呻ばかりすると云ひました。此老婆は、己れが耳の遠くなつたことを省みずして、鶏が鳴かぬと思ふて居るので御座ります。また或醉漢は大酩酊を致して、座敷の真中に大の字なりに臥まして、大聲に歌を歌ふて居る、父親が見るに見兼ねて小言をいひ、貴様のやうな奴は勘當する、此家を相續させることはならぬと申しますと、醉漢は太平樂、何此家を相續させぬとか、それは有難い、此様に天井や壁のぐるぐる廻る家の相續

は眞平御免蒙ると申しました。此醉漢は己れの眼の廻るのを省みずして家が廻ると思ふて居る、何と阿呆らしい事では御座りませぬか。禪家にては回光返照と申して反省主義を重んずるは之が爲であります。これに就て有難い反省の話があります。

大和の國に喜助といふ孝子がありましたが、心學の泰斗手島堵庵を信して能く其教へを守りて居りました。喜助は父母に別れて後は我身一つを三人と心得て自己に反省致しました。其三人と申すは父は天にして我心が直に是れ父の心母は地にして我身其儘母の身而して此父母の身心を預り奉るが我であると思得たので御座ります。故に我は常に善い人と交はり、善い行ひをして、善い事を我父母なる身心に御聞かせ申し、御見せ申さねばならぬと思ひ、また悪しき事には他人が如何様に誘ふても大切なる父母を悪しき方へ作れしまゝ行くことはならぬと決心致しました。されば人が腹立さんとしたり、無理難題をいふたりしても、父母に腹は立さすまいと思ふて堪忍し、何程甘い食物がありましても過分にたべて父母を食滯させ申

してはならぬと思ふて節を守り、また心得違ひして一念の迷ひより、愚昧なることをして父母を人に誘はれてはならぬと慎みを深く致しました。其上天命に背き地獄などへ父母をやりましては相濟まぬと思ふて善事陰徳を爲すを努め、極樂へも父母と三人伴にて往けば、此上の樂みは無いと申し居りました。此話を聞く者は皆感心して涙を落さぬは無かつたと申します。

吾等の身心は父母の身心其物なることは今日の學問上少しも疑ひない所で、譬へば父母は一本の梅の木、如く吾等は其實より生じた若木、如くであります。故に假令老木は時來りて枯れましても、其生命は若木となりて再び繁茂して居るのであります。之と同様に父母は時來りて死亡致しても、父母の生命となりて再生して居るので、吾等は全く父母と三人伴で御座ります。此道理に悟入して見れば、父母のみではない、人類全體が同一生命の分身なるとが知れるのでありませう。

故に孝子たる所以は吾身一つを吾身一つと思はず、父母の身なり、父母の心な

りとして大切にしたる所にある。而して此孝子の思想を一步擴充すれば人類同胞の觀念となります。吾身を反省するは斯くありたいもので御座ります。

十四、反省の法 其二

孝子喜助は二歳にして父に別れ、八歳の頃より母を養ひて世に名高き人となりましたが、或人が彼に親に事ふるの道を問ひましたるに喜助は赤面致して中々私などは孝行など申すことは思ひもよりませぬ。只今に到りまして母が存命して居た時の事どもを思ひ出せば、あの時はかくも致して差上たなら猶ほ、喜ひ給ひしならん。また彼の時には斯く手軽く致したなら却て御心安くおらせ給ふべかりしにと、さまざまの行届かぬ事のみにて悲しき事のかす、に不孝の罪を悔むのみで御座ります。と申したさうであります。吾は親孝行ぢやと思ふ人は必ず不孝、吾は親不孝ぢやと思ふ人は必ず孝行の人で御座ります。

昔し王陽明先生の處に父子相争ふて訴へて來た者がありました。其時先生は何か御説きなさると彼の父子は大きに後悔致し、相抱いて泣き悲しみ、其儘睦じくなりて立歸りました。弟子等は此有様を見て不審を起し、陽明先生は如何なる事を彼等父子に御説きになつて斯く速かに彼等を感悟せしめましたかと問ひますると陽明先生は

『舜は是れ世間大不孝の子、瞽瞍は是れ世間大慈の父』

なるを説いて聞かせたと申されました。舜は平生吾は不孝の子ぢやから親の心に染まぬのであらう。これではならぬと反省して親を大切にし、それでもまだ孝行の仕方が足らぬと反省致しました所から、大孝の人として天子の位に登られた。之に反して瞽瞍は吾は慈悲があるのに、我子は孝行をせぬ、これ程に情けをかけてやるのに、舜は孝行をし居らぬとて、怒り惡む是に於て乎、瞽瞍は天下に不慈の父として醜名を流したので御座ります。喜助が精神の置き處は舜のそれにも契ふて殊勝なる事で御座ります。

さて喜助は然しながら我十一歳の時、眞實に母を大切と思ひ、又世の中の常な

さを知りて、萬の事の勤め易きを發明せしことを申し述べませう。此事こそ思ひ出すも語るも共に哀しけれとて涙を落して語りけるは

我十一歳の六月十九日の八時頃、母様の年久しく煩ひ給ふ病の床に入りて撫でさすりして看護してありたりしが、此日の暑さに堪へ難きまゝ汗を流し。今日はいとく暑き日なりと申し、かば、母様は我顔を見給ひて、嘸々暑かるべし。他の家の童等は皆川遊び魚釣などして樂しむに、坊は少しも我側を去らで、かゝる汚き床にありて、心づくしの其看病、其方の篤き親切は、いつの世迄も忘れぬぞよ。母も今日は快く、ちと歩みて見たき心地もあれば、坊をつれて向ふなる森に行きて涼ますぞやとの給ふに、幼心の哀しさには、我が暑きと申し、故に、母は病の苦しさを隠し給ひ我を涼まし申さんとの篤き御心とも知らずして、杖と草履を取り出せば、御片手には杖をたすけに、又片手には甲斐なき我手を力にして、門を出て、七八間も行きし時にの給ふは、坊よ、御隣より賜はりし餅が赤き器物に入てある。それを取て持ち來れよ、森の陰にて與ふるぞやとの言に順ひ速かに取り來りて四五間ほども

歸りしが、何となく胸うちさわぎ、心も心ならざれば、母が御顔を見上げしに、兩の眼よりはらりと涙を流し、いと哀しげに立ち給へば、周章驚き走り寄りて抱きつき、如何し給ふ、御心地もやわしく、おらせ給ふかと申ししに、母は我を抱きしめ給ひて、坊が如くに可愛き者がまたと此世にあるべきか。此母はかゝる病に犯されて何時死しなんも計り知られず。死する此身はさらく厭ふにあらねども、其方に別れんことの哀しくも、また我歿なば其方の嘆き如何ばかり、只これ計りが冥路の障。

人の親の心はやみにあらねども

子を思ふ路に迷ひぬるかな

とは此事かとの給ひて、よゝと計りに泣き給ふ。

其時我は母様必ずく死し給ふな。死し給ふならば吾をも共に誘ひ給へと、大聲あげて嘆きしに、母様の申し給ふには、許して呉れよこれ喜助譯もなき母が愚癡にて幼き其方を嘆かせたるが、機嫌直して此餅たべよと、一つの餅を賜はりしを我口には入れたれども。ふと母様の姿を見れば、世にもや

つれて、色青ざめ、物思ひなる顔色に、餅も咽には入り兼しが、母は我を憐み給ひて、幾つもくたべよとの給ふ。其時、幼心にも是が此世の御別れかと思はず餅を吹き出し。母様く息災に何卒長命し給へと、母にしがみつき、とりつけば、母も我を抱きしめ、たゞ聲を揚げて嘆きし折ふし、隣家の翁の來り給ひて。母を背に負ひ我を前に抱きて我家へこそ伴れて還り給ひしが、我此時誠に親の御恩の深きを知り。又これより益々母を大切に思ひて、もう今日が母に別るゝ日か、別るゝ日かと、只何事にも母を大切にし、其夜に入りて寝る前には、あゝ有難や、今日も母に別れぬ事の嬉しさよ。又明日に到れば今日が母と別るゝ日ではあるまいかと。毎日く母を大切にいたしたること、只是のみ覺えて居りますが、此外は皆々残念のことのみにて候へば親ある人々は後にて残念のなきやうに今日を大切くと、善く事へ給へかし、我は此物語申し、かば十一歳の昔しなれども、今母が此所に居給ふて抱きしめらるゝ心地が致しまするとて、疊の上に打臥して聲を放つて泣きましたれば、一座の人々皆袖を濕ほし、斯ゝる有難き物語も世にあるものかと

申し合ました。

古へより忠臣孝子の行ひを見まするに、皆此喜助の如く深く自己に反省してこれでも親の心を慰めるに足らぬ、これでも君の心を安んずるに足らぬと思ふて居る。是に於て乎、忠臣たり孝子たることのできるので御座ります。

十五、反省の法 其三

吾等が怒りに乗じて人を傷け憤りの餘り、争論を起し、哀しみの爲に身を傷り、樂みの餘り其身を忘れまするは、畢竟反省の力が足らぬからであります。

昔し弘善と申す學者がありまして、世に名高き博學多才の人で御座りまし、たるが、或時龍溪禪師に逢ひて學問の論に及びましたる所、禪師の曰く、足下秀才博識なりと雖も、皆々書生の學問にて、手近き實學大道を知らず。汝三七日齋戒沐浴して來れ。一句を以て大道を告げんと。

弘善此言に順ひて物忌し禪師の許に参じました。時に禪師の曰く、汝、謹んで聽け。我今汝に告る一句は文字言句を離れたる慈直の大道にて、之を深

く信する時は忍ち迷ひを斷し、生涯の禍ひ苦難を遁るべし。今汝に傳ふる一句は只堪忍なり。是れを守りて事に臨みて忍び難き場合に及ばば、堪忍と唱へて無心となりて直ちに後へ三步立歸るべし。必ずく此時に前に進み一念を放つべからず。此三步立歸るの堪忍より三世諸佛も出て給ひ、安樂淨土も自ら至り、參禪悟道もこれより開くと申されました。弘善之を聞いて心の内に嘲けり信するとなかりしが。それより六年を過ぎて我故郷に歸りし時、夜も深更に及びしに、我家に燈火の光り明かなれば、戸のすき間より覗ひ見しに、妻は起きて手業を爲し居り、其傍らに頭巾を被り、顔を包みたる男子の親しく妻と物語を爲しけるを見て、烈火の如く怒を發し、是れ密夫に決定せりと、劍の柄に手をかけし時に、忽然として先きに禪師の示されたる一句、即ち事に臨みて忍び難き場合に及ばば、堪忍と唱へ無心になりて三步後へ立歸れといふ教を思ひ出し。思はず後へ三步立還り見れば、先づ急ぐまじ、彼等を殺せば我も死して先祖の祭を斷絶すべしと思ひ。又三步立歸りて禪師の方に向て伏し拜み、扱もく有難や、我此一句を

得ずんば、即今身も家も失ふのみか、人の命も斷つべきを、此一句にて身を保つを得たり。これ實に大道なり、眞の學問なりと、心を靜めて戸を叩きたるに、彼の頭巾を以て顔を包みし男速かに戸を開き、大いに喜び聲どの歸り給ひぬと申し、に、妻は飛ぶが如く出迎へて殊の外に喜びました。さて男子と見えし人、頭巾を脱げば男子には非ずして、妻が實の母でありました。母は笑ふて申しまするに、我等兩人、君が留守を大切に、夜はいぬずして手業をなして費用の少なからんとを欲し。我は又夜は此の如く男子の姿に似せて、君が家を守りぬと申されました。弘善此時思はず地上に伏して、哭き倒るれば、兩人も驚きまして其譯を尋ねますと。弘善は答へて、さればなり、我年來學問を旨としながら、母子が眞實を知らず。不明にして思ある人を殺し、我も死なんとせし不學愚盲。禪師が一句の教へ無くば、何ぞかく親子三人無事なるを得んや。始めて知る博識は實に學問にあらずして、只三步立歸る堪忍の一句こそ眞實の學問なれと申して、其後は多くの弟子へ此物語を爲して人を實學に導いたと申すことで御座ります。

退身三步反省の工夫は質學の骨目で御座ります。

十六、四休四味

されば禪學の修行は他人の頭の蠅を逐ふよりも己が頭の蠅を逐ふが大事で何事に就ても常に自己に反省して中心の豫悦を失はぬやうせねばならぬ。例へば盜賊が我家に入りたりとも、賊に取らるゝ程の物品を有するは幸である。反省すれば少しも惜しむ所はない。また火災に逢ふて我家屋を灰にしたりとするも、灰にする丈の家屋を所有したるは幸であると反省すれば少しも嘆く所はない。世には盜賊に取らるゝ丈の物品も無く、灰にする程の家屋を持たぬ人が多いのであります。また不幸短命にして死することあるも、出産の後直ちに死する人あるを思へば今日迄壽命を保ちたるは幸である。是の如く萬事萬端自己に反省して中心の喜樂を失はぬやうせねばなりません。昔し孫防と申す人は自ら四休居士と號して居りましたが、或人が四休の譯を問ひますると。蠶茶淡飯他けば即ち休す。補被遮寒暖かなれば即ち休

す。三平二滿過ぐれば即ち休す。不貪不妬老いて即ち休すと申したさうで御座ります。

また昔し顔蠲と云ふ人は困難に處する四味の藥があると申しました。其四味とは、無事を以て貴きに代へ、早寢を以て富に代へ、安歩を以て車に代へ、晩食を以て肉に代へると申したさうであります。

孫防や顔蠲の如き心掛で居つたならば如何なる境遇に在りても従容たることができませう。併し如何なる境遇に在りても従容たるを得るには無求無欲のみでは充分ではありません。己れが行ひが宇宙の公道に合し、仰では天に愧ぢず、俯しては地に慚ぢずてふ確信を要します。而して此確信を得るには本心の主人公を徹見して絶対の妙理に悟入する所がなくてはならぬのであります。

十七、宋儒の悟入

既に絶対の妙理に悟入して、仰いで天に愧ぢず、俯して地に慚ぢざる行ひを爲

すならば人世が其儘黄金世界で御座ります。

隠士羅大經は山中に家居し、從容山徑を歩みては松竹を撫し。或は鹿嘯と共に長林豊艸の間に偃息し。また坐して流泉を弄すれば齒を漱き足を濯ひ。既に竹窓の下に歸る時は則ち山妻稚子ありて笥屨を作て麥飯を供す。欣然一飽すれば筆を窓間に弄して大小に隨て數十字を作り。又其藏する所の法帖筆蹟畫卷を展へて縦まに之を觀る。興到る時は則ち小詩を賦し或は玉露一兩段を草して再び苦茗を煮、一杯を啜つて出て溪邊に歩みては園翁溪友に邂逅して稻麻稔稻を問ふ。晴を量り雨を校り、節を探りて時を數へ、時に相與に劇談一餉にして歸る。杖に柴門の下に倚れば、夕陽山にありて紫綠萬狀變幻頃刻、恍として人目に可なり。牛背の笛聲兩々として來り歸る時は則ち月前溪に印するを見て樂みと爲すと記してあります。

羅大經が田園生活の興趣はさることながら、強て山中に入りて人事を厭ふの風あるは未だ徹底せざるやの感があります。若し其人にありては天下到處に山紫水明の境があり、また胸中別に乾坤を藏するの自由がありませう。

宋の大儒朱子の師なる李侗は山田に退居して、世故を謝絶すると四十餘年に及び食飲或は充たざれども怡然として自適す。親に事へて孝謹、仲兄に事へて其慳心を得。閨門の内外夷愉肅穆にして人聲なきが如く而も衆事自ら理る。親戚に貧にして婚嫁する能はざる者あれば則ち爲に經理振助し。郷人と處して飲食言笑終日油々如たり。其後學を接するや問答倦まらず人の淺深に隨て教を施すと雖も必ず自ら身に反して自得す云々と記してあります。

また鄧迪は李侗を評して、

愿中(李侗の字)は氷壺秋月の瑩徹して瑕なきが如し。吾輩の及ぶ所に非ずといひ、

朱熹は

侗姿稟勁特節氣豪邁にして充養完粹、復圭角なし。精純の氣面目に達す。色温かに言厲しく、神定まり氣和す、語默動靜、端靜閑泰たり。自然の中成法あるが如し。平日恂々として事に於て甚だ可否なきが如し。其事變を酬

醉するに及んで断するに義理を以てする時は則ち截然として犯す可らざる者あり。

と評して居ります。李侗は好んで静坐を勤め禪學的素養を積みたる人なれば其造詣も亦尋常では無かつたと見えます。

十八、絶対の靈光

宋儒中の泰山北斗ともいふべき周茂叔は胸懷灑落にして光風霽月の如しと評されたる君子でありますが、彼は平生門人をして「孔顔の樂む所、何事ぞ」と研究せしめたさうであります。孔子や顔回が樂みたる道と釋尊や達磨大師が樂みたる道と二つ別々でありますか。若し別なりとせば道が二つある譯になる。従つて其所謂道なる者は人生を一貫せる公道ではありませぬ。孔子にせよ、顔回にせよ、釋尊にせよ、達磨大師にせよ、其造詣する所には多少の淺深があるとしても、彼等が樂みたる所の道は人生を一貫せる天地の公道でなくしてはならぬ。天地の公道とは何ぞと申せば天然法爾として吾等の中心に

具はれる絶對の靈光を發揮するのであります。

昔し宋の黃庭堅が黃龍禪師に參したる時、禪師の言く「公の詣する所の書中に一兩句あり、甚た吾門の事と恰好なり。公之を知るや」と。庭堅曰く「知らず」と。時に暑氣漸く退き秋涼の生するに當りて秋香が全院に満ちて居りました。そこで禪師の言く「木犀の香を聞くや」と。庭堅曰く「聞く」と。禪師言く「吾無隱乎爾」と。庭堅欣然として悟入する所があつたと傳へてあります。

絶對の靈光は或は秋月の皎々たる所に顯はれ、或は木犀の香氣馥郁として堂に滿つる所に現はれ、芭蕉の耳なくして雷を聞いて聞く處、葵花の眼なくして日に隨て轉ずる處、風吹けども天邊の月の動かざる處、雪壓せども礪底の松の摧けざる所、竹密にして流水の過るを妨げざる所、山高くして白雲の飛ぶを礙へざる所、

の邊、

荒波や佐渡に横ふ天の川

春の海終日ぬたりく哉
の所に歴々として露はれつゝある。絶對の靈光が人間にありては中心の至誠となつて居るのであります。

昔し宋の高宗皇帝が圓悟禪師に問はるゝるに「朕、素より卿が禪道の高妙なるを知る。得て聞くべきや」と。圓悟其時奏して曰く「陛下、仁孝を以て天下を治め給ひ、率土の生靈も咸な衣被を蒙る。草木昆虫と雖も各其所を得たり。是れ佛祖所傳の道なり。此道の外、別に在るなし、若し別に有らば佛道に非ず」と

洵に圓悟の謂へるが如く佛道と世間の道と決して二つあるではない。法華に所謂

一切の世間民を安んじ、物を濟ふ、是れ諸佛の道なり

で、君は君と爲りて仁に、臣は臣と爲りて忠に、親は親と爲りて慈に、子は子と爲りて孝に、夫は夫と爲りて信に、妻は妻と爲りて貞なる所が即ち絶對の靈光が人生に露現したるにて此外に高尚幽玄なる佛祖の大道があるでは御座りませぬ。

十九、石田梅巖の行狀 其一

却説私が本書參禪道話を書きましたのは心學道話を通讀致して如何にも卑近にして俗耳に入り易く風教に益する處大なるを感じました所から思ひついたのであります。依て心學の祖たる石田梅巖先生の行狀を抄記して讀者と共に照心の鏡と致しませう。

梅巖先生二十五六歳の頃まで性を知れりと定めぬ給ひしに、何となく其性に疑ひ起り是を質さんとして彼方此方と師を求め給へども、何方にても師とすべき人なしとて、年月を歴給ひしに、丁雲老師(小栗正順)に見え給ひて、性の論に及び、先生自らの見識を言はんとし給ふに、卵を以て大石に當るが如く、言句を出し給ふこと能はざれば、茲に於て悦服し師として事へ給へり。

其後は日夜他事なく、如何くと心を盡し、工夫し給ふこと一年半も過ぎける頃、母病に臥し給ふ故、故郷へ行き給へり。其時先生四十歳ばかりなり。

正月上旬のとなりけるが、母の看病し給ひしに、用事ありて扉を出て給ふ時忽然として年來の疑を散じ、堯舜の道は考佛のみ、魚は水を泳り、鳥は空を飛ぶ、道は上下に察なり、性は是れ天地萬物の親と知り、大いに喜びを爲し給へり。

其後都に上り、師に見え給ひ、禮終りて、師工夫熟せるやと問ひ給ふ。先生對ふるに、如是くと言ひて、煙管にて空を打ち給ひければ、師曰く、汝が見たる所は有べか、りの知れたることなり。盲人の象を見たる譬の如く、或は尾を見、或は脚を見ると雖も、全體を見ると能はず。汝、我性は天地萬物の親と見たる所の目が残りあり。性は目なしにてこそあれ、其目を今一度離れ來れとありければ、先生それより、又日夜寢食を忘れて工夫し給ふこと一年餘を経て、或夜深更に及び、身勞れ臥し給ひ、夜の明けしをも知らず臥し給ひしに、後の森にて雀の鳴く聲聞えける。其時腹中は大海の静々たる如く、また青天の如し。其雀の啼ける聲は大海の静々たるに、鶴が水を分けて入るが如くに覺え。それより自性見識の眼を離れ給ひしとなり。

これが石田梅巖先生の悟道であります。梅巖先生は性を以て天地萬物の親と悟り、魚の水中を泳ぐも、鳥の空を飛ぶも、其性の露現なるを悟りましたので、吾々の申す絶対の靈光を見たので、御座ります。然れども先生は未だ天地萬物の親なる性と之を見たる先生と二つに分れて、見る人と見られる性と相對してゐたのであります。故に了雲老師が其能見所見を離れて吾と性と合して一つになる工夫を示されたのであります。かくして梅巖先生の悟道は其學問の根據と爲りまして、徳行が益進んだと申すことで御座ります。これより先生の講席を開きたる話に移りませう。

二十、石田梅巖の行狀 其二

先生四十五歳の時、車屋町通京都御池上る所東側に住居し給ひ、始めて講席を開き、表の柱に書付を出し置き給へり。其文に
何月何日開講、席錢入不申候、無縁にても御望みの方々は、無遠慮御通り御聞可被成候

何方にて講釋し給ふにも此書付を出し置き給ふ。聽衆の席は男女間を隔て、女の居る處には簾を掛け置き給へり。
天文丁巳の春、宅を堺町六角下る所、東側へ移し給ふ。始め車屋町にて講席を開き給ひし時は、朝暮ともに聽衆大方二三人、四五人に過ぎず。或時は外に人もなくて先生の交り厚き朋友ありしが、此人と只さし向ひにて講釋し給へり。又或夜の講席に門人一人のみなりければ、其門人言く、今夜は外に聽衆もなし、我一人の爲に講釋し給はんこと、其勞は、かりければ、今宵は休み給へかしと申しければ、先生曰く、我講釋を始むる時、只見臺とさし向ひと思ひしに、聽衆一人にてもあれば満足なりとて講釋し給へり。
常に説き給ひし書は、四書、孝經、小學、易經、詩經、大極圖說、近思錄、性理字義、老子、莊子、和論語、徒然草等なり。
平生朝は未明に起き給ひて、手水し、戸を開き、家内掃除し、袴羽織を着し給ひ、手水し、新たに燈を献じ、先づ天照皇大神宮を拜し奉り。竈の神を拜し。故郷の氏神を拜し。大聖文宣

王を拜し。彌陀釋迦佛を拜し。師を拜し。先祖父母等を拜し。それより食に向ひて一々頂戴し、食し終りて口をすすぎ、暫時休息して講釋を始め給へり。
暮方にも又掃除し、手水し、燈を献じ、朝の如くに拜し給へり。
梅田先生の朝暮の禮拜は、佛教の六方禮經の趣意と全く同じにて、寔に有難き行狀で御座ります。先生の如きは、其行狀が即ち學問なり、講義なりでありませうから、これより平生の行狀を少しく記しませう。

二十一、石田梅巖の行狀 其三

先生衣服、夏の常着は布晴着は奈良晒布。冬の常着は木綿晴着は紬を着し給ふ。飯は上白米にして、粥の類を食し給ふこと多し。日に一度は極めて味噌汁を調へ、魚なる一菜を調へて食し給へり。
茶は魚ならざるを平生用ひ給ふ。折々は煎じがらを漬し物にして食し給へり。

米を洗ひ給ふには一番二番の洗ひ水を、外の器に溜め置き、鼠の食物に與へ。釜に残りし飯粒は湯にして飲み。少しにても釜につきしは、善く洗ひ置き、雀鼠などの食に與へ給ふ。汁鍋汁椀の類、汁盡て後、茶を汲み入れ洗ひて飲み給へり。

菜の葉の類は腐りたる葉は捨て、枯葉は捨てずして用ひ給ふ。

稀に魚類を買ひ給ふ、其品はこわいぎこ、或は、はかり鯨、海老、この類なり。

煙草をつぎ給ふに、煙管の火皿より少しも出ることなし。

薪は細かに割つて、焼付やすきやうに爲し置き給ふ。木屑は五分一寸の木

にても庭に落ちたるは洗ひて、竈へ入れ置き給へり。付木の廣きは二つに

割きて用ひ。使ひさしたるは貯へ置き、燈をうつすに用ひ、兩三度の用にた

て給ふ。火入の火は二分三分の火にても、炭消壺へ入れ置き、て用ひ給へり。

釣繩の古繩は干し置き、て燃物とし、其灰を火入、火鉢に入れて火をいけ給へり。

是れよく火を持つ故となり。

壺の古縁はほこり拂ひにして用ひ給ふ。

平生自ら髪をゆひ給ふ。元結は洗ひて幾度も用ひ給へり。

乞食に物を施し給ふに、與ふる時は速かに與へ。又用事に取かゝりなどし

て、與へ給はぬ時は聲を高くし、與へぬよし、嚴く言ひ給ふ。是は暫くも無益

に立留らせまじきが爲なり。

箔をおきたる墨は用ひ給はず。墨の磨屑、又は硯に付きたる墨の滓をもこ

そけて、貯へ置き給ふ。是は墨にて塗るべき物ある時に用ひ給はんが爲な

り。

凡て紙にて封じたる物を解き給ふに、必ず封じめを水にてしめし、披き給へ

り。是は紙を破らぬやうにとなり。紙は少しの切片にても紙屑籠に入れ、

聊も捨て給ふことなし。紙屑を賣り給ふには、貧しと見ゆる者へ賣り、價は

買ふ者の言ふ如くに任せ給へり。

梅巖先生の天物を、鹿略にせず、一切の物に心を用ひて空しく費さざる君子の

行ひ實に稱賛するに餘りあることで、御座ります。世の年若き人々は此等の

行狀を能く熟讀して、真似られなば、陰徳陽報二つながら招かずして來る

でありませう。以上は重もに先生の儉徳の話してありますが、これよりは他の行状を記させよう。

二十三、石田梅巖の行状其四

先生、貴人へ見え給ふ時は必ず沐浴し給へり。

高貴の御方の御手跡を手本にして習ふは、下民に於て恐れ憚るべき事なりと仰せらる。

御制札の前は、笠を脱ぎ腰を折て通り給ふ。是は公の命を重んじ給ひてなり。笠をぬぎ給ふことは一町も前より脱ぎ給へり。是は人の目に立たざるやうにとなり。

先生故郷へ行き給ふには必ず宅にて沐浴して出て給ふ。道の程七里計の所なるが、故郷の宅へ着し給ふ迄は二便を便し給はず。是は身を汚さじとなり。扱故郷に至りては、先づ氏神へ参詣し、次に父母の墓へ参で、後宅に着し給へり。

衣服を脱ぎしにても足に手を觸れ給ふ事あれば則ち起て手水し給へり。

人より手紙來れば戴きて其後開き見給へり。實に其人に對し給ふが如し。舊き弟子と雖も學問に志怠れば、固く其祝儀物を受け給はざりしなり。

音物を受け、ためを入給ふに上半紙を用ひ給ふ。是は手習の清書紙にもなり、無益につひえざるやうにとなり。

小便に行き給ふ度毎に袴羽織を脱て行き給へり。大便に行き給ふには先づ小便所にて小便を便して後大便所に行き給ふ。これ大小便混すれば運送の勝手悪く農家の嫌ふこと故、かく心つかひし給へり。

先生自炊し給ふを門人憂ひて下男一人使ひ給はるべしと申しければ、それは反つて我が勞になれば無用と仰せられしを、門人強て申しければ、拒まずして使ひ給ふに、其男常に出あるき、留守の役にさへ立たぬ者なるに、其事を一言も出し給はずして、使ひ給へり。門人之を知りて此男を退け出し。

又門人の計らひにて、男を置きかへけるに、此もの柔和にはありけれども、鈍き者にて吾帯さへ得せざれば、先生結びて遣はし給ふ。また寒中に兩足と

も垢切にて痛みければ、先生痛ましく思ひ給ひ、そくひてやるべしと仰せられければ、其儘兩足をのべてそくはせけり。此男も先生の勞になれば、門人は是も退け出し、其後は先生の意に任せしかば、生涯自炊にて暮し給へり。先生嘗を見給ふに、近所の小童來りて、戯れに外より案内を請へば、答して出で給ふ。小童之を笑ひ、走り逃れて、又來り、前の如くすれば、先生もまた始の如く答して出で給へり。

先生道を往來し給ふに、夏は蔭を人に譲り、自らは日あたりを歩み。冬は日あたりを人に譲り、自らは蔭を歩み給へり。

先生が仁心の自然に行狀に現はれたる所、よく味ふて御覽なされ。人の徳行ほど有難い物は御座りませぬ。

二十三、石田梅巖の行狀其五

先生曰く仁に至るは心徳の事にて重きことなれば、急々には至られずと雖も、事の上心づかひもせず、身に苦勞もせず、財も費さずして一品や二品は

仁の行はるゝことあるべし。萬分の一なりとも行はるゝことを行へば、其程の仁となりて、善となるべしと思へり。此故に其品を書付候

道を往來する時、心がけなば、道を作るが如き世の助けと爲ることあるべし。一事を舉げて言はば、小水の道中へ流れ出るを側へせきやり置ても仁なり。

他出するに往く所を親兄弟にても、家内の者にても、慥かに言ひ置けば、人の心を安んじて仁なり。往還の道筋を言ひ置けば、迎へが遠はずして仁なり。書は御家流を書くべし。これ見え易ければ、人の心を安んじて仁なり。

傘、管笠の類に目印を書付置は、しるしの無きよりは善けれども、直に名を書付るに比ぶれば、悪し。名を書付置けば、百人が百人ながら知る。しるしなれば、百人が九十人は知らず。數多の人の心を勞して不仁なり。吾はせず。

先生曰く、田島の養ひに、多くの苦勞あることを見聞く故に、吾三十年來のかた、一日半日の旅行にも二便ともに心をつけ、厠に入て便し。又厠なき所にては、田地に便するやうに心懸けたり。是れ卑しく細かなる事ながら、吾相應の儉約と思へり。

先生何方にもおれ、茶店に休み給ふ時は、見苦敷貧しと見ゆる所に休み給ひて、茶の價は多く與へ給へり。

先生曰く、吾二十歳の頃脾胃に病ありて、養生の爲、朝夕雜炊を食す。其故か一月計りに本復せり。是によりて考へ見れば、一日に二食を以て身の養ひ足れりと思ひ、其後四十歳の頃までは、二食にて暮せり。凡そ一日に四合食ふと、三合にて足れば残り一合世界の助けと爲る。そのみならず、度々食すれば萬事につひえ多き故、二食にて暮し、残る一食分の米一合は乞食に施し來りしが、夜講釋を始めしかば、或人聲を張る者、食乏しければ、命の障となるといへり。短命にては吾傳ふる道を人に授くるの志、遂けすと思ひ、それより三食になせり。

先生曰く、われ性質理窟者にて、幼年の頃より、友にも嫌はれ、只意地の惡しき事有りしが、十四五歳の頃ふと心付て是を悲しく思ふより、三十歳の頃は大概に直りたりと思へど、猶ほ言の端に現はれしが、四十歳の頃は梅の黒燒の如くにて少し酸があるやうに覺えしが、五十歳の頃に至りては意地惡き事

は大概なきやうに思へり。

先生五十歳の頃までは、人に對し居終ふに、何にても意に違ひたる事あれば、苦り顔し給ふ様に見えしが、五十餘になり給ひては、意に違ひたるか、違はざるかの氣色少しも見え給はず。六十歳の頃我今は樂になりたりとの給へり。

是れ先生が漸く修行熟して聖賢の域に入りたる證で御座りませう。願くは先生の如き行狀を學びて進徳の工夫を致し度いもので御座ります。

(天尾)

編 入 悟

練心
修道
參
禪
道
話
終

明治四十一年一月三日印刷
同 年一月十六日發行

(定價金四十錢)

忽滑谷快天

山中孝之助

守岡功

東京市京橋區築地三丁目廿番地

株式會社 國光

東京市京橋區築地三丁目廿番地

山中孝之助

東京市京橋區築地三丁目廿番地

會社 積文

大阪市東區北久太郎町四丁目



關西賣捌所

發行發賣所

上宮教會
出版部
非泷堂

井 瀾 堂 發 賣 書 目

文學博士 村上專精先生序 大内青樹先生跋

加藤 咄 堂 先生 著 **○補死生觀** 全一冊 定價金四十錢 郵税金八錢

死生は人生の一大事實にして千古未解の問題なり。本書は古來哲人の精鋭なる思索と英傑傑の決死の覚悟とに照し、小説と事蹟との両方面よりこの問題を解決したるものにして、其論證文章明晰大に江湖の喝采を博し、茲に第十五版を發行するに當り、更に死生雜話數十題を加へ、其邊を補ひ本問題を論明せんとす。乞ふ一本を購ふて此千古未解の問題を決せよ。

文學博士 前田 慈 雲 師 序
文學博士 南條 文 雄 師 跋
加藤 咄 堂 先生 著

○運命觀 全一冊 定價金卅五錢 郵税金六錢

人は運命の兒なり。榮枯盛衰其爲めに左右せらるる抑運命とは何ぞや。本書は著者の新なる論を以て、運命論を學破し世界各民族の運命に關する風習を擧げ、運命なる運命の眞理に、新運命觀を建設して個人、國家、社會の運命を論じ終りに人生の眞理を解し、これを開拓策を説き、此運命論を論じて成功の地位に達せるの實例を示す。讀め浮世の波に漂はるるの士、來れ開運の徳を得んとす。の徒本書は成功の秘訣なり。開運の守符なり。

文學博士 井上 圓 了 師 序 島地 默 雷 師 跋
加藤 咄 堂 先生 著

○女性觀 全一冊 定價金卅五錢 郵税金六錢

美神の權化として崇拜すべき、照鏡の化身として厭忌すべき、本書は流麗の文と獨特の觀察とを以て、女性觀の歴史上の活動を描き、實質的觀察の奇蹟より名媛才女、佳話並に闇黒面の女性に及ぶ解、解、解等の問題を究り、社會上の地位を明し、更に戀愛、結婚等の心理的現象を示し、筆を女性の教育、結婚の養成に關し、解、解、解の一讀を喜む勿れ。

井 瀾 堂 發 賣 書 目

加藤 咄 堂 先生 著

○修道講話 全一冊 定價金四十錢 郵税金六錢

道を行ふは人生の本務にして道を修むるは品性の向上なり。本書收むる所、曰く求道の精神曰く安心の風範曰く修養の道程曰く宇宙と人生曰く生活の趣味等、これ人生の本務を説き品性の修養を語るもの、更らに道とは何ぞ、人心の秘奥、煩悶と社會の各節あり終りに修道漫録を付して、逸話格言等日常修養に資すべき材料を載す。文章平易にして趣味深し、眞にこれ修道の好指針なり。

加藤 咄 堂 先生 著

○小靈 光 全一冊 定價金五拾錢 郵税金五錢

先生著書既に等身、しかも未だ筆を小説に染めず頃者感ずる所ありつて此の一篇を作り、現代社會の實生活を描寫して、人心の機微に觸れ、黒闇々中に不斷の靈光を認めしむ眞にこれ明治文壇の一異彩。

加藤 咄 堂 先生 著

○演說應用修辭學 全一冊 定價金拾錢 郵税金八錢

文名噴々江湖に知られたる加藤咄堂先生は又我が國風指の雄辯家なり、本書は先生が多年の經驗と修辭の原則により、演說並に作文に關する原理を説述して、其應用を示し、言語の組立、音聲の抑揚、文章の組織、推敲の工夫に至るまで、叮嚀反覆に之れを説明し、古今東西の文話、并に演說家の經驗談を加へ、實益に染めるに趣味を以てしたる近來稀に見るの好修辭學たり。

加藤 咄 堂 先生 著

○通俗佛教要義 全一冊 定價金二圓卅五錢 郵税金八錢

本書は著者が多年の研究を傾け盡くして、浩瀚なる佛教の要を簡明に著して、佛學の概略を述べ、高遠なる教理を示すに平易明快の筆を以てし、何人にも知り易く、解し易く、談話體に説述し先づ佛教以前の印度哲學より釋迦牟尼の傳説に入り、大小乘の區別並に其發達變遷を説き、教理を示しては佛教の宇宙觀に筆を起し、宇宙は如何にして成立せしや、又宇宙は如何なるものなるや、其現象は如何にして成せしや、人生問題に於ては生死の根原生前死後の状態、靈魂の有無、輪廻轉生等を明し、其の道徳を説いては性の善惡並に善惡の標準を論じ、世出世の道徳、因果の原理を示し更に煩惱の深底を盡くして、世出世の道徳、戒律を精微して、地獄極樂の説に及び身心の關係より識心の狀態に入り、秘密に其分類的を説きて、唯心所具の順序を示し、深く三界唯一の秘密を述べて、無舌の及にざる、佛教の眞理高妙なる境を現はしめ、苦を離れて樂を得、迷を轉じて悟を開く、佛の要義は網羅して洩すことなく、更に佛の發達史を説くに至りては各宗派の特色を示し、教理を擧げ、終りに其一貫の理を論じたる空前の好著なり。請ふ一本を購ふて佛教の妙理を味はれむことを。

加藤 咄 堂 先生 著

○心的英雄史 全一冊 定價金五十錢 郵税金八錢

本書は古今の英雄を拉し來りて時代の推移と思想の變遷を觀察し、波瀾あり抑揚ある彼が行動の裏面には如何なる思案ある心的生活の存在を説破したるものにして、其名は英雄傳たりといへども、實は是れ武士道發達史なり、思想變遷史なり、英雄傳たり。歴史を讀むに當り、是れ小説に優り教訓を含むことは倫理書に過ぎたり。

理學士 石川成章先生著

○宇宙の默示 全一冊 定價金七拾錢 郵税金八錢

石川先生は我が國有数の科學者たると共に、又熱烈なる宗教信者たり、宗教眼を以て自然を觀察し、科學眼を以て宗教を評論す。天に閃く星辰、地に彩る山川、皆自然の妙音なり、宇宙の默示たるならむや、先生流麗の筆を以て之れを寫し、時に人生の情熱を論じ、自然の光輝を説明し、時に水火の作用を説いて人心の煩悶を寫し、時に自然を示し、時に地球の生命を論ずる所何人か、美妙に描寫し、其秘密に隨喜せざらむ、苟くも宇宙人生に疑を抱くの徒、希くは本書の妙音によつて大悟する所あり。

理學士 石川成章先生著

○自然の妙趣 全一冊 定價金四十錢 郵税金六錢

「春有百花秋有月、夏有冷風冬有雪」自然の妙趣は吾人を教訓し吾人を啓蒙す、本書は著者が學博なる科學的知識を以て熱烈なる宗教的信仰を鼓吹せられたるものにして、天地の妙趣宇宙の奧趣をめて一卷にあり。

新佛教徒同志會編

○來世之有無 全一冊 定價金二十錢 郵税金四錢

現代の名士二百餘名が來世の有無につき、回答せられたるものにして、實に之れ空前の珍品なり。
加藤弘之、佐治實然、志賀廣邦、井上哲三郎、木下尚江、幸田露伴、前田慈雲、渡邊四武、津部運吾、井上圓了、島田三郎、南田文雄、村上專精、谷本武、三島中洲、三輪田真佐子、湯本武比古、月水寬人、海老名彌正、平井金三、中島力道の諸君外九十餘名家

醇庵 鈴木芬太郎先生著

○犯罪論及女性犯人

●判例全一冊總ク羅斯美本 定價金二圓半錢
●紙數五百五十ページ餘 郵税金八錢

犯罪とは何物か犯人とは何者か女性とは何者か女性犯人とは何物か本書は此等問題に答へんが爲めに犯罪學、犯罪心理學、犯罪社會學の見地に據り、罪の根本哲學を開立し、世の法曹家の犯罪及犯人定義に一大動搖を興へ、女性犯人に就ては其解剖的及生理的特狀を詳説し、其人相、毛髮、乳房、生殖器等、官能、衝動、感覺、色慾、文身、如き亦之を遺傳の法に商榷し、或は模範の理に依りて先天犯罪者熱情犯罪者其他の分類下に於ては各其特質を列擧し我國最近の犯罪事件を具體的に參考し、以て理實配合の巧を究て遺花の微を開き人情の細に入り、女性の秘密を暴露し其罪惡を檢察する處、罪惡の因果、素超凡洵に之れ、科學の精華文學の上乗たり而して考證は則、罪惡の一家に出入し、論斷は則、浮薄を避り一言一句悉く根底あり、犯罪學の一大體統、新刑法學派の一大柱礎、理論深遠風神、崇高の一大文章、此書を指して現世の一大產物、思想界の一大革命と云はずんば將た何物をか指さん實に破天荒の奇書也。

前東京高等師範學校教授 小山左文二先生著

○日本文法の解語及練習

全一冊 頁八百ページ餘 定價金十錢 郵税金八錢
大學理科、男女兩高等師範學校、各種高等專門學校入學受檢者、並に文部省教員檢定受檢者參考書として、中學校、師範學校、高等女學校の學生及び小學校教員檢定受檢者の參考書として、著者苦心の作に係る。解説周到にして明快、練習するところの練習問題實に一千五百餘、添ふるに明治三十年以降本學まで八年間に於ける各種高等學校入學試驗文法及び明治十八年以降本學まで二十年間に於ける文部省教員檢定試驗文法問題の全部を以つてし、一々適切にこれを解説指導せり。

文學博士 三宅雄二郎先生著

○小泡十種 全一冊 定價金四十五錢 郵税金六錢

流れては清澄澄きる大河となり、散じては繽紛限りなき飛沫となる、小泡が激瀾を益し近代稀有の快著なり。

久米邦武先生著

○上宮太子實錄 全一冊 洋裝美本 定價金七十五錢 郵税金八錢

本書は高麗遠征を以て東洋開歩の標ある前大塚教授久米邦武先生が著したる史實を詳載する見解を以て、日本文明の開拓者たる聖德太子の實蹟を詳載し、荒唐不稽なる従来の傳説を破り前人未嘗新見を以て其眞面目を發掘し、太子を中心として政治、宗教、文學、美術の各方面に亘りて日本文明の淵源を深し其特色を説きて刺す所なく、論は東西に及び、諸は古今を悉く、眞にこれ多く得べからざるの珍書なり。與國の氣運今や然して人は皆な我が文明の眞相を知らしむことを思ふ。本書の出る豈に偶然ならむや。

杉村 縱横 先生 補譯

○改訂強肺術 全二冊 定價金四十錢 郵税金四錢

肺病を恐る、ものは強め、肺病に罹れるものは強め、歐米に於ける最新式の長力強肺法を以て、此書に六の特色あり。
第一、時間を要せざること。 第二、費用を要せざること。
第三、場所を要せざること。 第四、努力を要せざること。
第五、百文一紙なること。 第六、總より假名付なること。
故に男子は勿論、婦人小兒と雖も、容易に理解し、容易に實行し、而して確實に其功を収め得べし。

新公論社編 ○附録學生消夏法

○男女學生氣質 全三冊 定價金廿錢 郵税金二錢

該書は坪内雄城、柳橋浦子、幸田露伴、村上專精、三輪田真佐子、佐治實然、山脇ふさ子、奥村五百子、鳩山春子、水田麻一、雨條文雄、小杉天外、山縣節三郎、前田慈雲、井上圓了、島田三郎、松村介石、渡邊彌一、戸川瓊花、鈴木芬太郎、石黒忠憲、運塚隆六、中川謙次郎、南岩有具威、柳橋一、寺田勇吉、ノオスター、坂本盛徳、加納久宜、古川流泉、田中治六、加藤咄堂、境野實洋、中島徳蔵、下田次郎等の大家が、現代男女學生の長短兩方面を觀察し、その長所を助け、その短所を補ふべき方法を示されたるものなり。

黒岩周六先生 講演 丙午出版社編

○人生問題 全一冊 定價金五十五錢 郵税金八錢

人生とは何ぞや、是れ千古の疑問なり、哲人之を説き、碩學之を論じて、而して懷疑の雲霧密に、苦悶の人愈々多からむとす、然るに現代思想界の泰斗、黒岩先生、自ら人生問題に達着して、疑問の源泉を探り、大に其真趣を得て、茲に此書あり、叙る所、神の有無に始まり、人生の悲觀樂觀に終る、眞に天賦の妙音なり、世の悶ある人、疑ある人、迷に來つて此福音に接せよ、庶幾くは平穩と満足と活力とを得て、進く日光ある人生に觸着する、とを得ん。

文學博士 松本文三郎先生著

○宗教と哲學 全一冊 定價金四十五錢 郵税金八錢

本書全篇十有餘章、一書を宗教と哲學との根本問題に起し、宗教道徳研究と信仰等次第を逐つて遂に健全なる宗教の基礎は哲學的論據にある事を闡明し、蓋し病弱なる現代思想界は此書に因りて始めて元氣の回復を求め得るなり。

獨逸博士 ボール、ケイラス先生著 鈴木大拙居士譯

○阿彌陀佛 全一冊 定價金卅五錢 郵税金四錢

阿彌陀佛とは何ぞや、是れ佛敎の根本問題也ケイラス博士その影響を揮ひ殆ど小説的結構を以て通俗にこれ解釋を試み宜なりその歌米、讀界に好評噴々たること、や弊黨頃者十年博士と居を同じうし最も博士と親善なる大拙居士を煩はして此和譯を得たり、登佛の有無に感ひ心の不安に關ふる人のみ、これを讀むべしと言はむや。

文學博士 前田慈雲師著

○修養と研究 全一冊 定價金五拾錢 郵税金八錢

博覽高識教鞭を帝國大學に執りて幽を剛き襟を穿ち、温厚篤實感化を東都の青年に垂れて一世の模範となれるは前田先生なり、本書は先生が多年の研究に於ける佛敎教理上の大論文と依りて、深厚なる談話をか集積したるものなれば一度本書を讀み、か親しく先生に接して指導を受くるの感あるべし。

文學博士 前田慈雲師著

○蓮如上人 全一冊 定價金卅八錢 郵税金六錢

佛敎界に最も多くの特色異彩を放ちつゝある、純他力敎眞宗の大成就たる蓮如上人に就て、前田博士が、該博の學識と、燃犀の史眼とを以て、上人の時代、性格、敎義、信仰、事業、感化等のあらゆる方面に涉り、徹に入り、細を穿ちて、評傳せられたるものにして、上人の眞面目は、歴々として讀者の眼前に活躍し、純他力敎の眞髓は、一讀の上に了解せらるべし。

24/7/41

井 測 堂 發 賣 書 目

文學博士 南條文雄師著

○修養錄 全一冊 定價金四十錢 郵税金六錢

此書は、道心堅固の開きである。南條博士の實踐的修養を詳細に記述し、著者は本書より、章を分つと六、節を分つと二十、著者の得意の趣味ある談話は細大漏さず擧げて本書の中にある。人生問題の解決に悩める者、若くは樂しき生活を送らんと欲する者は速に來て本書を讀み給へ。本書は蓋し煩悶者の慰藉劑なり、求道者の好資料なり。

文學博士 南條文雄師著

○感想錄 全一冊 定價金四十錢 郵税金六錢

本書は博士平生の感想なるものにして或は古人の訓誡を示して後進を誘接し或は博士自身の感話あり偉人豪傑の逸話あり時に佳話に因て教を垂れ時に武道を語り時に信仰を談じ加ふるに修養十則を以て其實に之を精神修養の好指針品性陶冶の良資料なり。

文學博士 南條文雄師著

○忘己錄 全一冊 定價金四十錢 郵税金六錢

佛教の信仰は己を忘れて佛陀の大慈悲に歸命するにあり本書は博士多年の靈的實驗に徴し他力宗教の眞髓を脱然したる者なり行文平易にして所説飄蕩面たり博士の聲咳に接する思ひあり一體よく頌揚感服を感ず。

文學博士 南條文雄師著

○人道 全一冊 定價金十五錢 郵税金四錢

人の道とは如何なるものぞ本書は博士が儒教の骨髄たる仁義五常の道より宗教の極致たる經典の所説とを對照し叮嚀切に人道の大意を示されたるものにして博士の學識加ふるに適切な譬喩を以て談話體に何人にも解し易く説かれたるものなれば本校師の必考たり修養の資たる傳道的好施本なり。

文學博士 南條文雄師著

○怪傑マホメツト 全一冊 定價金五十錢 郵税金八錢

序論にはアラビヤの奇風異俗抱腹絶倒すべき詩趣津々たる者枚に舉に述べらるる本論には宗教家としてマホメツトが道々凌辱の中に隱微默示する預言的高風を叙し更に將軍として馬が千里の馬に跨り屍山血海を踏破する雄姿を描き進んで政治家としての怪腕鬼神を述べ最後に眞が個人として起居動靜の項より門閥の秘事に至る迄悉く詳記して録々赤録々たる眞面目を現はす我國空前の大著なり。

曹洞宗管長 森田悟由禪師序
加藤咄堂、峯玄光兩先生共著

○禪觀錄 全一冊 定價金三十錢 郵税金四錢

禪とは何ぞや曰く言ひ難し本書は言ひ難きの禪を説き盡して餘蘊なく更に發して武士道の根柢となり擬つて文學技藝の精華となれる事蹟を描寫し逸話あり漫筆あり神韻縹緲一讀を飽く能はざらじ。

曹洞宗大學講師 忽滑谷快天師著

○禪學講話 全一冊 定價金四十錢 郵税金六錢

適切簡明以て精神の修養に資する者は禪也。古往今來、偉人哲士の眞骨髄を鍛練したるものは禪也。痛言快語以て人生の眞意を指示し、處世の妙諦を説く者は禪也。本書は人生の謎以下各章、明快の說、有餘の筆、禪の眞髓を發揮して餘蘊なし。

曹洞宗大學講師 忽滑谷快天師著

○禪の妙味 全一冊 定價金四十錢 郵税金六錢

上篇は精神清静の妙味を論じ苦樂昇沈の中に處する實學の工夫を示し百年の煩悶を一掃すべく下篇は觀性の妙味を説き唯心觀あり真有一體觀死生透脱觀に及び千古の惑を破るべし眞に禪學者の眞師たり。

曹洞宗大學講師 忽滑谷快天師著

○批判禪學新論 全一冊 定價金五十錢 郵税金八錢

本書に收むる所唯心論現象即實在論物心合一論萬有體論安心立命論の五章は禪學の根柢を論明して餘蘊なく以て禪學史上一新時期を劃するに足る最後に禪語略解を附し初學者の參禪に便にす。

建仁寺管長 竹田默雷禪師著

○默雷禪話 全一冊 定價金五十錢 郵税金六錢

切實なる活潑法あり時に無邪紅なる憤懣あり一度本書を讀みんか禪師の聲咳彷彿として紙上に活潑せり若し夫れ禪師獨特の三十棒に至りては偽善と輕薄の現代學者を罵倒し盡くして完膚無らしめ覺えず快談を叫ばしむ。

原 坦山禪師著 荒木磯天講述

○禪學心性實驗錄 全一冊 定價金四十錢 郵税金六錢

本錄は禪門の奇傑ハ坦山老師が三十有餘年の實驗、其き迷悟の本體を體察の二箇に歸し感觸の同體を論じ體察の眞性を道破したる片にて、禪が及び、理學心理學上人革命を惹起すべき新說なり老師が一代の功過は係りて此一書にあり。

文學博士 村上專精先生著

○自信錄 全一冊 定價金五十錢 郵税金六錢

これ博士の新著にして又其に博士が信仰の告白なり言々己の實驗を語り句々心の眞底を披露すまづ筆を「人生の目的」に起して「目的の成否」を明にし「實在と我れ」「佛陀と我れ」の關係より「自力と他力」の異同に及びて之を結ぶ五章廿七節説いて至らざるなく述べて盡さざるなし進歩せる佛教學者の見解は此の書によつて廣く深く敬虔なる佛教信者の態度は此書によつて知るを得べし。

井 測 堂 發 賣 書 目

井 瀾 堂 發 賣 書 目

加藤唯堂、境野黃洋兩先生
文學士 蘭田宗惠師共著

○佛教講話 全一冊 定價金四十錢 郵稅金六錢

本書加藤氏の組織的佛教境野氏の歴史的佛教蘭田氏の實踐的佛教の三講話より成り三方面より三氏が佛教を觀察し何人にも解し易く講述せられたるものにして教理、歴史、道德等舉げて盡さるなき好著なり。

東洋大學講師 釋清潭先生著

○寒山詩新釋 全一冊 定價金五十錢 郵稅金八錢

是れ佛の是れ仙の是れ狂漢の得て解すべからざるものは寒山詩なり是れ風韻の是れ詩語の是れ佛語の得て解すべからざるものは寒山詩なり宜なり千古の疑團牢固として抜けざることや著者精深雄大の學と才とを以て一筆勿斷彼が面目に於てか露白す寒山詩解を知らむと欲するものは須らく此書を以て指南車と爲すべし。

清水放默爾先生遺稿

○紫風全集 全一冊 定價金貳圓 郵稅金拾貳錢

清水君は教界の元勳島地默爾師の第二子にして其篤學能文既に世に定評あり往年大志を懷きて印度に留學し佛教梵典の研究に従ひ又大谷光瑞師が佛蹟大探險の壯舉に加はりて功績頗る大なる者ありしが不幸にして未だ大に其所得を世に施くに至らずして異境に病没す知友之れを哀しみ其生前遺作せるところを集めて茲に之を公にす論文あり俳句あり漫録あり再簡あり悉くこれ金玉の名文君が天才的簡潔の傑として輝けるを認め得べし。

理學士 石川成章先生著

○自然科學と佛教 全一冊 定價金十五錢 郵稅金四錢

科學宗教共に思へ人生の管絃心界光明其間奚ぞ微妙の關聯ならんや著者獨特の洞筆を呵し多年の涵蓄を叙述せられたるものなり諸士夫れ此妙旨を味ふるに後るゝ勿れ。

建仁寺管長 武田默雷禪師著

○續默雷禪話 全一冊 定價金四十五錢 郵稅金六錢

本書は臨濟の師家武田默雷師の談話百則を收む皆是れ平話俗談の神奧なき所却て棒喝あり教訓あり修養あり讀むもの此の間に自ら體機を拈じ來らん。

文學博士 前田慧雲師著

○禪榻茶話 全一冊 定價金五拾錢 郵稅金六錢

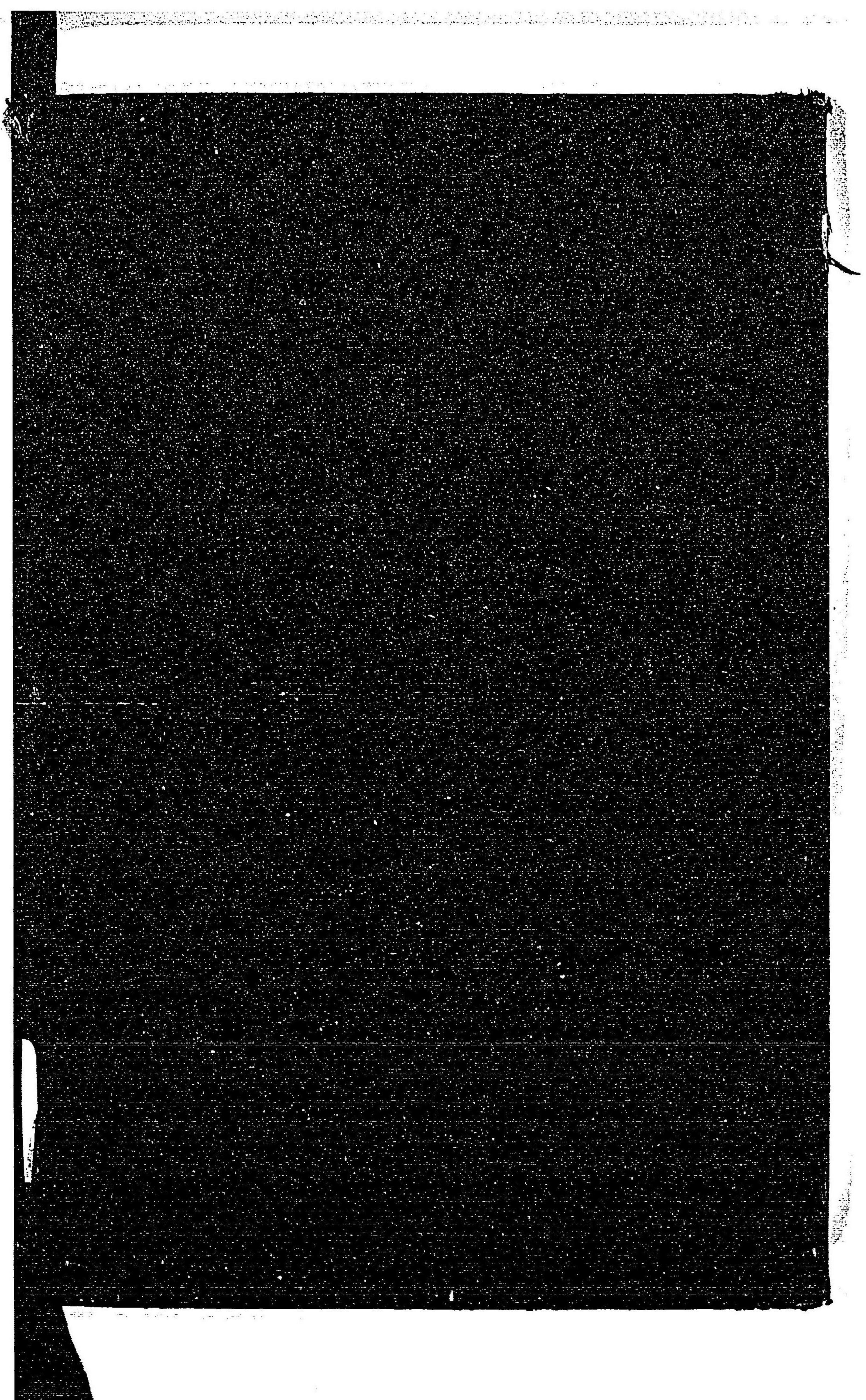
短篇長篇五十餘篇修養の要諦を説き信仰の妙味を談じ學藝の精蘊を提げ古今の人物を評し箇々の話頭深厚の教訓と無限の興趣を感ぜしむ。

文學士 渡邊又次郎先生著

最新論理學 印刷中

文學士 榎橋 杉村先生著

七花八裂 印刷中



324
65

(M)

019461-000-2

324-65

参禅道话

忽滑谷快天/著

M41.1

ABG-0182



